

平成20年度版 みんなの福祉読本

ちきゅうのなかま

指導手引書



長崎県・長崎県社会福祉協議会

目 次

はじめに	2
I 福祉教育について	3
I 福祉教育の求められる背景	5
II 福祉教育の目標	6
III 福祉教育の方法	7
II 福祉教育指導展開について	9
I 小学校における福祉教育の進め方	11
1 福祉教育についての基本的な考え方	11
2 福祉教育の位置づけ	11
3 小学校における福祉教育の理念と目標	14
4 発達段階に応じた福祉教育のあり方	15
5 「ゲストティーチャー」から「協同実践者」へ	16
6 福祉教育実践における評価	16
7 福祉教育に焦点を当てた各教科等における取り組みの視点	17
8 福祉教育の視点に立った各教科等の具体的指導例	19
9 「障害者理解」「高齢者理解」「ボランティア活動」「ボランティア学習」について	27
II 「ちきゅうのなかま」学習指導展開について	30
1 第1章 暮らしを支える福祉社会のしくみを調べてみよう	30
(1) 題材「ちきゅうのなかま」	31
2 第2章 お年よりが安心してらせるまちづくりを考えよう	33
(1) 題材「おじいさんに習った竹とんぼ」	33
(2) 題材「お年よりの生活を知ろう」「年をとるってどんなこと」 「お年よりと交流をしよう」	35
3 第3章 障害のある人が自分らしくらせるまちづくりを考えよう	39
(1) 題材「ぼくのゆめ」	39
(2) 題材「おとなになっても」	41
4 第4章 ボランティア活動で幸せなまちづくりを考えよう	45
(1) 題材「一枚の手紙をとおして思ったこと」	45
III ボランティア学習指導展開について	49
1 第1章 暮らしを支える社会福祉のしくみを調べてみよう	49
2 第2章 お年よりが安心してらせるまちづくりを考えよう	55
3 第3章 障害のある人が自分らしくらせるまちづくりを考えよう	64
4 第4章 ボランティア活動で幸せなまちづくりを考えよう	74
5 ワークシート集	82
IV みんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成に協力された方々・機関・団体	83

はじめに

みんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」教師用指導手引書を一部改訂し、平成20年度版を刊行いたしました。県下各小学校4年生の先生方が、「ちきゅうのなかま」を主たる教材として、福祉に関する学習を展開する際に参考にしていただきたいと編集したものです。

この教師用指導手引書には、福祉教育への理解と課題への認識を一層深めていただくこと、そして、福祉教育の充実を願って「福祉教育の求められる背景」「福祉教育の目標や方法」について解説いたしました。また、実際の指導に活用していただくために、「小学校における福祉教育の進め方」と「ちきゅうのなかまの学習指導の具体的展開例」及び「総合的な学習の時間における学習指導の展開例」を例示しました。

平成14年4月から実施された「総合的な学習の時間」においては、学習内容として福祉の課題も取り上げられることだと思いますが、重要性が認識されてきた福祉体験活動や障害のある人やお年よりとの交流活動が、更に活発に行われ、充実した実践の継続が期待されます。このような状況も踏まえて、「ちきゅうのなかま」の展開例を検討したつもりではありますが、各学校の創意工夫によってさらに、効果を高めていただきたいと願うものであります。

どうか、この教師用指導手引書をもとにして、福祉読本「ちきゅうのなかま」を小学校4年生の福祉の学習に活用され、子どもたちの福祉に対する理解・関心を高め、福祉の心を育て、実践的態度を高めてください。さらに発展的に、福祉体験活動へと進むようにご配慮いただきたいと思います。なおその際、子どもたちと障害のある人やお年よりとの直接交流によって、障害のある人やお年よりを理解させるようご指導ください。

本手引書は、研究不十分な点も残していることと思いますが、現場の先生方の活用と実践の結果によるご提言をいただき、引き続き検討修正を加えながら、適切な手引書へと練り上げていくつもりでありますので、ご協力くださるようお願いいたします。

I

福祉教育について

I 福祉教育の求められる背景

人と人が支え合う。このごくあたり前の行為が、いつの頃からか、「福祉」とか「ボランティア」という呼称で呼ばれるようになってきました。つまり、支えのしくみを自覚的に作っていきこうという動きの現れです。

これは、高度経済成長期を経て、旧来の自然な支え合いのしくみが壊れかけてきていることと、そうした中で新たな生活課題が生じつつあること、さらには、現状の壊れかけた支えのしくみだけでは、とうてい対応できない事態が、現実が増え続けていることなどがその背景になっています。

ところが、そうした現状でありながら、今、人々の意識は、「自分さえよければ」「人のことまで構ってられない」というように、人と人が心を通わせ合うこと、誠意を持って関わり合うことから遠ざかってきています。こうした社会の風潮は大人が作っているものであり、その大人の生き方・あり方を、子どもは静かに見つめ、社会のあり方を学んでいるのです。

今、子どもたちの社会では、そうした大人の社会のゆがみの影響を受け、学校内でいじめが頻発し、社会で弱い立場におかれているホームレスの人や高齢者を襲撃したり、子どもによる殺人事件や自殺が増加したりしています。果たして子どもたちは、将来に希望を持ち、こんな大人になりたい、という夢を抱くことができているのでしょうか。今こそ、私たちは、子どもたちに、生きる力を育むとともに、人と一緒に生きていく力、強いものが弱いものを助け、弱いものが強いものに助けを求めることができる、支え合う力をも育むことが大事なのではないでしょうか。

福祉教育は、そうした危機に対して、人が他者に思いやりの心を持ち、支え合い、ともに生きていこうとする態度（「ともに生きる力」）を養い、誰もが仲間はずれにされず、安心して暮らせる、「ともに生きるまち」をつくっていくための教育活動です。それは子どもたちの心に働きかける息の長い活動であり、「人と人との関係性」という視点から、各教科や総合的な学習の時間、特別活動などを通して、日々の教育活動の中で行うことができます。それがひいては、学校教育目標の具現化につながります。

また、そうした学びを学校だけで取り組む必要はありません。地域の社会福祉協議会にコーディネーターとして協力してもらい、家庭や地域からの協力を得ながら、多くの目と手に関わり、地域ぐるみで子どもの福祉の心を育むための連携・支援体制づくりを積極的に押し進めていきましょう。このような展開を通して、子どもだけではなく、福祉教育活動に関わる人々が、福祉とは何か、ともに生きるとはどういうことか、このまちをどんなまちにしていきたいのか、ということを考えていくことにつながります。このように、地域の人や地域が豊かに生まれ変わるころこそ、「福祉教育」を行う今日的な意義があるのです。

II 福祉教育の目標

福祉教育には、従来、①学校を中心とした領域（学校福祉教育）、②地域を基盤とした領域（地域福祉教育）、③社会福祉専門教育の領域（社会福祉教育）の3つの領域があり、相互に関連し合っています。その中心となる考え方は、教育と社会福祉の共通した価値である「基本的人権の尊重」「ノーマライゼーション（ともに生きる原理）」です。

これまでは、それぞれが独立して福祉教育を推進してきましたが、今後は、学校の中だけで福祉教育を行っていくのではなく、地域を基盤とした福祉教育と融合して、子どもたちが地域において福祉課題に関わっていく、といったことが求められます。なぜなら、福祉教育の目標とは、一人ひとりが他者に温かい心向け、それぞれが自分らしく自己実現を図りながら暮らしていけるように、お互いに働きかけ合う実践力、つまり他者と「ともに生きる力」を身につけて、だれもが仲間はずれにされない、安心して暮らせるまちづくりを推進していくことだからです。

そのため、福祉教育活動を行う際には、子どもに考えさせたり体験させたりする前に、まず指導者自身が、自分がどんな人間でありたいのか、将来どんなまちに暮らしたいのか、そのためにどんなまちをつくるのか、といった自分自身の生きていくビジョンを明確にすることが求められます。

その上で、「私たちは、将来、このまちをどんなまちにしたいのか」、「この子たちにどんな大人になってもらいたいのか」、といった願いや目標を明確にして、子どもたちと共にじっくりと活動に取り組むことが求められます。

こうした取り組みをすることによって、結果的に、子どもたちの内面に、

- | | | |
|--------------|------------------|----------|
| ① 自立心 | ② 自己抑制力 | ③ 自己決定力 |
| ④ 自己責任 | ⑤ 自助の精神 | ⑥ 他者との共生 |
| ⑦ 異質なものへの寛容さ | ⑧ 社会との調和 | ⑨ 人権感覚 |
| ⑩ 福祉課題の内面化 | ⑪ 共に生き、共に支え合う実践力 | |

等を培うことにつながります。つまり、指導する側から見た「福祉教育」プログラムの最終的な達成課題や評価の項目がこれらの諸点に当たるのではないのでしょうか。

Ⅲ 福祉教育の方法

では、学校において、どのように福祉教育を実践したらよいのでしょうか。

福祉教育は、人が他者とともに生きるということ、また、生活していく中で出会う様々な困難などを学習素材として取り組んでいきます。そうすると、「平和教育」や「道徳教育」などとどう違うのか、という点についてですが、人権教育は、「本当の人間らしさとは何か」を追求する営みであり、福祉教育と深い関わりがあります。しかし、福祉教育は、先述の通り、「社会福祉問題」を学習素材とするもので、生の現実を基点とする教育実践であり、「こうあるべき」という規範はありません。子どもと共に、子ども自身の気持ちや考えを素直に見つめ、葛藤とじっくり向き合って今後の生きる方向性を探っていく、という営みであると言えます。

近年の福祉教育の実践の方法としては、高齢者・障害者疑似体験や、施設訪問、高齢者を学校に招待して交流することが多く行われていますが、取り組む際には、まず、指導者が、子どもたちに何を学ばせたいか、どんな大人になってほしいか、また、交流する相手にも何を得てもらいたいかなど、活動の目的やねらいを充分吟味することが求められます。活動は、体験が目的なのではなく、目的を理解するために体験をするからです。

【体験学習のプロセス～交流体験～】

- ① 交流したい相手（高齢者、障害のある人など）と、「子どもたちに何を学ばせたいか」という学校の意向を伝え、相手が何を伝えたいと考えているかを聴くなど、事前に打ち合わせをする。
- ② 子どもたちが交流をし、他者との出会いの中で、自分が必要とされる喜び、新たな世界の体験など、様々な学びを得る。
- ③ 交流相手や指導者と共に活動を振り返り、自分の学びを評価する。
- ④ 指導者が交流相手と活動を評価し、次の活動につなげていく。

上の流れは、高齢者や障害のある人（ここでは「サービス利用者」とする）と交流する場合についてですが、当然のことながら、子どもの発達段階や教科内容に即した形に対応してアレンジさせながら、様々なフィードバックのプロセスを併用しながら実施し、相互に学び合える工夫を図っていきましょう。一方的に「弱い人を助けよう」という見方に偏るのではなく、サービス利用者から教わる姿勢で取り組むことが大切です。また、サービス利用者と子どもとの対等な関係を目指し、子どものためにという視点だけではなく、お互いに学び合う姿勢をもって活動できると、お互いに理解を深め合えて、より大きな学びとなります。そのためには、子どもからサービス利用者へのプレゼント渡しや楽器演奏など、「集団と集団の関わり」で終わるのではなく、それを出発点に、演奏の後はお年寄りと子どもが1対1で遊ぶ時間を作るなど、「個人と個人の関わり」をもてるプログラムを用意しましょう。また、活動が単発で終わっては、お互いに理解し合うことはできません。カリキュラムの工夫をして、継続的に関わるようにしましょう。

プログラムとしては、今後は、施設訪問に偏らず、自分たちが暮らす地域の特性を理解し、身近なまちづくりを目指すためにも、地域における老人クラブや、自宅に暮らす障害のある人との関わりを通して、地域における学びを深めていくと良いでしょう。施設では、利用者の方が生活をされている空間であるため、多くの人数の子どもが一度に体験をすることは難しいですが、地域であれば、クラスごとの子どもたちが同じ時間に体験をすることも可能になります。

そして、活動の際には、学びの振り返り（評価）が大切です。評価は、指導者による評価だけではなく、子ども自身による自己形成評価を大事にしましょう。従来、福祉体験学習をすると、子どもに感想

文を書かせて先生が読む、もしくはそれを相手先に送付する、という取り組みが多く行われてきました。しかし、それだけでは子ども本人が自分の気持ちを書いて、自分だけの学びで終わってしまいます。感想文を出発点に、教室で、もしくは施設でお互いに発表し合っ、自分以外の他者の考えや気持ちを知ったり、その発表の場に、関わってくれた社会福祉協議会の職員や障害のある人に同席してもらってコメントをもらったりすることで、学びが何倍にもふくらみます。そして、活動に関わってくれた人も、自分の関わりが子どもたちにどのように捉えられているのかがわかり、お互いの振り返りになります。そうした振り返りがあって、初めて次の活動につながっていくのです。

こうした「出会いによる学び」が、子どもの社会性、優しさや連帯感に満ちた支え合いの心を育んでいき、また、活動に関わった人たちも共に学びを深めていき、子ども、教師、親、地域の人々の心が豊かに変わっていくのです。ここにこそ、「福祉教育」導入の大きなねらいがあると考えられます。

Ⅱ

● 福祉教育指導展開について

I 小学校における福祉教育の進め方

1 福祉教育についての基本的な考え方

我が国では、明治維新・戦後に引き続く、第三の教育改革が進められているということが言われて久しくなります。この間、児童・生徒が引き起こした衝撃的な事件が多発したことから規範意識の低下が問題となり、様々な議論が繰り広げられています。歴代政府も、教育改革を最重要課題と位置づけ、様々な教育問題を検討する会議を発足させるなど、教育改革論議が続けられています。

このような時だからこそ、改めて、福祉教育の視点で学校教育を見つめ直し、これからの学校教育を充実させていくことが必要だと考えます。

一方、最も感受性豊かな発達段階にある小学校の子どもたちにとっては、様々な社会の実態に関心を向け、それに積極的に参加していくこと、体験的に学んでいくことは大きな意味をもつものです。これこそ、社会全体で「生きる力」を身につけるための取り組みを進めることになると思います。

第15期・中央教育審議会答申では、「生きる力」について、「理想的な判断力や合理的な精神だけでなく、美しいものや自然に感動するといった柔らかな感性を含むものである。さらに、生命を大切にし、人権を尊重する心など基本的な倫理観や他人を思いやる心や優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かな心、ボランティアなど社会貢献の精神も、『生きる力』を形作る大切な柱である」としています。

このような考え方は、まさに、福祉教育の主旨と重なるものです。福祉教育は、教育分野と社会福祉分野が重なり合う領域であり、そこでいう「生きる力」とは、他者とともに課題に気づき、考え、実践するという、「自立」した個人がお互いにその存在を認め合い、かかわりを大切にしながら生きていくという「共生」の理想を大切にしています。つまり、教育分野であれ、社会福祉分野であれ、そのどちらの世界でも、今、「生きる力」を身につけさせるため、「自立」と「共生」が求められているのです。

2 福祉教育の位置づけ

(1) 教育課程への位置づけ

福祉教育の目標と内容を、学校の教育課程の中にどのように位置づけるかはそれぞれの学校に委ねられています。「福祉教育」は、人権教育を基本として成り立つ教育実践で、その大きな特徴はノーマライゼーションの理念に基づき、学習素材として「社会福祉問題」を取り上げることですが、大きくとらえると、学校教育と福祉教育はめざす内容が共通のものとなっています。学校教育目標に、よく、「思いやりのある子」「人間尊重の精神」などとありますが、まさにそれらは、福祉教育が目指すものと同一のものなのです。

ですから、学校の中で福祉教育を進めるときには、「全教科・全領域」で実施することが望ましいとされ、これまでにも、思いやりの心や助け合う態度は、道徳や総合的な学習の時間等での交流学习をはじめ、学校教育全般で指導がなされてきました。

しかしながら、今日、教育現場では、「福祉の授業」として、障害や高齢の疑似体験、手話や点字の授業が多く取り入れられているものの、安易な展開で終わっているという指摘もあります。障害の「負」の部分だけが強調されて、「対等な個人」としての見方につながらなかったり、技術を覚えることだけに終始し、障害のある人との交流がないまま満足してしまうなど、「共生」とはかけ離れて、本来の福祉教育のねらいや目的が十分に吟味されていない授業が多々見受けられるとの声も聞かれているのです。

専門的な知識や技術を伝えることも大切ですが、それ以上に、共に生きることの本質的な思想や価値

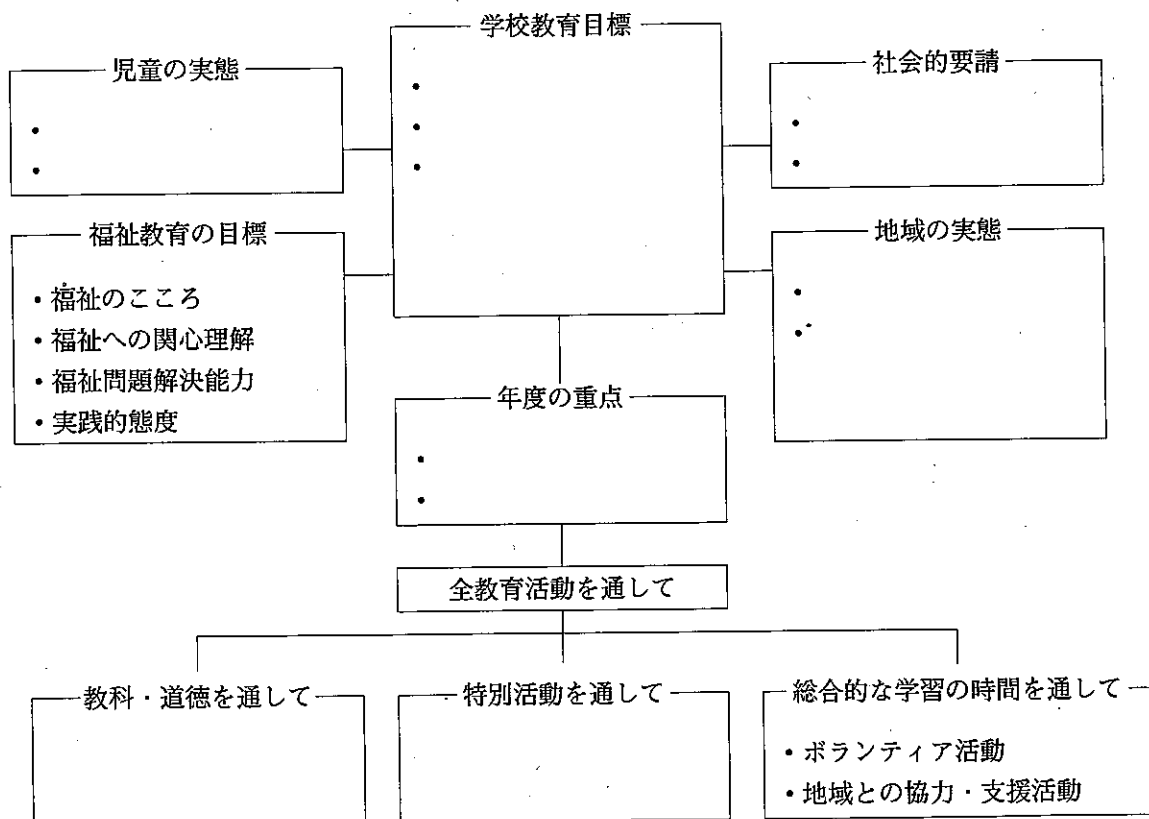
を大切にし、生命の大切さや人間の尊厳について学ぶ中で、「老いる」とはどんなことか、「障害」とはなんだろう、という問いかけをするということが、重要な意味を持つということを改めて考え直さねばなりません。そのためにも、教師自身が確かな福祉観を身につけることが大切になってくるのです。21世紀の学校教育を推進するに当たり、このことの必要性を一層認識し、加えて、社会的要請をしっかりと受け止め、学校教育と社会福祉教育との連携を深め、家庭、学校、社会が一体となって教育を展開すべき時期にきています。

そこで、わたしたちは、福祉教育への認識を新たにして、これまでの福祉教育に関する教育活動を見直すとともに、福祉教育の目標と内容を、教育目標や指導計画の中に適切に位置づけていかなければなりません。そのために、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などの中で、どのように福祉教育を実践すればいいのかをよく考え、広く福祉をとらえ、さまざまな出会いやふれあいを通して、まずは「気づく」ことから始めます。その上で、それぞれの学習内容と関連づけたり統合したりして、継続的に、しかも学校の教育活動に適合するように、その位置づけを明確にして教育課程を再構築していかなければならないと考えます。

このように、教育課程への位置づけがなされ、福祉教育が実践されることによって、子どもたちは、福祉活動に動機づけられ、成就感を味わいます。さらに、子どもたちは、その成就感を積み重ねていくことにより、さらなる福祉活動へと動機づけられ、次第に内面化が図られて、「自立」と「共生」の精神が深まり高まっていくものと思われまます。

以下に、その位置づけの事例をしめしています。一般的には、福祉教育は全教育課程で行われるものであり、福祉教育の目標も「児童の実態」「社会的要請」「地域の実態」とともに、学校教育目標を支えるべき要素としての位置づけをされることが多いのですが、特に福祉教育に重点をおいて教育活動が展開される学校においては、学校教育目標に次ぐ大きな目標としての位置づけをして、その重要性を強調することも考えられます。いずれにしても、福祉教育の目標として明確に位置づけ、全校をあげて取り組んでいくことが大切なことであると考えます。

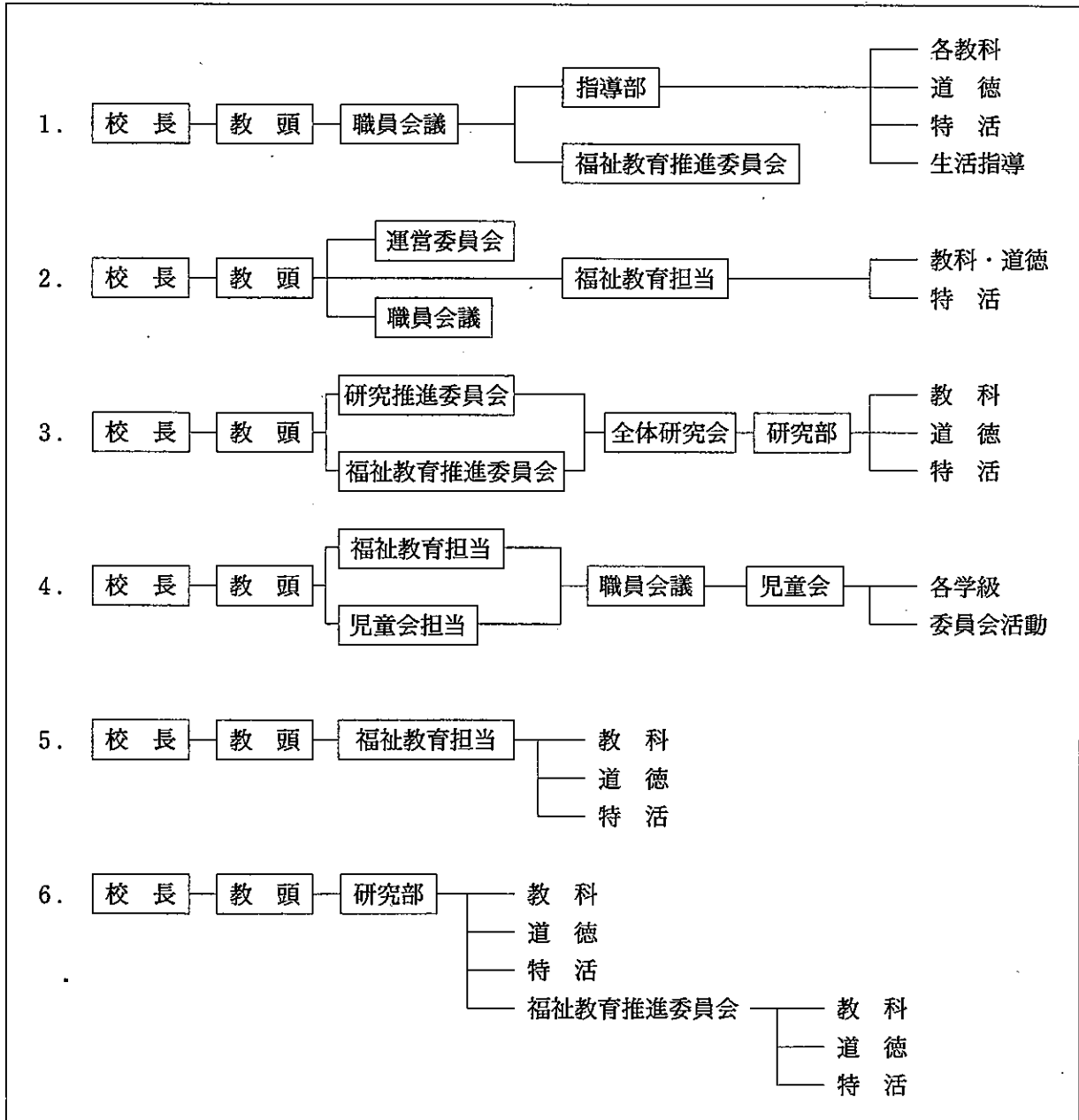
《資料1》福祉教育の教育課程位置づけの例



(2) 校内組織への位置づけ

校内における福祉教育の推進のためには、まず、教職員全員が共通理解のもと、協力体制を確立し、研修し、実践を図っていかねばなりません。次に、家庭及び地域と連携するなど、支援体制を整備した上で、計画し実施することが大切であり、児童や地域の実態、学校規模、人的・物的環境など様々なことを考慮し、しっかりした組織づくりをすることが望まれます。

〈資料2〉福祉教育の校内組織の例



3 小学校における福祉教育の理念と目標

陶芸の信楽焼きで有名な信楽の地で、障害者が地域の人たちと一緒に、地域の焼き物産業を支え、共に生きている社会があります。この基盤をつくっていくために多大の尽力をされた田村一二先生のことばに「差ありて別なし」があります。人にはそれぞれに違いがあります。年齢、性別、身長、体重などからくる違いです。それと同様に、障害も人間の属性の一つであると、「国際障害者年行動計画」において説明されています。障害もそれらと同様、人格をはかる基準にしないという意味です。そのような違いは、あって当たり前のことなのです。違いは違いとして受けとめ、互いに認め合い、助け合って一緒に生きていこうというのが「別なし」に込められているのではないかと思います。それが今日いうところの共生の理念であり福祉教育の理念でもあります。

ところで、小学校における福祉教育の目標は、

- ①福祉の心を育てること
- ②福祉に関する理解を深めること
- ③福祉の実践意欲を向上させ態度を身につけること

にあります。そして、福祉教育は「人間性豊かな子どもを育成する」ことが基本目標と考えられ、これは学校教育に包含されています。

さらに、「教育課程の基準の改善のねらい」でも「豊かな人間性の育成」が第一に掲げられ、これは、時代を越えて変わらない調和のとれた人間形成が特に重要であるという考えからであり、具体的には、次の3点を基底において指導計画に組み込むことが肝要であると考えます。

(1) 生命を尊重し相互理解の心をもつ

生命を尊重し、生きる喜びを知り、お互いの幸せを願う心をもつことが大切です。

自分も他の人も尊重し、お互いに相手を思いやることができる子どもを育てたいものです。このことは「福祉のこころを育てる」ことでもあります。「福祉のこころを育てる」とは、どのような人とも共に生きていくための思いやりの心を育むことであります。また、「人としての感性を磨くこと」とも同じことです。次に示すようなことを日常の指導の中で意識させることができれば、福祉教育の理念の深化と目標達成とが可能になるはずです。

- 家庭も含め周りの人との共有体験を通して共感の心を養う。
- 人とかかわりの中で相互理解の心を養う。
- 生活の中で、人から人への思いやりや、自分自身も思いやりを受けていることを感じとる。
- 周りの人の良さを認めるとともに、相手の痛みや困っていることに気づく。
- 周りの人との違いを違いとして自然体で受けとめる。

(2) 自然や社会の営みに理解と関心をもつ

自然を愛し、自然を守り、美しいものに感動する心をもつ子どもを育てたいものです。また、身近に暮らす人々が行っている様々な福祉の営みに、理解と関心を深める子どもであって欲しいと思います。そのためには、まず、教師自身が感動の心もち、自然や社会への理解と関心をもちたいものです。

総合的な学習の時間、生活科をはじめ各教科や特別活動等の指導計画の中に、これらに関する内容を位置づけたり、学級経営の中で意図的・計画的に次のような内容を取り扱ったりすることが肝要です。

- 自然とふれ合い、自然に生きる素晴らしさを感じ取る。
- 人と人とかかわりを大切にし、ふれあう中で、人の気持ちを考える思いやりの心情を育む。
- 身近に暮らしている高齢者、一人暮らしの人、障害のある人、異国籍の人等様々な生き方や生活があることに子どもたちが気づき、福祉問題や福祉活動の意味や役割に関心をもつ。
- 多くの人々が、福祉に関わるいろいろな仕事に携わっていることを知ることで、福祉に対する理解と関心を深める。
- 理解を深めていくことにより実践化への動機づけとし、主体的で積極的な実践意欲を高める。

(3) 平和を求め、真の生き方を志向する

身近な問題について話し合い、高め合いながら問題を解決しようとする子どもを育てたいものです。そして、周りの人のすばらしい行為に感動し、それをたたえ自己の中に生かそうとする気持ちを育てることが大切です。次のように、実践意欲を育て体験的活動を取り入れることで、身近な問題を解決する力が育ち、生き方を学ぶことにもなるのです。

- 幅広い体験的な活動を通して、様々な生活課題を抱えている身近な人々とのふれあいを深める。
- 地域で暮らす、様々な生活課題を抱えている人々とのふれあいを深め、自主的・主体的に、思いやりの心をもって福祉の活動に参加してみたいという心情を高める。
- 児童会活動や、学校行事等の場に福祉の活動を取り入れ意見させることで、活動への意欲づけを行い、実践の経験を深める。
- 子どもたちにできる範囲での活動内容を考えさせ、工夫させ、実践の場となるよう配慮していくことで、主体的で積極的な実践意欲を深める。

4 発達段階に応じた福祉教育のあり方

福祉教育実践を行う場合は、児童・生徒の発達段階に合わせたプログラムを組み、実践することが望まれます。障害理解学習を行う場合などで、小学校4年生で点字を学んだから、5年生では手話について取りあげる、というようにプログラムを変えなくても、1つのメニューで小学校低学年の児童に適したプログラム、中学年の児童に適したプログラムを踏まえて、高学年の児童の発達に適したプログラムを作成し、中学校での学びにつなげていくことが可能です。

例えば、視覚障害について取り上げるとしましょう。小学校低学年の児童は、目隠しをして鬼ごっこをして遊んだりすることを通して、目が見えないことについて、素直に「かわいそう」という感想をもったり、「自分は目が見えて良かった」というように、自分と視覚障害者との違いに目が向き、視覚に障害があることについて同情的になったりすることが考えられます。まずは、そこから出発しつつ、視覚障害がある人が、白杖を使ったり盲導犬を連れてたりすることで自由自在に歩けることに触れることで、児童が視覚障害者を「かわいそうな人」と思うのではなく、「すごい人」と尊敬できる下地を作ることができます。中学年に進み、アイマスクをして校内を歩き、使い慣れた場所でも視覚障害がある不自由さを知り、また、視覚障害のある人と実際に会って話をして実際の当事者との対話を通して、障害があることが「不幸」ではなく「不自由である」ことを理解します。次に、高学年では、そうした体験を踏まえて、アイマスクをして町に出て、町のバリアを体験し、視覚障害者が町で暮らすことの難しさを知り、その一方で、自分たちが何をすれば視覚障害があっても共に暮らせる町となるのか、考えを深めていくことができます。そして、その学びを踏まえて、中学校では、「なぜ、視覚障害があることで暮らしづらい町となっているのか」など、地域社会を取り巻く社会制度の現状や、そのために地域社会に生きる人間として、何をしていくか、ということに学びを深めていくことができるでしょう。

以上、視覚障害について取りあげてみましたが、これは足が不自由であるという障害や、耳が不自由であるという障害についても同じことがいえます。小学校低学年では遊び的な要素を通じて学び、中学年では自ら学校内で体験を深め、高学年では町に出て自分の暮らす地域社会について理解を深めていく、ということなどを通して、少しずつ学びを深めていくことができるのではないのでしょうか。

5 「ゲストティーチャー」から「協同実践者」へ

近年、授業において、ゲストティーチャーが参加する実践が増えてきており、子どもたちが生きた学びを得る機会も増えてきました。

その際、より多くの学びを得ていくポイントとして重要なのは、子どもたちに何を学ばせるか、ということを考える企画の段階から、教師だけでなく、複数のメンバーで議論していくという点です。

福祉教育・ボランティア学習の実践というと、とかく「障害疑似体験」「高齢者疑似体験」など、体験することそのものに力点が置かれることが多く、その取り扱い方によっては、「障害のある人やお年よりは、苦勞が多くてかわいそう」といった誤った障害者観や高齢者観を持たせる危険性があります。子どもたちに何を学ばせたらよいのか、どんな内容が福祉理解に効果的なのか、教師が福祉について不安を抱えながら一人で一生懸命調べごとをして学習活動の目標を設定し、学習計画を立てるなど抱え込まなくても、サービスを利用している当事者や、福祉現場の職員と一緒に議論をしながら目標を設定し、内容を共に考えていくことで、よりリアルな学びを得ることが可能になります。

学習計画を立て終わった段階で、ゲストティーチャーと打ち合わせをして、「この日にこういう話をして下さい」というような、役割を確認することにとどまる内容では、当事者は自分の意見があったとしても言いづらいものであり、当事者が本当に伝えたいこと、子どもたちに理解してほしいことを伝えられなくなってしまうのです。そうすると、教師は充実感・満足感があっても、ゲストティーチャーが不全感を抱えたままになってしまうこともあります。

そして、当日呼ばれて指定された講話をし、その後、教師から送られてきた子どもたちの感想を読むことは、ゲストティーチャーにとって喜ばれることですが、その時の学びを次によりよいものにしていくためにも、学習の振り返りの場にゲストティーチャーにいてもらうことが重要です。子どもたちが自分との交流から何を学んだのか、その場で聞くことができ、さらにその場で子どもたちの学びを伸ばすコメントをすることもできます。そして、その後教師とゲストティーチャーとで活動を振り返り、次回にどのように活かしていくのかを話し合うことも、実践を次につなげていくための重要な取り組みとして、確保してほしいところです。

企画を立てる段階から、教師とゲストティーチャーがお互いに自分の見解を聞き合い、共同で学習目標を設定し、計画を立案していき、共に実践し、共に振り返ることで、より一層多角的に、学びを深めることができます。そう考えると、「ゲストティーチャー」として他者を呼ぶ、という位置付けから、お互いの立場を活かした「協同実践者」として学習活動を共に企画し、より複数の人たちと最初の段階から関わり合い、よりよい実践を模索して共に学び合っていくことが重要であると言えます。

6 福祉教育実践における評価

(1) 評価の基本的考え方

学校教育における福祉教育は、計画的、組織的な教育活動です。その活動を効果的に行うため、たえず活動を見直し改善することが必要です。この改善のための過程を評価と呼びます。福祉教育の評価の領域には、子どもの学習評価、教育課程の評価、学校の組織・運営等の評価も含まれます。

ところで、福祉の心や態度が育成されたかどうかの判断は難しいものです。心情、感情、価値、態度にかかわる目標の達成度をみるときの困難さと同様です。だから、教師には、子どもの小さな変化をとらえる感性と、温かく慎重な評価をしようとする姿勢が必要になります。

子どもの小さな変化をとらえる眼を複眼化することも大切です。担当教師のみでとらえるのではなく、他の教師や協同実践者、地域の人や家族、さらには子ども同士など、多くの眼で、小さな変化に優しい眼差しを向けることが重要です。

(2) 子どもの学習にかかわる評価

学習評価の第一の目的は、その教育によって子どもがどのように変容したかを知り、教育活動の改善に役立てることです。福祉教育は、福祉への関心を高め、知識と理解を深化させ、実践への意欲と行動力を強めるという目標なのだから、その学習評価はそれらの目標を観点に行われることになります。

子どもの学習評価においては、形成的評価が大きな意義を持ちます。確かな形成的評価を行うためには、子ども一人一人の活動や学習の様子、作品や発表にみられる学習の状況や成果等を、できるだけ多く収集することが必要となります。収集方法としては、子どもによって表現された感想、記録、報告、発表等が考えられますが、教師による観察、対話、質問等といったデータも有効に活用できます。

具体的には、毎時間の記録を一人一人がファイルできるような形態をとるとよいでしょう。このような方法をシステム化したものが、ポートフォリオという評価方法です。ポートフォリオ評価を実践する上で重要なことは、単に活動記録等の収集にとどめるのではなく、子ども自身が自己評価する機能、子ども同士が相互評価する機能、さらには自分の学習成果を他者に表現するプレゼンテーション能力を高める機能等を有していることが重要となります。

(3) 教育課程にかかわる評価

福祉教育の学習成果は、参加者全員に期待されるものであり、教師自身の意識や関心についての評価も必要と考えます。同様に、学習実践そのものに対する評価も重要で、教師の共通理解、組織、研修体制、家庭や地域との連携、指導計画、指導体制等について、十分に話し合いが深められてこそ、福祉教育についての真の評価が生まれ、それに基づく新たな実践活動が展開されていくことになります。

7 福祉教育に焦点を当てた各教科等における取り組みの視点

これまでも述べたように、福祉教育は、学校教育全体で行わなければなりません。そのためには、各教科・道徳・特別活動、および総合的な学習の時間の目標とその特性を十分に生かし、ねらいを達成していく中で福祉教育の視点を加味し、新たな目標の設定が必要となります。この場合、福祉教育を特別なものとして意識せず自然に受け入れていくことが大切です。その際、次のようなことに配慮しながら取り組んでいきたいものです。

- ① 各教科の中では、知的理解・知的関心を深めて意欲を喚起し、高めていくようにすることが必要です。

その際、福祉に直接かかわる内容を含む教材と、関連する内容を含む教材があることを把握することが大切です。

- ② 道徳においては、福祉教育と道徳の関連を図り、人間尊重の精神に基づいて具体的な生活の中に生かすよう道徳の時間のみならず、全教育活動を通して指導していくことが必要です。

その際、道徳の指導内容に福祉の心を育てる項目を設けるなど意図的な配慮が大切です。

- ③ 特別活動では、福祉教育を体験的に展開できる領域であり、中でも児童会活動と学校行事の中で子どもたちが自発的に福祉にかかわる活動に参加し活動できるよう立案していくことが必要です。

その際、実践する内容に配慮し、発達段階に応じた自主的な態度と能力の育成が大切となります。

- ④ 総合的な学習の時間では、各教科・道徳・特別活動で身につけた態度や能力をその子なりに十分発揮しながら学習する

第5学年「親子でアイマスク体験」
～PTA活動、社会福祉協議会との連携より～



ことが必要です。

その際、学校と保護者・地域社会との連携を図りながら、協同実践者を招いたり、PTA活動とタイアップした展開をしたりするなど創意・工夫のある学習をすすめることが大切です。

学校行事「養護学校との交流」
～昼休み時間の共遊より～



【各教科等における取り組みの視点】

各教科	国語	・物語文や伝記、詩などの読みとりを通して、人間としての生き方、心のふれあいなどに共感感動し、表現活動を通して福祉の心を養う。 ・高齢者・障害のある人への手紙やお便りを書くことを通して福祉の心を養う。
	社会	・福祉のしくみについて理解をすすめ、社会福祉施設の見学や福祉マップづくりなどの活動や体験により、理解を深める。 ・家族・社会の学習を通し、福祉の心を養う。
	算数	・統計・資料などの福祉にかかわるものを取り上げての考案、実態調査などの集計から福祉についての理解・関心を深める。
	理科	・生命の大切さ、生きることの意味や体のしくみの理解や小動物の飼育、植物の栽培などの活動を通して、愛護の心の育成を図る。
	生活	・具体的な活動や体験を通し、身近な高齢者や社会、自然とのかかわりに関心をもたせ、自分自身や自分の生活について考えさせることから、福祉の心を養う。
	音楽	・表現及び鑑賞の活動をすすめる中で、音楽の美しさやよさに触れ、豊かな情操を培い、福祉の心を養う。
	図工	・すすんで表現したり障害者の作品展を鑑賞する活動を行ったりする中で、表現の喜びを味わい、豊かな情操を培い、福祉の心を養う。
	家庭	・家庭生活に対する理解を深め、福祉施設の訪問や高齢者との交流を通して家庭や社会の一員としての自覚を深め、福祉の心を養う。
道徳	体育	・体力の向上、健康の増進を図り、明るく楽しい生活を目指す中で、相手のペースに配慮して活動するなど、福祉の心を養う。
	学級活動	・健全な生活態度や望ましい人間関係の育成を図る中で、福祉の心を養う。
	児童会活動	・福祉にかかわる活動を位置づけ、協力して実践活動をすすめる中で、福祉の実践力を育てる。
	クラブ活動	・同好の集団の中で好ましい人間関係を育み、活動を通して福祉の実践力を育てる。
	学校行事	・勤労生産・奉仕的行事の中で社会奉仕の精神を涵養する体験ができるような活動を通して、福祉の実践力を育てる。
総合的な学習の時間	・直接的な体験や活動を通して、社会や自然、人々への理解を深め、よりよい社会生活を送るために必要な実践力や福祉の心を養う。	

8 福祉教育の視点に立った各教科等の具体的指導例

(1) 福祉教育の年間計画の作成

学校教育における福祉教育の取り組みは、福祉課題に関する内容を掘り起こし学習を展開していくことが重要です。

しかし、福祉教育を特別なものとして意識せず、学校内のすべての教育活動の中で、日常的に学習を行うことの重要性を考えることも大切です。つまり、日頃、実践しているそれぞれの教科等の学習の中で、福祉教育と関連させながら学習できるものを整理し、その教科等の特性を十分に生かしながらも福祉教育の視点を加味した新しい目標の設定を行い、学習を日常的に実践していくことです。

そのためにも教師は、年度当初それぞれの学年における学習内容を吟味し、福祉に直接関わる教材や関連性をもつ教材を整理し、年間の計画として位置づけていくことが大切になってきます。

【福祉教育と各教科等との関連表 (例)】

	1 学期	2 学期	3 学期
一年生	国語科 大きな かぶ (教出, 大書, 光村, 東書, 学図) 生活科 おおきくなあれ①	国語科 ずうっと, ずっと, 大すきだよ(光村) 生活科 おおきくなったね かわったね みんなだいすき おおきくなあれ②③ かぞくで いっしょにおしょうがつ 道徳 いのちのすばらしさ	国語科 たぬきの 糸車 (光村) 児童会活動 6年生を送る会
二年生	国語科 ひっこしてきた みさ (教出) 生活科 大きくなあれ④	国語科 お手紙 (学図, 光村, 大書) 生活科 わたしのまち 大すき 大きくなあれ⑤⑥ 道徳 やさしくしんせつに	国語科 スーホの白い馬 (光村) 生活科 あしたへ ジャンプ 大きくなった わたしたち 児童会活動 6年生を送る会
三年生	国語科 わたしと小鳥とすずと (光村) 社会科 見つめてみようわたしたちのまち 見直そうわたしたちのくらし	国語科 消しゴムころりん (教出) 道徳 耳の聞こえないお母さんへ	国語科 おにたのぼうし (教出, 大書) 児童会活動 6年生を送る会
四年生	国語科 とんぼの楽園づくり (教出) 社会科 安全なくらしとまちづくり 健康なくらしとまちづくり	国語科 「伝え合う」ということ (光村) 社会科 昔のくらしとまちづくり 道徳 おじいさんの顔	国語科 一つの花 (教出, 光村, 大書, 東書) 児童会活動 6年生を送る会
五年生	国語科 新しい友達 (光村) 家庭科 どのように生活しているかな	国語科 人と「もの」とのつき合い方 (光村) 道徳 牛乳配り	国語科 森を育てる炭作り (教出) 社会科 わたしたちのくらしと環境 家庭科 家族とのふれあいを楽しもう 児童会活動 6年生を送る会
六年生	国語科 はくの世界, きみの世界 (教出) 家庭科 生活を見直そう	国語科 みんなで生きる町 (光村) 道徳 ボランティア活動を通して	国語科 ボランティアしあおうよ (教出) 社会科 わたしたちの生活と政治 世界の中の日本 家庭科 地域とのつながりを広げよう 児童会活動 6年生を送る会

総合的な学習の時間年間計画・全学年

波佐見町立中央小学校

※低学年は、総合単元学習として教科をクロスして実施する。

平成12年度

学年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	時間数	
一 年			○けがをしている人がいたら (2時間)	○自然の宝物を集めよう【第1次】 (2時間) ○自然の宝物で作ろう【第2次】 (3時間) ○情報教育 (2時間)	○おきがしている人がいたら (2時間)	○自然の宝物を集めよう【第1次】 (2時間) ○自然の宝物で作ろう【第2次】 (3時間) ○情報教育 (2時間)	○クイズや歌で手紙に親しもう【第1次】 (5時間)	○6年生に手紙のプレゼントをしよう【第2次】 (3時間) ○情報教育 (2時間)						21
二 年		○いきものはかせになるぞ (4時間)		○ふれあいの会をひらこう (10時間)				○ふれあいの会をひらこう (10時間)	○あきのたからさがし (4時間)	○情報教育 (2時間)			24	
三 年	○陶器市でひまわりの種をあげよう (4時間)		○広げようやさしい心と遊びの輪【第1次】・ようち園へ行こう (8時間)	○広げようやさしい心と遊びの輪【第2次】・ようち園のお友達を招待しよう (9時間)			○広げようやさしい心と遊びの輪【第1次】 (9時間) ○車椅子を用いる人とともに！【第2次】 (14時間)			リサイクルで大変身 (13時間) ○情報教育 (2時間)			40	
四 年	○ゴミ復活大作戦【第1次】 (9時間)		○車椅子を用いる人とともに！【第1次】 (3時間)	○車椅子を用いる人とともに！【第2次】 (14時間)			○ゴミ復活大作戦【第1次】 (9時間) ○情報教育 (2時間)			○ゴミ復活大作戦【第2次】 (8時間) ○情報教育 (2時間)			40	
五 年		○ふれあいを広げよう【第1次】 (12時間)		○ふれあいを広げよう【第2次】 (5時間)	○ふれあいを広げよう【第1次】 (10時間)	○ふれあいを広げよう【第2次】 (5時間)	○波佐見町クリーン大作戦【第1次】 (10時間)	○波佐見町クリーン大作戦【第2次】 (7時間)		○波佐見町クリーン大作戦【第2次】 (7時間) ○情報教育 (2時間)			40	
六 年		○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	○つなげようみんなのまごころ【個人グループ活動】 (4時間)	40	

(2) 各教科等での具体的指導例

例1 国語科

題材「お手紙」(2年)	
<p>主な目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 音読の活動を通して、場面の様子や人物の気持ちの移り変わり、登場人物の心のふれあいを・読み取ることができるようにする。 ○ がまくんになったつもりでかえるくんの手紙を書かせることを通して、手紙をもらえた喜びの気持ちを表現できるようにする。 ○ 自分の身近な人へ実際に手紙を書かせることを通して、相手を思いやる気持ちを育てるようにする。 	
主 な 活 動	福 祉 教 育 と の 関 連
1 全文を読んで感想を話し合い、学習の計画を立てる。	○ 感想を話し合わせる過程で、場面の進行に伴う登場人物の気持ちの変化について読み取る計画を子どもとともに立てる。
2 がまくんとかえるくんの心のふれあいを読み取る。 <ul style="list-style-type: none"> ① 悲しい気分である二人の気持ちと様子を読み取る。 ② 大急ぎで家に帰ったかえるくんの気持ちを読み取る。 ③ 手紙を待つかえるくんの気持ちと手紙をあきらめるがまくんの気持ちを読み比べる。 ④ 幸せな二人の気持ちや様子を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ がまくんの言葉を手掛かりにさせながら、心のつながりを求めるがまくんの気持ちと、その気持ちを理解できたかえるくんの気持ちを考えさせる。 ○ かえるくんの言動を音読や視写を通して順序よく整理させ、がまくんの気持ちに応えようとするかえるくんの思いを読み取らせる。 ○ がまくんとかえるくんの会話を対比させることを通して、二人の思いの違いを読み取らせる。 ○ あきらめているがまくんに、読者の立場から励ましの手紙を書かせる。 ○ 手紙のことを打ち明けてしまったかえるくんの気持ちと、そのことを知って驚くがまくんの気持ちを、音読を通して読み取らせる。 ○ がまくんになったつもりでかえるくんの手紙を書かせることを通して、読み取ったがまくんの喜びや感謝の気持ちを表現させる。
3 学習のまとめをする。	○ 4日間の登場人物の言動を一覧表にまとめさせ、心を通い合わせようとする登場人物の思いをとらえさせる。
4 身近な人に実際に手紙を書く。	○ 「お手紙」という題に着目させ、この物語で手紙が果たした役割を考えさせ、実際に自分でも身近な人にお手紙を書き、人と人との心の交流を体感させ、学習の締めくくりとする。

例2 社会科

題材「見つめてみよう わたしたちのまち」(3年)

主な目標

- 自分たちの地域にある公共施設の役割や利用している人々の様子などを調べさせることを通して、自分たちの地域の様子に関心をもつことができるようにする。
- 自分たちの地域にある公共施設の様子やそこで働く人々、その施設を利用している人々の様子を調べさせることにより、地域の人々の願いやその願いをかなえるための地域の人々の努力が分かるようにする。

主 な 活 動	福 祉 教 育 と の 関 連
1 自分の住む地域で、利用できる公共の施設にはどんなものがあるか話し合う。	○ 自分の住む地域にはどんな施設があるか、また、その施設を利用した体験を発表させる。
2 地域にある公共の施設を知り、見学の計画を立てる。	○ 子どもの発表だけでは出ない施設(福祉施設など)については、教師が写真などで紹介し、地域にある公共の施設を地図などでまとめ掲示する。 ○ なぜ、そのような施設があるのか(必要なのか)を考えさせることを通して、その施設が地域の人々の願いに沿った施設であることを予想させる。 ○ 施設の様子、施設の人や利用者への質問事項を考えさせ、見学計画としてまとめる。
3 見学する。	○ 目的意識を明確にして見学させる。 ・施設設備の見学 ・働く人々の様子 ・係の人や利用者への質問 ○ 点字ブロックや点字による表示板・車椅子用スロープなどが施設内にあれば、子どもに紹介し、そのようなものにもふれさせる。
4 見学に行って分かったことをまとめ、発表する。	○ 施設内での活動内容や利用している人々の声から、その施設を利用している人々の願いをまとめさせる。 ○ 公共施設で働く人々の苦労を地域の人々の願いと重ねながらまとめさせる。 ○ 分かったことや自分と公共施設との関わりを新聞などを使ってまとめさせることを通して、地域の中での自分の役割を自覚させ、地域の中での豊かな人間関係を築こうとする態度を育てる。

例3 家庭科

題材「どのように生活しているかな」(5年)

主な目標

- 家庭のはたらきについて考えさせることを通して、家族にとって家庭は、大切な場であることが分かるようにする。
- 家庭生活を見つめ、家族の一員として家庭の仕事を分担、協力しようとする態度を育てる。

主 な 活 動	福 祉 教 育 と の 関 連
1 家族のはたらきについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家庭は、心や体の疲れをいやしたり、楽しみを与えてくれる大切な場であることを理解させる。 ○ 家族と共に過ごす時間や家庭の仕事をやる時間は、家族の人間関係や相互理解を深めるのに役立つことに気づかせ、家族の一員としての自覚を深める。 ○ 家族が安心して暮らせるためには、家族の協力が必要であることに気づかせる。
2 家庭にはどんな仕事があるか考え、自分のできる仕事を見つけ、実行するための計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家族のしている仕事やそのときの気持ちを考えさせることにより、人との関わりや衣食住に関する仕事があることに気づかせる。その際、家族構成や就業状況などに十分配慮する。 ○ 自分のできる仕事を決める場合、各自の家庭の事情や自分の置かれている立場を十分に考え、無理のない長続きする仕事を考えさせる。

題材「生活を見直そう」(6年)

主な目標

- 生活の仕方を見直し、生活時間の有効な使い方を工夫して、家族に協力しようとする態度を育てる。

主 な 活 動	福 祉 教 育 と の 関 連
1 朝の生活時間の使い方を調べ、朝の過ごし方の問題点について考える。	○ 気持ちよく1日の生活を始めるために、朝の生活時間を見直し、時間を計画的に使うことの大切さに気づかせる。
2 1日の生活時間を見直し、家族と共に過ごす時間をつくる計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分や家族の生活時間を見直させ、家族と共に過ごす時間の生み出し方と使い方を工夫させる。 ○ 家族の役割にはそれぞれ違いがあるので、自分の家族の実態に応じた改善案を考え、家族と過ごす時間や自分の生活時間の有効な使い方の計画を立てさせる。

例4 道徳

主題「思いやり・親切」(4年) 資料名「おじいさんの顔」	
主題設定の理由 人に親切にすることはよいことだとわかっている、人目を気にしたり、人より自分を優先させることを考えたりするなど、なかなか行動に移せない弱さを人はもっている。 しかし、相手の立場に立って物事を考え、優しく人に接する心を育てることは、真に豊かな社会を築くために必要不可欠なことである。高齢化社会が叫ばれる日本の社会において、お年よりにそうした心をもつことは一層重要なこととなろう。 本資料「おじいさんの顔」は、疲れているお年より(おじいさん)の姿に接した主人公が、親切にしたいができないと葛藤しながらも、勇気を出し優しい言葉をかけるという内容である。子どもたちは、この主人公の心の葛藤に共感しながら、勇気を出した後の主人公のさわやかな気持ちを身近に感じることができるであろう。 そこで、主人公の気持ちに迫らせることを通して、相手の立場に立ち、優しい気持ちでお年よりに接していこうとする心情を育てたい。	
ねらい ○ 周りのお年よりを思いやり、温かく接しようとする心情を育てる。	
主 な 活 動	福 祉 教 育 と の 関 連
1 お年よりが困っているところに出会った経験について話し合う。	○ おじいさんの顔の2枚の絵(困っている顔・笑っている顔)を見せ、その表情の変化から、子どもたちの自由な感想を語らせる。 ○ お年よりが困っている場面に出会った体験を発表させる。
2 資料「おじいさんの顔」を読んで、話し合う。 ① 大きな荷物を持ったおじいさんを見ながら、主人公はどんなことを考えていたのかを考える。 ② 勇気を出して「どうぞ。」と言った主人公の気持ちを考える。 ③ 主人公がとてもいい気持ちになった理由を話し合う。	○ 主人公を取り巻く場面環境を明確にさせ、おじいさんを見ている主人公の気持ちを考えさせる。 ○ 主人公の心の葛藤を考えさせることを通して、行動することの難しさを感じ取らせる。 ○ 心の葛藤の末、勇気を出し行動に移した主人公の気持ちに迫らせ、子どもたちのもっている「お年よりに親切にすることは良いことだ」という価値観の高まりを促すようにする。
3 今までのお年よりとのふれあいをふり返り、今後どう接していきたいかを話し合う。	○ お年よりの生の声などを活用し、お年よりが今何を望んでいるかを知らせ、今後、自分にできることなどを発表させ、実践意欲を高めるようにする。 ○ 本時の感想を書かせ、数名の子どもに発表させ、学習の締めくくりとする。

例5 特別活動

主題名「養護学校の友達と交流しよう」(5年)

主題設定の理由

わたしたちの社会は、様々な構成員によって成り立ち、それぞれの構成員がそれぞれの役割をしっかりと果たすと同時に、お互いに協力しながらよりよい社会の実現をめざしている。こうした意味において、健常者も障害のある人も共に生き、互いのありのままを理解し、それを受け入れ、認め合っていくことが大切である。もちろん、子どもたちも心身に障害のある人に対して、どう接していくことが適切なことかは、知識としては少なからず理解している。しかし、実際に障害のある人と日常的に触れ合いをもつ機会がなく、それらが生きた実践力として身につくまでには至っていない。

そこで、本校の身近にある養護学校の友達との交流を、子どもたちが主体的な立場で計画、実施する経験を通して、障害のある人に対して偏見をもたず、共に生きる友だちとして互いに認め合い、思いやりの心をもって接しようとする心情や実践力を育てたいと考え、本主題を設定することとした。

また、一度の交流にとどまらず、年間を通じた交流を行い、本主題がより強化されるよう意図する。

ねらい

- 養護学校の友だちとともに考えたり、協力して活動したりできるようにする。
- 養護学校の友だちとともに活動する中で、互いに理解し、お互いを理解する喜びを感じ取らせる。
- 交流を深めていく中で、互いによさや生き方にふれさせ、よりよい社会を築いていくために自分にできることを実践しようとする心情を高める。

	主 な 活 動	福 祉 教 育 と の 関 連
一 学 期	1 養護学校の友だちとの出会いを計画し、準備をする。	○ 写真などを見せて、養護学校の様子を知らせる。 ○ 養護学校の友だちとの交流の計画を立てさせる。 ○ 自己紹介やグループでの遊びやゲームを行う準備の時間と場を設ける。
	2 養護学校へ出かけ、交流する。	○ 養護学校の友だちと出会い、遊んだり、ゲームをしたりする共遊の場を設ける。 ○ 交流後の感想をまとめ、養護学校へ送付する。
二 学 期	3 第2回交流会(共遊会)の計画を立て、準備をする。	○ 再度、広場で交流できることを知らせ、1学期の反省を生かし共遊会の計画を立てさせる。 ○ グループでの遊びやゲームを行う準備の時間と場を設ける。
	4 共遊会を行い、交流する。	○ 広場に行き、計画した遊びやゲーム、またお弁当と一緒に食べたりして、共遊の時間を過ごさせる。 ○ 交流後の感想をまとめ、養護学校へ送付する。
三 学 期	5 第3回交流会(感謝の会)の計画を立て、準備をする。	○ 仲良くなった養護学校の友だちとの1年間の交流学习の締めくくりをすることを知らせ、感謝の会の計画を立てさせる。 ○ 交流の記念品を作ったり、感謝の言葉や、最後の遊びを行う準備の時間と場を設ける。
	6 感謝の会を行い、交流する。	○ 広場に行き、計画した記念品贈呈をしたり、遊びやゲームを楽しんだり、お弁当と一緒に食べたりして、共遊の時間を過ごさせる。 ○ 交流後の感想をまとめ、養護学校へ送付する。
	7 1年間の交流学习のまとめを行う。	○ これまで書いてきた感想や写真、また、ビデオなどを使って三度の交流を振り返らせ、自分にとって成長できたことなどを作文にまとめさせる。 ○ これまでの交流後の感想や作文と写真を活用しながら、各自の交流日誌としてまとめさせ、養護学校の友だちとの交流学习のまとめとさせる。

例6 総合的な学習の時間

波佐見町立中央小学校

6年	テーマ	つなげようみんなのまごころ みんなの笑顔	領域	福祉・F
ね ら い	<p>○ 子どもたち一人一人が共に生きる社会の一員であることを自覚する。</p> <p>◇ 人の心の暖かさや優しさを知るとともに、自らの課題を見つけ、できることを実践していこうとする。</p>			
学 習 活 動			備 考	
ふ れ る	○ いろいろな人のいろいろな活動を知る。	<p>・いろいろな人の活動を知り、人々がみんなで力を合わせ支え合って生きていることについて考える。</p> <p style="text-align: center;">興味や関心を持つ段階</p> <p style="text-align: right;">(2時間)</p>	<p>・ビデオ</p> <p>・ゲストティーチャー</p>	
つ か む	○ 学習の見通しを立てる。	<p>・自分がやってみたい活動、自分にできそうな活動について考える。</p> <p>・一人であるいは友だちと夏休みにできそうな活動の計画を立てる。</p> <p style="text-align: center;">めあてをつかみ見通しを持つ段階</p> <p style="text-align: right;">(2時間)</p>	<p>・環境ボランティア・福祉ボランティアなど</p> <p>・図書とインターネット等の活用をする。</p>	
追 求 ・ 発 信 す る	<p>○ 発信する。</p> <p>○ 実際に体験してみる。</p>	<p>・夏休みにしたことやこれからも続けたい活動を知らせるとともに、活動協力の輪を広げる。</p> <p style="text-align: center;">つかみとった事を発信・実践する</p> <p style="text-align: right;">(中間報告会)</p> <p style="text-align: right;">(3時間)</p> <p>・「車いす」「アイマスク」の福祉体験や「手話」での交流を通して、様々な障害のある人の生活や思いを理解するとともに、よりよく共に生きるためにできることを考え実践の意欲を広げる。</p> <p style="text-align: center;">めあてに向かって調査・体験 ・実践・制作をして追求する段階</p> <p style="text-align: right;">(4時間)</p>	<p>・ゲストティーチャー(聴覚障害のある人、社会福祉協議会の人)</p>	
生 か す	○ 発信する。	<p>・自分たちがしてきた活動を振り返りまとめる。</p> <p>・これまでの活動報告会を行う。</p> <p style="text-align: center;">つかみとった事を発信・実践する</p> <p style="text-align: right;">(6時間)</p>		

9 「障害者理解」「高齢者理解」「ボランティア活動」「ボランティア学習」について

(1) 「障害者理解」について

わたしたちの周りには、心や身体に障害のある人たちがいます。その人たちと自然にかかわっていくためには、正しい理解をすることが大切です。そのためには、障害のある人たちが、周りの人たちをどのように受けとめているのか、そして、何を周りの人たちに望んでいるのかを、子どもたち自身に感じ取らせ、気づかせることが必要です。

「障害とは、どういうことをいうのか」「障害の生じる原因」などについては、教師の話の聞いたり、子どもたち自身で調べたりしながら、学ぶことができます。そのような学習を通して、子どもたちは、自分たちも障害と無関係でないということに気づきます。知識としての理解は障害者を理解する上で大切なことです。しかし、このような学習だけでは、障害のある人の思いを十分に知ることは難しいと思われま

す。障害のある人の思いにふれさせるためには、やはり、障害のある人との交流が必要です。いろいろなことを尋ねたり話を聞いたりするなど、その人と親しくなっていく過程で、はじめて、その人の思いにふれることができます。障害のある人のことを理解するためには、まず、その人のありのままの生活にふれ、その人自身を理解していくことが大切だと言えます。障害のある人を、障害者という枠組みで画一的に理解しようとするのではなく、障害とは関わりなく、一人の人間として尊重し、理解しようとするのが、障害者を理解するということです。

近年、体験的な学習が重要視され、さまざまな学習が展開されています。中でも、車いす体験やアイマスク体験など、障害を擬似的に体験する活動を取り上げることが多くなってきました。しかし、障害体験そのものが、学習の目的になっている場合も、まだ見受けられます。障害体験は、あくまでも、障害を理解するための方法の一つであり、学習の導入として活用することに留意する必要があります。障害体験をしたからといって、そのみでは障害のある人を理解することには、必ずしも、つながりません。学習の進め方によっては、かえって、「障害者は、大変で、かわいそうな人」「何かをしてもらう人」といった貧困的な障害者観を抱かせるおそれもあります。このようなことから、障害体験は、障害のある人を理解するためのきっかけとして取り扱い、実際の交流へと発展させることが大切だと言えます。また、障害体験は、できるだけ、障害のある人と協同して実施するとよいでしょう。そうすることで、子どもたちは障害を身近に感じ、より充実した学習になるでしょう。

また、体験的なさまざまな学習を通して、子どもたちに気づかせたいことは、「心のバリアフリー」の大切さです。障害のあることを特別視せず、障害のある人が、同じ地域や社会の中で、普通に暮らすことを当然のことと考え、困っている時には、互いに助け合うことができれば、誰もが暮らしやすい社会になります。「心のバリアフリー」の基盤にあるのは、正しい障害者理解です。そのためにも、障害のある人たちの思いを、身をもって感じ取り、理解を深めるような体験が、やはり必要です。

ところで、障害のある子どもたちは、通常学級の中にも在籍しています。障害の特徴や程度が、それぞれ異なる子どもたちに対して、誤解や偏見が生じないように正しい知識を与え、差別のないかわりをしていくことが必要です。差別のないかわりとは、相手の立場に立って相手を理解することから始まります。同じ仲間として、互いに助け合って生きていこうという心情を、ぜひ育てたいものです。そして、「一人一人違う人間、でも、みんなみんな同じ人間」であるということ、ぜひとも、子どもたち一人一人に、深く理解させたいものです。

さらに、心に留めておきたい大事なことは、親や教師など大人が、障害者をどのように理解し、どのように接しているかを、周りの子どもたちは、よく観察しているということです。子どもたちの言動に、思いやりの足りなさを感じたら、まず、教師自身が、不適切な対応や不用意な発言をしていなかったかを反省して見る必要があります。

教師自身が、良き理解者として、範を示すことが大切です。そして、豊かな障害者観・豊かな福祉観

を身につけ、実践する努力が必要です。子どもたちは、教師を手本にして学びます。福祉教育とは、特別難しいものではなく、人間らしい生き方を学ぶことであり、「みんなが幸せにくらせるまちづくり」を目指すことなのです。

(2) 「高齢者理解」について

高齢者を通じて福祉の心を育むことも大切です。

高齢者を理解するのは、自分の親を理解することの延長線上にあることなので、難しいことではないはずです。それでも現実には核家族化が通常化し、高齢者と共に生活する家族は多くありません。また、共に生活していても、その素晴らしさや良さを認識しないままに過ごしている家庭もあるようです。

ところで、高齢者といわれる人たちは、物事の見方、受けとめ方に若い人たちにはない深さや寛容さがあったり、豊かな経験に裏づけされた知恵や工夫を、生活に生かすことにも長けています。その一方で、年齢を経るに従い、かたくなさやこだわりなどを強く感じさせる人もいます。そのために、お互いの理解が進まないというようなことも耳にします。これもまた、世代の差や生きてきた背景の違いや老いからくるものであり、受けとめる側の柔軟な対応が必要です。適切なかわりには、相手の話をよく聞くことから始まります。相手の人格を対等に認め、相手の意見を認めることから信頼関係が生じるのは、高齢者との関係だけではなく、人とのかわりにとってはとても大切なことなのです。

自分が持ち合わせていない知恵や工夫を先人に学ぶ姿勢を備えていれば、自分たちの意見や立場も高齢者に理解してもらいやすいものです。そのような当たり前の相互関係こそが、共生のための必要条件なのです。

家庭においては、両親がその両親（祖父母）を大切にすることのかわりを示すことが、社会の中の高齢者を敬う素地を養うことにつながっていきます。

そのような事例に関する教師自身の家族の話などを、子どもたちに数多く聞かせてあげることも共感を呼ぶのではないかと思います。また学校でも、年長者を敬うことの大切さを日常的に教師が実践することが、高齢者理解につながることは言うまでもありません。

これまで述べましたように、高齢者への良き理解者としての心情の養成には、身近なところにすばらしい教材があるのです。

(3) 「ボランティア活動」について

「ボランティア」とは、人々のために自分を役立てようと望む自分の意志で、知識、技能、創造性、労力、経験、時間、財力等を提供する人を言います。つまり無報酬性、自発性、愛他精神、自己提供、継続性をもって活動する人です。

ところで、今、子どもたちが社会を直接体験する機会が少ないことが指摘されています。ボランティア活動は、つまるところ他者といかにかかわるかの問題です。その活動を通して新しい経験を得、更に充実した活動を目指して学習をし、対象である他者および仲間との交渉によって社会性を養い、自己と他者が価値ある存在であり、地域社会を共に生きる存在であるということを、確認し合うものであります。

学習によって培った「福祉のこころ」を、さらに、適切な情報の提供を受けることで、「福祉体験への心情」の昂揚につなげ、それを「実際の体験」にまでつなげることを願っています。そして、そのような一連の福祉教育が地域等での主体的活動に発展することを期待するものです。

(4) 「ボランティア学習」とは

ボランティア学習とは、興紹寛によると、「ボランティア活動のもつ社会的役割や自己啓発への力を認識した上で、意図的に又は制度的に人間や社会が必要とする教育環境を設定して行う社会貢献型体験学習である」と述べられています。日本においては1970年代後半頃から行われており、類似の概念としては、イギリスの Community Service Volunteer やアメリカの Service Learning などが上げられます。学

習者は、社会福祉、環境、国際貢献、教育、文化、平和など、多様な分野において、それぞれの課題を体験的に知ることによって、課題解決のための活動を実践し、そこから自発性を養い、社会における自立した人間としての社会性を身につけ、全人的に成長していくことを目的としています。

長沼豊によると、ボランティア学習の意義は、(1)孤立的な生育環境や集団離れが指摘されている子どもが、他者とのかかわりを通して人間関係を体験的に考察する契機を得ること、(2)机上の学習ではなく、具体的な体験活動を通して、内容知と同時に方法知を獲得すること、(3)社会的な課題を知り、解決へ向けた具体的な方策を模索することにより、ボランティア活動の意義を知り、相互扶助型市民社会の必要性を感得すること、(4)ボランティア活動の特性である自発性・創造性などを育み、主体的、能動的な学習の機会を得ること、と4点について挙げられています。

実施する際には、児童への動機づけと計画から準備し、ボランティア活動体験をさせた後も、決してさせっぱなしにするのではなく、教員の評価のみではなく、自己評価、社会的な課題への気づきの確認、次の課題の抽出など、子ども自身による丁寧な振り返りを行う必要があります。

Ⅱ 「ちきゅうのなかま」学習指導展開について

ここに記載する学習指導展開例は、各教科、道徳、特別活動等の授業で「ちきゅうのなかま」を使用して、福祉についての学習を進める際の、参考にするために作成したものです。

Ⅰ 第1章 暮らしを支える福祉社会のしくみを調べてみよう

現在、「福祉」というと、「高齢者や障害のある人」といった特別な状態をイメージし、「福祉は自分とは関係ないこと」ととらえられることが多い。しかし、「福祉」はけっして特別なことではなく、身近なものである。人は誰でも、地域において、愛する人と共に、生まれてから死ぬまで、自分らしくいきいきと暮らしていきたく願っている。それは、たとえ人生の中で、自分の力で暮らすことが難しくなったり、生まれつき難しかったりしても、誰にでも保障されている権利であり、そうした社会を実現させようとする理念が、「ノーマライゼーション」（お年よりも子どもも、男性も女性も、障害があってもなくても、生きている一人一人が、人として尊重され、自分らしく暮らしていける社会のしくみをととのえること）である。

そして、「社会福祉」とは、ノーマライゼーションの実現をめざす「社会を構成する一人一人が幸せにいきいきと暮らせることであり、また、そうした社会を実現するためのしくみを、一人一人が協力し合ってつくっていくこと」である。そうした社会をつくるには、福祉について、つまり自分が自分らしく生きるために、たくさんの人に支えられているということ、人と人が相手の幸せを願う気持ちをもって地域社会をつくっていく、ということを経験する。自分自身が「実感」として、自分が暮らす身近な地域における様々な工夫や、福祉社会のしくみを自ら調べ、実践的・体験的に学ぶことが大きな意味を持つ。

そこで、道徳の学習を通して、

生活を支えている人々や高齢者に、尊敬や感謝の気持ちをもって接する。

〔第3学年及び第4学年 2-(4)〕

働くことの大切さを知り、進んで働く。

〔第3学年及び第4学年 4-(2)〕

日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

〔第5学年及び第6学年 2-(5)〕

働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。

〔第5学年及び第6学年 4-(4)〕

などの心情や態度を養うというねらいで、学習の場を設定する。

さらに、社会福祉のしくみや生活の中のいろいろな工夫などにふれることを通して、福祉社会に対する関心と理解を深めるために、「まちの中の福祉」「福祉とは」「わたしたちを支える地域の人たち」を取り扱うこととした。

また、重要な概念として、「ユニバーサルデザイン」をとりあげているが、「ユニバーサルデザイン」とは、1970年代にアメリカのロナルド・メイスによって提唱されたもので、“すべての人が人生のある時点で何らかの障害をもつ”ということを経験するのを、発想の起点とし、障害の有無、年齢、性別、国籍、人種等にかかわらず多様な人々が気持ちよく使えるようにあらかじめ都市や生活環境を計画する考え方である。つまり、シャンプーのきざみや自動ドアなどはユニバーサルデザインされた物理的なものであり、そうした誰もが暮らしやすい地域社会をつくらうとすることは、計画としてのユニバーサルデザインである。これに対して、バリアフリーとは、「障害のある人の生活・行動の妨げとなる障壁（バリア）が除去された状態」であり、ユニバーサルデザインの「誰もが暮らしやすいまちづくり」の中では、その一部に含まれるものである。

(1) 題材「ちきゅうのなかま」

① 目標

- 自らも社会の一員であることを自覚するとともに、社会への奉仕活動など公共のために役立つ活動に目を向け、自分ができることを進んで実践しようとする意欲を高める。
- ノーマライゼーションの精神を考えることができる。
- 身のまわりにある施設や設備、工夫などに込められた福祉社会の精神を進んで伝えようとする。
- すべての人が自分らしく暮らせるように福祉社会の仕組みが整っていることが分かる。

② 学習の場

- 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに気付くとともに、自分がすべきことを進んで考え実践しようとする意欲を高めることができるように、道徳の学習の場を設定する。
- まちの中にあるいろいろな施設や工夫などの調査活動を行い、その結果をもとに、だれもが安心して生活できるよう、いろいろな工夫があることを理解できるようにするとともに、自分にできることを考えようとする学習の場を設定する。

③ 学習計画

次	学 習 活 動	学 習 の 場	主 な ね ら い
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「福祉」「ボランティア」「ちきゅうのなかま」の言葉から、イメージするものを出し合う。 ○ 支え合い、助け合って暮らしている人々の事例を通して感想を話し合う。 ○ 障害者や高齢者以外の人々の暮らしの不便さについて話し合う。 ○ 自分たちの身のまわりにある「やさしさ」などについて考える。 	「まちの中の福祉」	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「福祉」などの言葉に対する一人一人のイメージの共通点や相違点について理解させる。 ○ 人々が支え合い、助け合う社会の大切さに気づかせる。 ○ まちにある工夫が、障害の有無や高齢などに限らず様々な人々を支えていることに気づかせる。 ○ 自分たちの身のまわりにある設備や工夫などを出し合うことで、自分たちのまわりにも支え合いや助け合いの精神があることを知り、共に生きていこうとする心情を高める。
第2次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 福祉社会をつくるためにまちの中にあるいろいろな設備や生活の中の工夫について調べる。 	学校周辺や家庭での調査活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちの身のまわりにあるだれもが安心して生活できるいろいろな設備や工夫に気づかせる。
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査結果を発表する。 ○ 福祉社会をつくるためにある仕組みや施設について理解する。 ○ これまでの学習を振り返り、自分たちにできることを話し合う。 	「まちの中の福祉」「だれもがくらしやすいとは」「わたしたちを支える地域の人たち」	<ul style="list-style-type: none"> ○ 設備や工夫の役割を理解し、関心を深めさせる。 ○ 多くの人が福祉社会の実現に向けて仕事をしていることを理解し、関心を深めさせる。 ○ 「心のユニバーサルデザイン」を理解し、自分にできるボランティアを考え、進んで実践しようとする心情や態度を養う。

④ 学習展開例

第1次 (1時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「福祉」「ボランティア」「ちきゅう」「なかま」の言葉から、イメージするものを出し合う。 ○ 支え合い助け合って暮らしている人々の事例を通して、感想を話し合う。 ○ 自分たちの身のまわりにある「やさしさ」について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの生活や学習経験をもとに、自由に発表する場を設定する。その後、出てきたイメージの共通点や相違点を明らかにしていく。 ○ 支え合い、助け合って暮らしている人々の話を提示し、その生き方についての感想を話し合う。 ○ 人類愛を「やさしさ」という視点から見つめ直し、自分たちの身のまわりにある優しさについて考える。 	<p>文カード</p> <p>支え合い、助け合って暮らしている人々の生き方に関する話 ちきゅうのなかま P1～P8</p>

第2次 (2時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ ユニバーサルデザインとバリアフリーについて理解する。 ○ 福祉社会をつくるためにまちの中にあるいろいろな設備や生活の中の工夫について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ バリアフリーとユニバーサルデザインを比較し、違いに気づくようにする。 ○ 学校周辺のいろいろな設備等について、どのようなものがどこにあるか事前に調査しておく。 調査する際は、その名称や働き等にも子どもの目が向くように言葉掛けを行う。 また、生活の中の工夫については、次時まで家庭などで調査するように投げ掛けておく。 	<p>ちきゅうのなかま P1～P5</p> <p>ちきゅうのなかま P5～P6</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査結果を発表し合う。 ○ 福祉社会をつくるためにある仕組みや施設について理解する。 ○ 今までの学習を振り返り、自分たちにできることを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ だれもが自分らしく暮らすことができるまちづくりのためにバリアフリーやユニバーサルデザインが大切なことに気付くことができるように、子どもが見付けてきた設備や工夫について <ul style="list-style-type: none"> ・だれのことを考えてあるのか ・どういう働きがあるのか について確認していく。 ○ すべての人が自分らしく暮らせるための福祉社会の仕組みを理解できるように、資料を適宜用いながら説明する。 ○ これまでの学習を振り返り、バリアフリーやユニバーサルデザインは設備面だけのことではなく、大切なのは「心のユニバーサルデザイン」や「計画としてのユニバーサルデザイン」であることをとらえることができるようにする。 また、自分にできるボランティア活動を考える場をもち、進んで実践しようとする心情や態度を養う。 	<p>ちきゅうのなかま P9～10</p> <p>ちきゅうのなかま P8下段の説明</p>

2 第2章 お年よりが安心してくらせるまちづくりを考えよう

わが国の高齢化率は上昇を続け、2025年には高齢化率が35.7%に達し、国民の3人に1人が65歳以上の高齢者という本格的な高齢社会の到来が見込まれている。また、特に75歳以上の後期高齢者人口の増加につれて、要介護等の高齢者の数は大幅に増加することが予想されている。認知症の高齢者も年々増加し、約330万人（10人に1人の割合）に達すると予測される。また、高齢化によって高齢者のいる世帯が増加し、「単独世帯」や「夫婦のみの世帯」の割合が大きくなってきている。高齢者の一人暮らしや高齢夫婦だけの生活は孤独感や日常生活の不便、不安を生むことになり、ときに孤独死や災害・事件などの発生も懸念され、まわりの支えが不可欠である。このように高齢社会は高齢期を迎えた高齢者自身の健康や生活の問題であると同時に、高齢社会を支える家族、青年・子どもたちの問題である。

人間関係を学習する場が乏しい現代の子どもたちに、高齢者とのふれあいや生活体験活動を通して、人間的発達や自立を促すことが重要である。「生きた歴史の宝庫」である高齢者とのふれあいのある生活の日常化を図ることは、子どもを陶冶し、子どもの生活をより豊かなものにしていくはずである。

そこで、「小学校学習指導要領 第3章 道徳」の以下の内容について、学習の場を設定した。

生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちを持って接する。

〔第3学年及び第4学年 2-(4)〕

父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。

〔第3学年及び第4学年 4-(3)〕

父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。

〔第5学年及び第6学年 4-(5)〕

読み物資料「おじいさんに習った竹とんぼ」を通して、高齢者の知恵や優しさに気づかせ、読み物資料「じいちゃんとおばあちゃんの二人三脚」「お年よりの生活を知ろう」「年をとるってどんなこと」「お年よりと交流をしよう」などを通して高齢者を取り巻く問題について話し合わせながら、高齢者に対して尊敬の念や思いやりの心をもって接していこうとする実践的態度を育てていきたい。

(1) 題材「おじいさんに習った竹とんぼ」

① 目標

- おじいさんやおばあさんに何か習った経験や、おじいさんが竹とんぼを作っていく様子から、昔からの生活の中で培ってきた高齢者の知恵や技能のすばらしさを理解させる。
- おじいさんの気持ちを考えさせることにより、高齢者の思いや願いに気づかせる。
- 地域の高齢者から昔の遊びや遊びに使う道具の作り方などを教わる活動を通して、高齢者の知恵や優しさにふれさせ、尊敬の念や思いやりの心を育てる。
- 高齢者と共に過ごす楽しさを味わわせることによって、積極的に高齢者と関わっていこうとする実践的な心情や態度を養う。

② 学習の場

- おじいさんやおばあさんに何か習った経験を話し合う学習の場を設定する。
- 「おじいさんに習った竹とんぼ」を読み、高齢者の知恵や技能、また、思いや願いについて考える学習の場を設定する。
- おじいさんやおばあさんに習いたいことを話し合い、高齢者と交流する。

③ 学習計画

次	学 習 活 動	学 習 の 場	主 な ね ら い
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ おじいさんやおばあさんに何かを習った経験について話し合う。 ○ 「おじいさんに習った竹とんぼ」を読んで、感想を話し合う。 ○ みんなが、おじいさんの作るのを目を大きくしてのぞいたわけについて話し合う。 ○ 竹とんぼで遊んでいる子どもたちを見ているおじいさんの気持ちについて話し合う。 ○ 「お年よりとの交流会」を開く計画を立てる。 	「おじいさんに習った竹とんぼ」	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者の知恵や技能のすばらしさに気づかせる。 ○ 高齢者の思いや願いに気づかせる。
第2次 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 交流会の準備をする。 ○ 「お年よりとの交流会」を開く。 ○ お礼の手紙を書く。 ○ これまでの学習を振り返り、高齢者が増えていく世の中で自分にできることを考える。 	お年よりとの交流会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者に対する尊敬の念や思いやりの心を育てる。 ○ 積極的に高齢者と関わっていかうとする心情や態度を養う。 ○ 「自分にできること」は、してあげたいことだけでなく、一緒にできることも同時に考えさせる。

④ 学習展開例

第1次 (1時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ おじいさんやおばあさんに何かを習った経験について話し合う。 ・けん玉を習って、できるようになった。 ・お手玉を習って、楽しかった。 ○ 資料「おじいさんに習った竹とんぼ」を読んで感想を話し合う。 ・遊び道具を自分の手で作り出すなんてすごいな。 ・中心をコンパスや定規を使わなくても決められるなんて初めて知った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身近に高齢者がいる子どもを中心に、これまでの経験を自由に発表させる。 ○ 実物の竹とんぼを提示することによって関心を高める。 ○ 竹の中心の取り方や芯ぼう作りなどは図や模型などを用いて説明を加えて、理解させる。 	ちきゅうのなかま P11～P14 竹とんぼ 説明用の図、模型など

<ul style="list-style-type: none"> ・難しそうだけど作ってみたいな。 ○ みんながおじいさんの作るのを目を大きくしてのぞいていたわけを考え、話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・どうやって作るのか知りたくて一生懸命だったから。 ・おじいさんのナイフの使い方がすばらしかったから。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昔からの生活の中で培ってきた高齢者の知恵や技能のすばらしさに気づかせる。 	<p>挿し絵 P12</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 竹とんぼで遊んでいる子どもたちを見ているおじいさんの気持ちについて話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが喜んでくれてよかったな。 ・一緒に竹とんぼを作って楽しかったな。 ・これからも、自分たちで作って遊んでほしいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ おじいさんの気持ちを考え話し合わせることによって、高齢者の思いや願いを感じ取らせる。 	<p>挿し絵 P13</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ おじいさんやおばあさんに習いたいことを話し合い、「お年よりの交流会」を開く計画を立てる。 <ul style="list-style-type: none"> ・竹とんぼの作り方を習いたい。 ・お願いの手紙を出そう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事前に手紙を書かせることによって親睦を深めさせておく。 ○ 協力できそうな人を探し、計画作成にあたって、地域の老人会などと連携を図る。 	

第2次 (3時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 交流会の準備をする。 ○ 「お年よりの交流会」を開く。 <ul style="list-style-type: none"> ・道具の使い方が上手だな。 ・いろんな工夫をたくさん知っていてすごいな。 ・楽しいな ○ お礼の手紙を書く。 ○ これまでの学習を振り返り、自分たちにできることを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者を迎える準備はなるべく子どもたちに自主的にさせる。 ○ うまく関われない子どもには声をかけたり、教師と一緒に参加したりする。 ○ 高齢者と話し合う雰囲気大切にさせる。 ○ 感謝の気持ちを素直に表現させる。 ○ 一時的な交流で終わるのではなく、今後も交流を深めていきたいという気持ちを高めさせる。また自分にできることを考えさせるを通して実践しようとする気持ちを高めさせる。 	<p>交流会に必要な材料・道具</p>

(2) 題材「お年よりの生活を知ろう」「年をとるってどんなこと」「お年よりと交流をしよう」

① 目標

- 老いていく祖父母とそれを支える家族の様子について話し合い、自分たちの祖父母や地域のお年よりをいたわろうとする心情を育てる。

Ⅱ 福祉教育指導展開について

○ 高齢者を取り巻く問題に気づかせ、積極的に高齢者と関わっていこうとする実践的態度を育てる。

○ 資料をもとに、高齢者と若年者が共存していくには、それぞれのよさを生かして協力し合うことが大切であることを理解させる。

② 学習の場

○ 「じいちゃんとはあちゃんの二人三脚」の資料から、老いていく祖父母やそれを見守る家族の気持ちを考える学習の場を設定する。

○ 「お年よりの生活を知ろう」の資料から、高齢者の活躍の場面や高齢者の願い、それを実現させるための手立てがとられていることに気づく学習の場を設定する。

○ 「年をとるってどんなこと」の資料をもとに、高齢者を取り巻く問題に気づくとともに、高齢者が増えることによって世の中にもたらすいいことに目を向ける学習の場を設定する。

③ 学習計画

次	学 習 活 動	学 習 の 場	主 な ね ら い
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「じいちゃんとはあちゃんの二人三脚」を読んで、老いていく祖父母の様子や気持ちについて考える。 ○ 心配する家族や私の気持ちについて考える。 ○ 自分の祖父母や地域の高齢者とどのような態度で接していけばよいのかを考える。 ○ 学習の振り返りをする。 	「じいちゃんとはあちゃんの二人三脚」	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者をいたわることは人間として大切なことであることを認識させる。 ○ 私や家族の言動から、家族が不安になりながらも祖父母を大切に思い、そして支えあって暮らしていこうとしていることに気づかせる。 ○ 高齢者が今日の社会を作ってきたこと、自分もやがてそうなるのだという意識から高齢者を大切にしようとする実践的態度を育てる。 ○ これまでの自分を振り返らせるとともに感想を書かせ、お互いに発表し合わせることで学習の振り返りとする。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「お年よりの生活を知ろう」から、高齢者も自分たちと同じように、それぞれの場所で生きがいを持って自分の人生を自分なりに楽しんでいることを理解する。 ○ 「年をとるってどんなこと」から、誰でも年をとっていくことやさまざまな高齢者へのイメージに気づかせるとともに、高齢者の割合が増える今後、高齢者が生き生きと生活するにはどうしたらいいかを話し合う。 	<p>「お年よりの生活を知ろう」</p> <p>「年をとるってどんなこと」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者も自分たちと同じように、よりよく生きたいと願っていることを認識させる。 ○ 高齢者のためのいろいろな施設とその内容を理解させる。 ○ 高齢者の割合が増えることを知り、地域社会で共存していくにはどんなことが大切かを考えさせることができるようにする。 ○ 自分たちもお年よりと同じように一日一日年をとっていることに気づかせる。

④ 学習展開例

第1次（1時間）

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<p>○ 「じいちゃんとはあちゃんの二人三脚」の資料から、老いていく祖母の気持ちを想像させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不安だろうなあ。 ・不自由になり困るだろう。 ・元気なときに戻りたいだろうなあ。 <p>○ 「わたし」は祖父母が病気やけがをしたとき、どのような気持ちだったかを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心配で、不安そうだ。 ・祖父母にいろいろな面で助けてもらっていたことに気づいた。 <p>○ 祖父が退院し、家族がそろい、「わたし」や家族はどんな様子や気持ちになったかを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんな元気を取戻し、喜んでいる。 ・祖父もリハビリをして頑張っている。 ・みんなでお互いに支えていこうとしている。 <p>○ 地域の高齢者に対して、どのように接していけばよいか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつをしよう。 ・進んで荷物を持とう。 ・自分から席を譲ろう。 ・たくさんお話をしよう。 <p>○ これまでの学習を振り返り、今までの自分のお年よりに対する見方や考え方は十分なものであったか感想を書き、話し合う。</p>	<p>○ 老いの現実に向き合い、高齢者の立場に立って考えさせる。</p> <p>○ 母の言動や「わたし」の気持ちから、家族が心配し、不安を抱えている様子に気づかせる。さらに、祖父母が兄弟にとって、優しく温かい存在であることや、兄弟が祖父母に対して感謝していることに気づかせる。</p> <p>○ 家族で支え合い頑張っていこうとする姿を捉えさせ、家族の支え合いの大切さや祖父母の存在の大切さを感じさせる。</p> <p>○ 高齢者をいたわることの必要性や大切さ、高齢者との接し方を具体的に考えさせる。</p> <p>○ 書く時間を十分にとり、自分自身の高齢者に対する考え方や態度を振り返らせることで今後の自分のあり方に目を向けさせる。</p>	<p>ちきゅうのなかま P15～P20</p>

④ 学習展開例

第2次（1時間）

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<p>○ 「お年寄りの生活を知ろう」を見て話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お年よりでもいろいろなことに挑戦している。 ・現在も仕事をしている。 ・楽しそうに施設を利用している。 ・生きがいを持って生活している人が多い。 	<p>○ 資料の中に高齢者の表情（笑顔）や様子に注目させ、どんな気持ちでスポーツや活動等に取り組んでいるかを想像できるようにする。</p> <p>○ あわせて、自分の祖父母の生活の様子を話し合わせる。</p>	<p>ちきゅうのなかま P21</p>

<p>○ 「年をとるってどんなこと」の資料を見て話し合う。</p>	<p>○ 「高齢者をどのように思いますか」(P23)により、それぞれ高齢者をどのように思っているのか話し合わせる。</p>	<p>P23</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・だれでも年をとっていく。 ・いろいろな人生がある。 ・お年よりは、いろんな経験をしている。 	<p>○ 高齢者をとりまく一つの問題である認知症についても、ふれておく。</p>	<p>P24</p>
<p>○ お年よりが楽しく生きがいをもって生活するにはどうしたらいいか話し合う。</p>	<p>○ これからも高齢化がどんどん進んでいくことをとらえさせ、どのように対応していけばいいのかを考えさせる。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・老人福祉施設の充実。 ・町の施設をお年よりにも使いやすいように工夫して造る。 ・みんながお年よりに親切にする。 ・知識や技術を教えてもらえる。 		
<p>○ 「老人ホームやグループホームでの生活」を見て話し合う。</p>		<p>P22</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・介護福祉士等の資格をもった人がお年よりの支援をしている。 ・楽しい行事もあるようだ。 ・家族と生活できなくてさみしくないのか。 ・自分らしく生活できるように、心を込めて仕事をしているようだ。 		
<p>○ 学習を振り返り、お年よりが楽しく生き生きと暮らせるために、自分にできそうなことを考え、話し合う。</p>	<p>○ 高齢者のために大切なことは、施設が充実することだけでなく、若年者が高齢者に対して感謝の気持ちを持ち、お互いに助け合って生活していこうとすることであることをとらえさせる。</p>	<p>P21, 22</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・近所に住んでいるお年よりに会ったらあいさつをする。 ・進んでお手伝いをしよう。 ・学校のことをたくさん話そう。 		

3 第3章 障害のある人が自分らしくくらするまちづくりを考えよう

私たちの社会は様々な構成員によって成り立っており、それぞれの構成員がそれぞれの役割をしっかりと果たし、また、お互いに協力し支え合うことによって、より良い社会を目指している。

こうした意味において、障害のある人もない人も共に生き、互いのありのままを理解し、それを受け入れ、認め合っていくことが大切である。また、障害のある人を含めたすべての人々が幸せに暮らしていけるよう、私たちの「心のユニバーサルデザイン」の必要性について理解を深めることは、21世紀の社会を創造していく子どもたちにとって、非常に大切なことである。

このことについて、「小学校学習指導要領 第3章 道徳」に以下のことが示されている。

相手のことを思いやり、親切にする。 [第3学年及び第4学年 2-(2)]

だれに対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にする。

[第5学年及び第6学年 2-(2)]

日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

[第5学年及び第6学年 2-(5)]

だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。

[第5学年及び第6学年 4-(3)]

そこで、そのような心情や実践力を養うために、障害のある子どもの心情にふれたり、障害について考えたり、また、障害のある人の生活を知ろうとしたり、実際に交流したりする学習の場を設定し、読み物資料「ぼくのゆめ」、読み物資料「おとなになっても」、また、「障害のある人の生活を知ろう」、「障害ってどんなことか考えよう」を取り扱うことにする。

なお、学習の目標や学習の場、学習計画等を立案する際には、必ず障害のある人にも参加してもらうなど、地域をはじめとした人々との連携を十分にはかりたい。また、実際の授業に際しても、共同実践者としての参加を依頼したい。

(1) 題材「ぼくのゆめ」

① 目標

- 「ぼくの気持ちをわかってくれて、いっしょに遊んでくれる友だちがほしいです。」「いっしょにいてはげましてくれる友だちがほしいです。」という筆者の気持ちを考えさせることによって、障害のある人も、社会の一員として共に社会生活を営みたいという思いを持っていることをとらえさせる。
- お姉さんの気持ちを考えさせることによって、障害に対する偏見を持たず、共に生きる仲間として互いに認め支え合い、その人の立場に立った思いやりの心を持って接することの大切さに気づかせる。
- 心のユニバーサルデザインの大切さを理解させることによって、自分にもできることがあるということに気づかせる。

② 学習の場

- 「ぼくのゆめ」の筆者やお姉さんの気持ちを考えてみようという学習の場を設定する。
- 障害というものについて話し合ったり、「心のユニバーサルデザイン」について話し合ったりする学習の場を設定する。
- 自分にできることを考えてみようという学習の場を設定する。

③ 学習計画

次	学 習 活 動	学 習 の 場	主 な ね ら い
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ほくのゆめ」を読んで、感想を話し合う。 ○ 筆者の気持ちについて話し合う。 ○ 「弟に対するお姉さんの気持ち」を読んで、筆者のお姉さんの気持ちを話し合う。 ○ 障害のある友だちがいたら、どんなふうに接したいかを話し合う。 	<p>「ほくのゆめ」をもとにした話し合い。</p> <p>「弟に対するお姉さんの気持ち」をもとにした話し合い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 障害のある人の抱いている思いは、特別なものでないことに気づかせる。 ○ 共に支え合い、共に学び合うことの大切さを理解させる。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「障害ってどんなことか考えよう」を読んで、障害というものについて考えたことを発表し合う。 ○ 「だれもがくらしやすいまちとは」「わたしたちにできることを考えてみよう」を読んで、感想を話し合う。 ○ これまでの学習を振り返り、自分たちができることを話し合う。 	<p>障害というものについての話し合い。</p> <p>「心のユニバーサルデザイン」についての話し合い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 障害に対する正しい理解をうながす。 ○ 「心のユニバーサルデザイン」についての正しい理解をうながす。 ○ 自分にできる福祉活動を考え、積極的に実践しようとする心情や態度を養う。

④ 学習展開例

第1次 (1時間)

学 習 活 動	教 師 の 支 援 や 留 意 点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 障害のある人との出会いやふれあいについて話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校の文化祭を見に行った ・手話で話したことがある ・盲導犬を連れた人を見かけた ○ 「ほくのゆめ」を読んで感想を話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・筆者はとても明るいな ・筆者の悩みはとてもわかる ・筆者の大きなゆめがかなうといいな ○ 「ほくの気持ちをわかってくれて、いっしょに遊んでくれる友だちがほしいです。」「いっしょにいてはげま 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校・学級の実態に応じて、これまでの経験を自由に発表させる。 ○ 「ほくのゆめ」を読んだ感想をもとに、学習への意欲を高める。 ○ 大変優しく明るい筆者であるが、悩みがあることに気づかせる。 ○ 筆者が抱えている悩みは、障害のあるなしにかかわらず当たり前前の思いであることに気づかせる。 	<p>「ちきゅうのなま」P29～31</p>

<p>してくれる友だちがほしいです。」という筆者の気持ちについて話し合う。</p> <p>○ 「弟に対するお姉さんの気持ち」を読んで、筆者のお姉さんの気持ちについて話し合う。</p> <p>○ 障害のある友だちがいたらどんなふうに接したいかを話し合う。</p>	<p>○ 筆者のお姉さんの「わたしも強くがんばれたことが多くあります。」という思いにふれさせることによって、共に支え合い、共に学び合っていくことの大切さに気づかせる。</p> <p>○ 障害のある人に何か援助してあげるのではなく、同じ仲間として、同じ目線で対等に接することによって、共に支え合い学び合うことが可能になるということを理解させる。</p>	<p>「ちきゅうのなかま」P32～34</p>
--	---	-------------------------

第2次（1時間）

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<p>○ 「障害ってどんなことか考えよう」を読んで、感想を話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 障害には、いろいろな原因がありそうだ ・ 障害があると不自由だろう ・ 私たちにも関係がある <p>○ 「だれもがくらしやすいまちとは」「わたしたちにできることを考えてみよう」を読んだり挿絵を見たりして、感想を話し合う。</p> <p>○ これまでの学習を振り返り、自分たちにできることを話し合う。</p>	<p>○ 障害は、自分たちにも無縁でないことに気づかせ、障害のために不自由さを感じていることを読み取らせる。</p> <p>○ 障害のある人が暮らしに不自由さを感じないようにするためには、何がどうあれば良いのかを十分に話し合わせる。</p> <p>○ これまでの学習を振り返らせ、「心のユニバーサルデザイン」が実現すれば、だれもが暮らしやすい自然な社会になることに気づかせる。</p> <p>○ 障害がある人はかわいそうな人でないことに気づかせるだけでなく、なにがその人を困らせているのかについても考えさせる。</p> <p>○ また、自分にできることを考えさせるを通して、実践してみようという気持ちを高める。</p>	<p>「ちきゅうのなかま」P45～48</p> <p>「ちきゅうのなかま」P5～6, 8</p>

(2) 題材「おとなになっても」

① 目標

- 「おとなになっても」という題に込められた筆者の気持ちを考えさせることによって、障害のある人たちも自然に接し合うことが嬉しいのだということに気づかせる。
- 障害のある人もない人も、みんな共に生きていく仲間として、障害に対する偏見をもつことな

Ⅱ 福祉教育指導展開について

く、助け合い、励まし合い、認め合うことの大切さを理解させる。

- 学校や社会で、障害のある人たちに、自然にかかわり、ふれ合っていこうとする心情や態度を養う。

② 学習の場

- 「おとなになっても」を読み、障害のある人の願いや思いを考えてみようという学習の場を設定する。
- 障害のある人を学校に招いたり、障害のある人のところへ遊びに行ったりして、障害のある人の思いや生活の様子を、実際に見聞する学習の場を設定する。
- 自分にできることを考えてみようという学習の場や、実践しようという気持ちを高めるための場を設定する。

③ 学習計画

次	学 習 活 動	学 習 の 場	主 な ね ら い
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「おとなになっても」を読んで、感想を話し合う。 ○ 「おとなになっても」という題に込められた筆者の気持ちについて話し合ったり、筆者がみんなに分かってほしいと思っていることを話し合ったりする。 ○ 障害のある友だちにどんなふうに接したいかを話し合う。 	「おとなになっても」をもとにした話し合い。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然に接し合うことが嬉しいという筆者の気持ちに気づかせる。 ○ 障害のある人もない人も、共に生きていく仲間として、助け合い、励まし合い、認め合うことが大切であるという筆者の思いにふれさせる。 ○ 生活のなかで、できることがたくさんあることに気づかせる。
第2次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「障害のある人の生活を知ろう」を読んで感想を話し合う。 ○ 障害のある人の思いや、生活について、尋ねたり、話を聞いたりする。 ○ これまでの学習を振り返り、自分たちにできることはないかを話し合う。そのなかで、自分たちにできることを実践しようという気持ちをもつ。 	<p>「障害のある人の生活を知ろう」をもとにした話し合い。</p> <p>障害のある人との一緒の場での話し合い。</p> <p>「自分たちにできること」についての話し合い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちの意見を認めながら、学習や仕事、スポーツなどに励む障害のある人たちの姿から、自分たちとおなじように生活していることに気づかせる。また、「自分たちと違うこと」についても気づかせる。 ○ 障害のある人に対する自分の気持ちの変化や、自分たちにもできることがあるということに気づかせ、積極的に実践しようとする心情や態度を養う。

④ 学習展開例

第1次 (1時間)

学 習 活 動	教 師 の 支 援 や 留 意 点	教 材 等
○ 「おとなになっても」を読んで、感想を話し合う。	○ 障害のある主人公が楽しく学校生活を送ることができるのは、先生や	「ちきゅうのなかま」 P35～40

<ul style="list-style-type: none"> ・育ちゃんの学級の人はとても優しい ・育ちゃんも周りの人のことを、とてもよく考えている <p>○ 「おとなになっても」という題に込められた筆者の気持ちについて話し合ったり、筆者がみんなにわかってほしいと思っていることを話し合ったりする。</p> <p>○ 障害のある友だちにどんなふうに接したいかを話し合う。</p>	<p>学級の仲間の接し方によるところが大きいことに気づかせる。</p> <p>○ 仲間として、自然に助け合い、接し合うことが嬉しいという筆者の思いに気づかせる。また、申し訳ないという気持ちもあることに気づかせるとともに、なぜそう感じたのかも考えさせる。</p> <p>○ おとなになっても、共に生きていく仲間として、助け合い、励まし合い、認め合おうという気持ちを持ち続けてほしいという筆者の思いにふれさせる。</p> <p>○ また、そのような気持ちを持ち続けられれば、共に助け合って生きていく自然な社会が実現するという筆者の願いにふれさせる。</p> <p>○ いろいろな具体例を通して話し合いながら、生活のなかで、できることが、たくさんあることに気づかせる。</p>
---	---

第2次 (2時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<p>○ 「障害のある人の生活を知ろう」を読んで感想を話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生きる力を身につけるために、いろいろな学習をしている ・真剣に仕事をしている ・スポーツを楽しんでいる ・仲間と一緒に楽しく暮らしている人もいる <p>○ 障害のある人の生活について、尋ねたり、話を聞いたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな障害か ・どんな仕事をしているか ・買い物や家事はどうしているか ・行きたい所へはどうやって行くか ・生活していて、不便なことやいやなことはどんなことか ・生活していて、嬉しいことや楽しいことはどんなことか ・どんな趣味を楽しんでいるか 	<p>○ 「障害のあるお友だちの学校生活」を取り上げ、学習の内容は異なるものがあったとしても、自分たちと同じように生きる力を身につけるための学習をしていることに気づかせる。</p> <p>○ 「障害のある人の社会生活」からは、障害のある人も仕事をしたり、好きなことを楽しんだりして自分らしく生活していることを理解させる。</p> <p>○ 障害のある人（協同実践者）を教室に招き、実際に質問することを通して、障害のある人の生活を感じ取らせる。</p> <p>○ 様々な施設・関係諸機関との打ち合わせ・訪問等は、必ず先方の意向を尋ね失礼や無理のないよう計画すると共に訪問のエチケットなどにも気を配るよう児童に伝える。</p> <p>○ 指導計画と照らし合わせながら、協同実践者と、本時のねらいについ</p>	<p>「ちきゅうのなかま」 P41～44</p> <p>「ちきゅうのなかま」 P45</p>

<p>○ 自分たちにできることはないかを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 障害のある人など、困っている人を見かけたら「お手伝いしましょうか」と声をかける ・ 頼まれたことをお手伝いする ・ 自分にできないことを頼まれたら、周りの人に声をかける ・ 頼まれないことは勝手にしない <p>○ これまでの学習を振り返り、自分たちにできることを実践しようという気持ちをもつ。</p>	<p>て共通理解を図っておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 質問したり話を聞いたりしながら、協同実践者の思いにふれさせる。 ○ 障害のある人も、当たり前で生活しているということに気づかせ、あわせて、「どんなことに困っているのか」「どんなときに手伝ってほしいのか」などを感じ取らせる。 ○ 協同実践者と一緒に、具体的な場面を想定しながら、自分たちにできそうなことを考えさせる。 ○ 困っている人を見かけたら、まず声をかけることが大切であること、また、勝手にしてあげることはお節介になったり危険につながったりすることもあるということなどにも気づかせる。 ○ 自分にできないことを頼まれた時にはどうするのかということについても理解を深めさせる。 ○ たとえ断われたとしても、決して恥ずかしいことでないことを伝える。声をかけられた勇気に自信をもち、今後も積極的に関わろうという思いを抱かせる。 ○ これまでの学習を通して、障害のある人に対する自分の気持ちの変化に気づかせる。 ○ 「障害のある人をまちで見かけたら」も参考にさせながら、自分たちにできることは積極的に実践しようとする気持ちを抱かせる。 	<p>「ちきゅうのなかま」P48</p>
---	--	----------------------

4 第4章 ボランティア活動で幸せなまちづくりを考えよう

「ボランティア」という言葉は、かつては「奉仕」や「慈善」という言葉と同義語的に用いられた。

しかし、今日では「市民一人ひとりが主体となって行う自発性や自由意志をもとにした代償を期待することのない社会参加活動」であると理解されるようになってきている。

福祉教育を語る時、ボランティア等福祉に関わる行動や体験の意義が強調されている。体験や実践は福祉的心情の育成や福祉についての関心を高めたり理解を深めたりする上で極めて有効であり、また、その心情や理解は実践に結びついて初めて人格化するからである。

今日の子どもたちの家庭や地域社会での生活において、福祉的な体験をもつ機会が極めて少ないこともボランティア活動の教育的意義の深い由縁である。意図的・計画的な指導が期待されている学校での福祉教育だけに、子どもたちのボランティア精神が、よりたくましく育成されるよう体験や実践を充実させ、興味関心がふくらむような指導方法を工夫していく必要があるだろう。

そこで、「小学校学習指導要領 第3章 道徳」の以下の内容についての学習の場を設定した。

○生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちを持って接する。

「第3学年及び第4学年 2-(4)」

○日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

「第5学年及び第6学年 2-(5)」

○働くことの大切さを知り、進んで働く。

「第3学年及び第4学年 4-(2)」

○働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。

「第5学年及び第6学年 4-(2)」

○郷土の文化と伝統を大切にし、郷土を愛する心をもつ。

「第3学年及び第4学年 4-(5)」

○郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。

「第5学年及び第6学年 4-(7)」

○我が国の文化と伝統に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心を持つ。

「第3学年及び第4学年 4-(6)」

○外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善につとめる。

「第5学年及び第6学年 4-(8)」

また、道徳の時間に学習したことを「総合的な学習の時間」に発展させたり、他教科でも活用できるように資料の構成等に配慮した。学習内容を発展させる具体的な活動を展開する際には、地域で実際にボランティア活動をしている人や、自治会、福祉施設の人などと共に考え合うなど、地域の人々との連携を十分にはかり協同実践者として活動を展開することが必要となる。そのために活動の計画段階から共に考え、授業後の振り返りまで協同で実践することが大切である。

最後にボランティア活動の精神が、私たちの生活に満ちるよう願いを込めて「ボランティア」という詩でまとめている。

(1) 題材「一枚の手紙をとおして思ったこと」

① 目標

- 自分の経験や筆者の気持ちから、ボランティア活動はどのような活動か話し合わせることを通して、ボランティア活動は「援助」ではなく、「共に支え合っていくこと」であることを理解させる。
- 社会に奉仕することの喜びを理解させ、公共のために役立つことを実践していこうとする心情や態度を育てる。

② 学習の場

- 筆者が手紙ボランティア活動をしているときの気持ちについて話し合い、社会に奉仕することの喜びを感じ取ろうとする学習の場を設定する。
- ボランティア活動とはどのような活動なのか話し合い、ボランティア活動についての基本的な考え方を理解する学習の場を設定する。
- 学習を振り返り、自分たちにできることを考えたり実践したりしようとする学習の場を設定する。

③ 学習計画

次	学 習 活 動	学 習 の 場	主 な ね ら い
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動の経験について話し合う。 ○ 「一枚の手紙をとおして思ったこと」を読み、筆者が手紙ボランティアをしているときの気持ちについて考え話し合う。 ○ ボランティア活動とはどのような活動なのかについて話し合う。 ○ 学習を振り返り、感想を書き発表する。 	<p>「どんなボランティア活動を知っていますか」</p> <p>「一枚の手紙をとおして思ったこと」</p> <p>『ボランティア活動』って何だろう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今までボランティア活動に参加した経験があるかどうかの確認をする。 ○ 筆者は自分が行った活動を通して、ボランティア活動は楽しく、自分や相手、周囲にも喜びがある活動であると感じていることを理解させる。 ○ ボランティア活動は、共に支え合う活動で、実践を続けることが活動の成功に結びつくことを理解させる。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動にはどんなものがあるか話し合う。 ○ さまざまなボランティア活動の具体例を知る。 	<p>『ボランティア活動』って何だろう</p> <p>「ちきゅうのなかま」P63～73</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動の意義や目的について再確認させる。 ○ ボランティア活動にはどのようなものがあるのかを理解させる。
第3次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちにできる具体的な活動について話し合う。 ○ 自分たちにできるボランティア活動の活動計画を立てる。 ○ 詩「ボランティア」を朗読する。 	<p>「ボランティア活動に参加してみよう」</p> <p>詩「ボランティア」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちにできるボランティア活動にはどのようなものがあるか考えさせる。 ○ ボランティア活動の計画を立てさせる。 ○ ボランティア活動の精神を確認し活動に生かそうとする気持ちを持たせる。

④ 学習展開例

第1次 (1時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動の経験について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の清掃活動に参加した。 ・子ども会の廃品回収に参加した。 ・名前は聞いたことがあるが何かはよく知らない。 ・うちの人がボランティア活動をしている。 ○ 「一枚の手紙をとおして思ったこと」を読んで感想を話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・はがきを書いて返事が来てとてもうれしそうだ。 ・こんなボランティアがあるとは知らなかった。 ・手紙ボランティアをやってみたい。 ○ 筆者が手紙ボランティアをしているときの気持ちの変化について考え話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・お年寄りとはどんなことが嬉しいのだろう。 ・お年寄りに喜んでもらいたい。 ・とてもうれしい。 ・活動してよかった。 ・自分にも、まわりの人にも喜びがある。 ・これからも続けたい。 ○ ボランティア活動とはどのような活動なのかについて話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・お金をもらわない活動 ・人のためになる活動 ・まわりの人のためだけでなく自分の心も豊かになる活動 ・共に支え合っていく活動 ○ 学習を振り返り、感想を発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動してみたい。 ・自分のためにもなるということを知った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動に参加したことがある児童に、その時の様子や気持ちなどについて発表させ、ボランティア活動について学習していくのだということを理解させる。 ○ 小学生の作文であることを紹介し親近感を持たせるようにする。 ○ 手紙ボランティア活動は相手喜んでくれるだけでなく、自分や周りの人にも喜びがある活動だということに気づいていく筆者の様子を読み取らせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・お年寄りに初めて手紙を書いている時の気持ちと返事をもらったときの気持ちの変化 ○ ボランティア活動の精神にふれる話し合いになるように助言する。 ○ ボランティア活動について初めて知ったことやわかったことなどを発表させるようにする。 	<p>「ちきゅうのなかま」 P62</p> <p>「ちきゅうのなかま」 P57～60</p> <p>「ちきゅうのなかま」 P61</p>

第2次 (1時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動の意義や目的を再確認する。 ○ 経験したことのあるボランティア活動や知っているボランティア活動について話し合う。 ○ 様々なボランティア活動の例を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ボランティア活動」って何だろうを読み、ボランティア活動は自分たちの身近にあるのだということを理解させる。 ○ いろんなボランティア活動があることを理解することで、自分が興味や関心を持っていることも、ボランティア活動に活かしていくことができることを理解させる。 ○ 紹介されているボランティア活動について詳しく知ることによって「自分もしてみたい」といった意欲を喚起させる。 	<p>「ちきゅうのなかま」P61～62</p> <p>「ちきゅうのなかま」P63～73</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習を振り返り、感想を書き発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分がやってみたいボランティア活動についても書かせる。 	<p>「ちきゅうのなかま」P62</p>

第3次 (1時間)

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちにできる具体的なボランティア活動について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校内外で自分たちにもできるボランティア活動はないかを考えさせる。 	<p>「ちきゅうのなかま」P62</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちにできるボランティア活動を発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・朝の自主活動 ・アルミ缶の収集 ・登校時のごみひろい ・古切手の収集 など 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 安全に自分たちで取り組めるボランティア活動について発表させる。 	<p>「ちきゅうのなかま」P74～75</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ やってみたいボランティア活動ごとにグループを作り実践計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動をする際には、事前にしっかりと計画を立てる必要があること、いろんな場所でボランティア情報を得ることができることを理解させる。 ○ 活動の時間や場所に無理がないか、安全に活動できるかなどについて助言する。 	<p>「ちきゅうのなかま」P76</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 詩「ボランティア」を朗読する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 最後に、詩「ボランティア」を読むことでボランティア活動の意義や目的をしっかりと確認させる。 	<p>「ちきゅうのなかま」P77～78</p>

Ⅲ ボランティア学習指導展開について

ここに記載する学習指導展開例は、「総合的な学習の時間」に、福祉体験活動・環境活動・国際交流活動を中心としたボランティア学習を進める際の、参考にするために作成したものです。

1 第1章 くらしを支える社会福祉のしくみを調べてみよう

(1) 単元名「福祉社会とはどんなしくみ？」

(2) 目標

- 「誰もが自分らしく暮らせる社会」を考えさせることにより、福祉に対する関心を高め、福祉社会のしくみを調べていこうとする意欲を高める。
- 関連図書で調べたり、協同実践者の話を聞いたり、地域社会を調べることを通して、福祉社会のしくみや工夫を理解させる。
- 福祉社会に対する自分の考えを表現する場を設けることにより、身近な福祉社会とよりよいかかわりをもとうとする気持ちを高める。

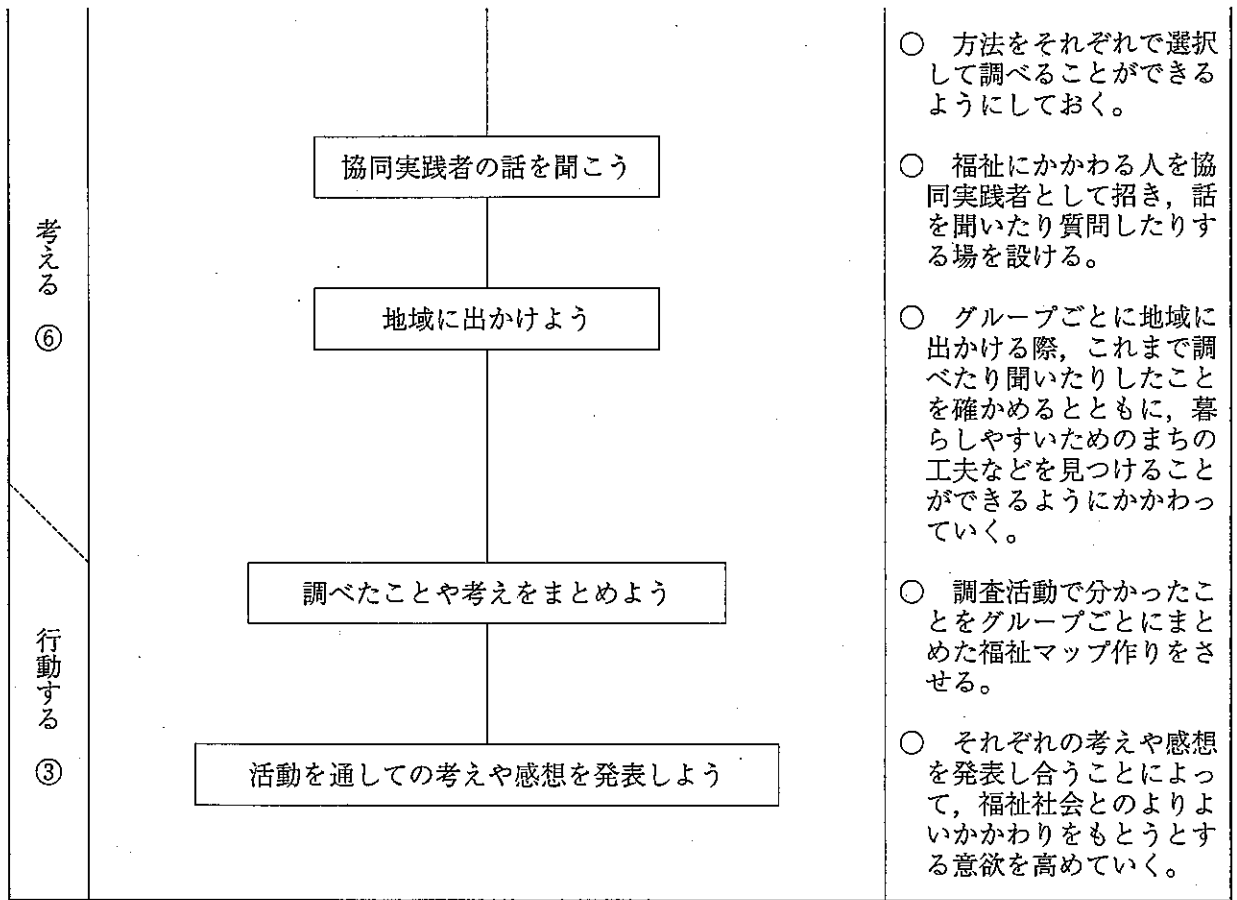
(3) 学習の場

- ふれる……「誰もが自分らしく暮らせる社会」について考えることによって福祉に目を向け、「福祉社会のしくみを調べよう」というテーマを設定する場を設ける。
- 気づく・感じる……福祉読本「ちきゅうのなかま」を配布するとともに、自分が選択した方法で、福祉社会のしくみを調べる場を設ける。
- 考える……福祉にかかわる協同実践者の話を聞くことによって福祉社会の新たな視点に気づき、それらの視点をもって地域をみつめ直す場を設ける。
- 行動する……福祉社会とこれからもよりよいかかわりをもっていこうとする意欲を高めるために、これまでの活動や自分の考えをまとめたり、それらを発表したりする場を設ける。

(4) 学習計画（全13時間）：○数字は時間を表す

学習の流れの見方 → オリエンテーション 子どもの活動 学習活動の意欲づけや言葉かけ

過程	学 習 の 流 れ	支援（教師のかかわり）
ふれる ①	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">誰もが自分らしく暮らせる社会って？</div> <div style="margin: 10px 0 10px 100px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">福 祉 ？</div> <div style="margin: 10px 0 10px 100px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">福祉社会のしくみを調べよう</div> <div style="margin: 10px 0 10px 100px;">↓</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">福祉読本で調べよう</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">インターネットで調べよう</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">図書館で調べよう</div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「誰もが自分らしく暮らせる社会」は、どのような社会なのかを話し合うことによって、子どもの意識が「福祉」に向かうようにする。 ○ 「福祉」についての感想、疑問、考えなどを出し合うなかで、福祉社会のしくみを調べていこうとする意欲をもたせる。 ○ 調べる方法を子どもに出させるとともに、福祉読本「ちきゅうのなかま」があることを知らせ配布する。
気づく・感じる ③		



(5) 学習展開例

① 「ふれる」(1/1時間)「福祉社会はどんなしくみ？」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 誰もが自分らしく暮らせる社会について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・安全に暮らせる社会だと思う ・明るく楽しく暮らせる社会だ ・「誰もが」って誰だろう… ・差別がない社会かな ○ 「福祉」で知っていることを話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・福祉の仕事をしているところがあるよ ・老人ホームも福祉に関係があるのじゃない ・点字ブロックは目が不自由な人のための工夫だ ○ 「福祉社会のしくみを調べよう」というテーマを設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ それぞれが考える「誰もが自分らしく暮らせる社会」を自由に発言させていく。 ○ 話し合いのなかで、「『誰もが…』というのは、誰のことなのか?」「どんな暮らしを幸せというのか?」を話題にしていく。そのことによって、「男女差や年齢差、障害のあるなしにかかわらず、よりよい暮らしができる社会」に目を向けさせていく。 ○ 子どもの発言に「福祉」「福祉社会」という言葉がみられない場合には、そのような社会を「福祉社会」ということを伝えていく。 ○ 児童の発言を公的機関・施設・まちづくりの工夫などのグループに分けて板書し、福祉を支える社会のしくみへとつなげていく。 ○ 板書をもとに、「福祉を支える社会のしくみは他にはないのだろうか」と問いかけることによって、本単元のテーマを子どもとともに設定していく。 	

② 「気づく・感じる」(1/3時間)「福祉社会を調べよう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題「福祉社会について調べよう」を想定し、調べる方法を確認する。 ○ 自分の選んだ方法で、福祉社会のしくみを調べる。 <ul style="list-style-type: none"> ・福祉読本「ちきゅうのなかま」で調べる ・図書館の本で調べる ・インターネットで調べる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調べる方法は、できるだけ子どもの発想を生かすことができるようにしていく。 ○ 「図書で調べたい」という発言につなげて、福祉読本「ちきゅうのなかま」があることを紹介し、それぞれに配布する。 ○ 方法を選ぶ場を設けるとともに、選択ができていない児童には、それぞれの方法のよさを話すなどのかかわりをもっていく。 ○ 一つの方法にとどまることなく、別の方法でも調べるよう声かけを行う。 	<p>「ちきゅうのなかま」 関連図書</p>

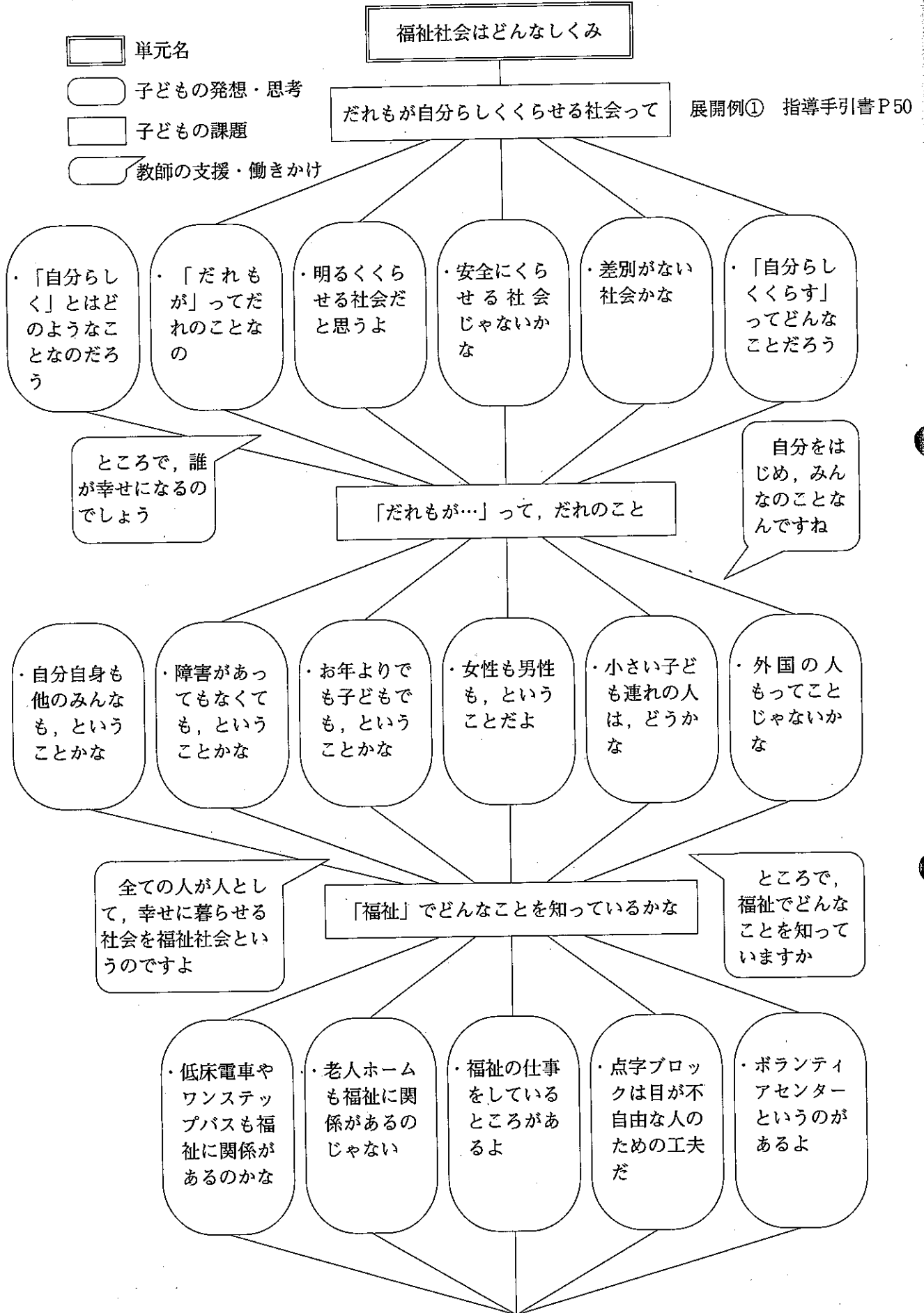
③ 「考える」(4/6～6/6時間)「地域へ出かけ福祉を見つけよう」

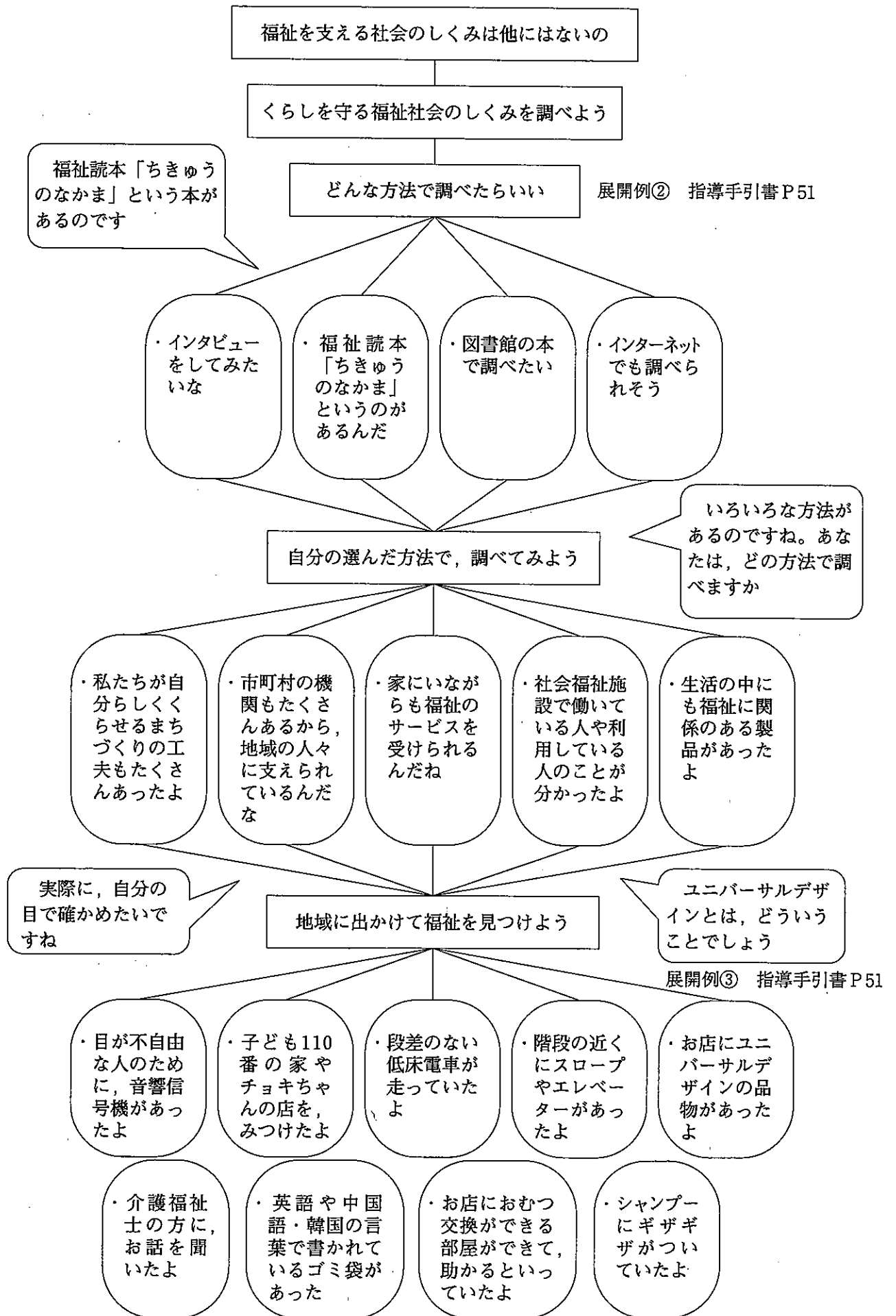
学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域へ出かけ、調べ活動を行う ○ 調べたことを自分なりにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの調べ活動や協同実践者の話を生かしながら、「福祉施設を訪ねて話を聞く」「誰もが自分らしく暮らせるまちづくりの工夫を探す」などの視点を、グループごとに明確にもたせる。 ○ 校外に出かける際の注意点や約束事を児童とともに確認する。 ○ プリント等を用意しておき、帰校後、順次自分なりに調べたことをまとめるよう声かけを行う 	<p>プリント</p>

④ 「行動する」(1/3時間)「活動や考えをまとめよう」

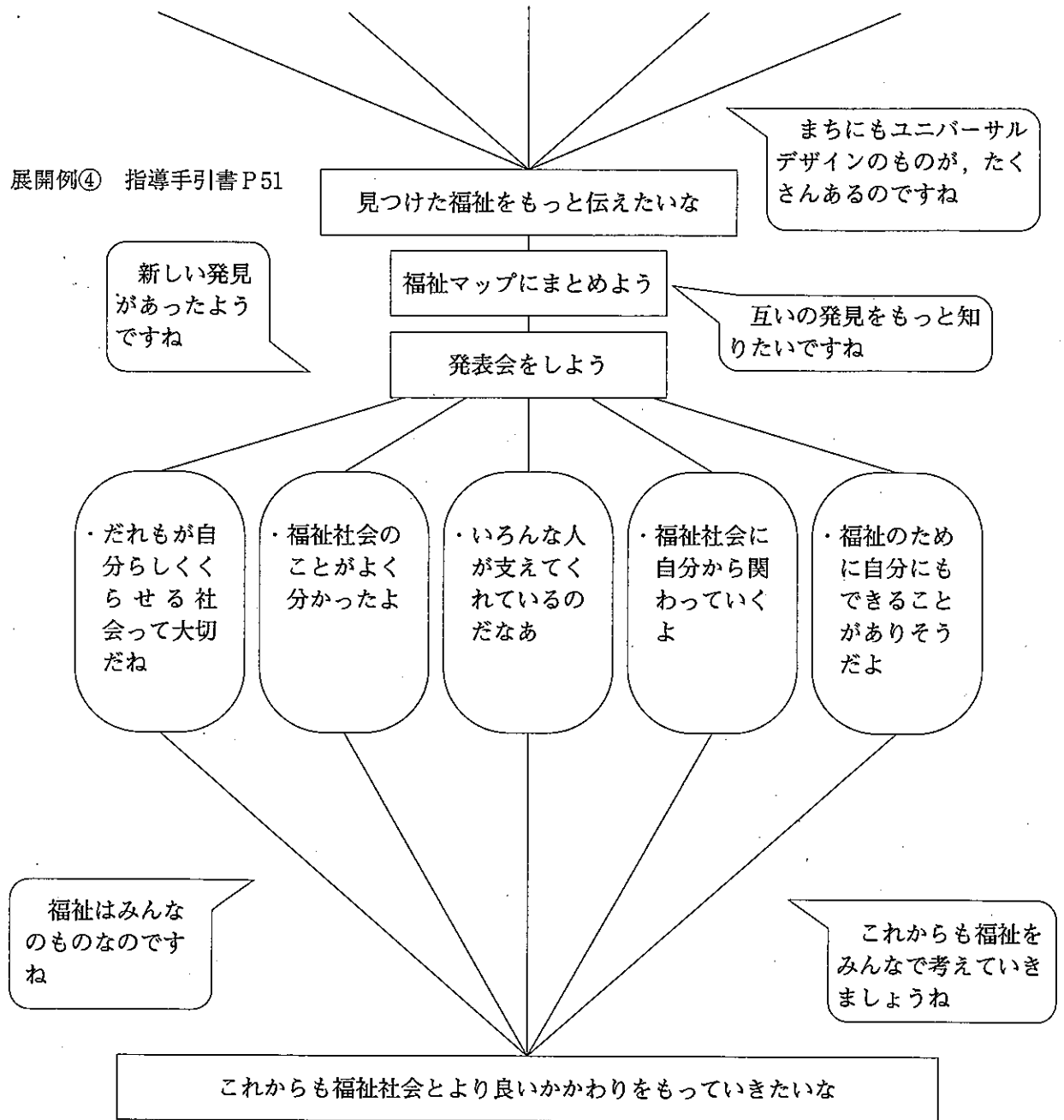
学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの取り組みをまとめ、それぞれの考えを発表し合うことを確認する。 ○ これまでの活動内容や調べて分かったこと、今の考えなどをグループごとにまとめ、発表会の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調べたことをもとに福祉マップをつくり、気づいたことをまとめるようにする。 ○ 地域で見つけた福祉を尋ねると、児童はそれぞれに調べたことを発表すると思われる。それらの発表を生かしながら、「全体で発表会をしたい」という意欲につなげていく。 ○ まとめの形式は、「マップ」をはじめ、「新聞」「作文」「しおり」「パンフレット」などがあること、また、それぞれの形式において、写真やイラスト活用の工夫ができることなどの声かけを、グループの実態に応じて行っていく。 	

■ 全体構想





展開例④ 指導手引書 P51



2 第2章 お年よりが安心してくらするまちづくりを考えよう

(1) 単元名「お年よりと交流しよう」

(2) 目標

- 地域のお年よりとの交流を通して、お年よりの存在を身近に受け止めさせ、一緒に活動する喜びや心が通じ合う嬉しさを味わうことができるようにする。
- お年よりに喜んでもらえるようなふれあい活動を計画させ、相手の様子や身体のことを考えながら交流できるようにする。
- お年よりのことを思いやる気持ちをもって自分にできることを実行させ、お年よりと積極的に関わっていけるようにする。

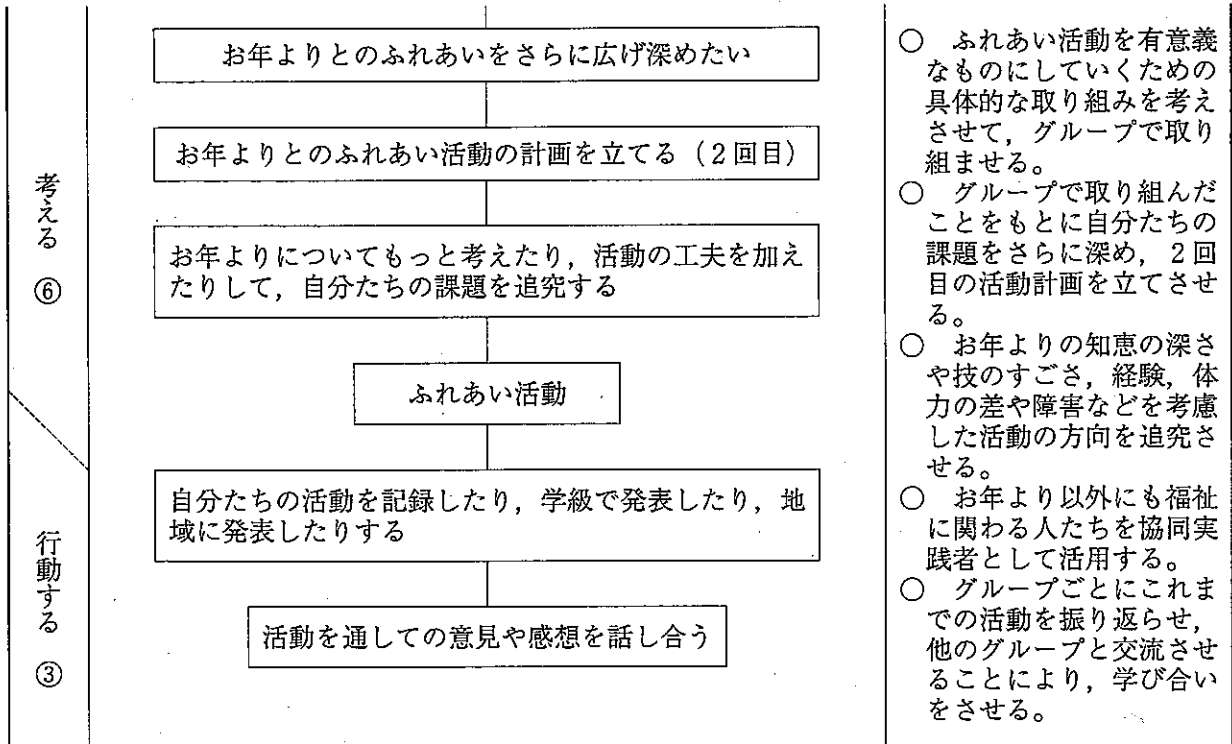
(3) 学習の場

- ふれる……お年よりとの交流を通して、お年よりを身近な存在としてとらえ、お年よりの日常生活や願い、生きがいなどにふれられる場を設定する。
- 気づく・感じる……お年よりとの交流の中で、自分たちの活動がお年よりの立場に立ったものかどうかを振り返り、自分たちとお年よりではいろいろな違いがあることに気づく場を設定する。
- 考える……お年よりに対する自分自身の関わり方を考える。お年よりに対する社会的な改善の動きの中で、自分がどのようにサポートし行動するかを考える場を設定する。
- 行動する……活動を通して、お年よりと互いに認め合い、助け合いながら、共に生きていこうとする態度を築くとともに、よりよい自己を追求しようとする場を設定する。

(4) 学習計画（全15時間）：○数字は時間を表す

学習の流れの見方 → オリエンテーション 子どもの活動 学習活動の意欲づけや言葉かけ

過程	学 習 の 流 れ	支援（教師のかかわり）
ふれる ③	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">お年よりとのふれあい活動の計画を立てる</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">ふれあい活動をする</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">お年よりともっと仲良くなりたいな</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">今までの体験を振り返る</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">できることから始めよう</div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域のお年よりに関心をもたせ、児童の自由な発想で計画を立てさせる。 ○ ふれあい活動においては、一人の児童がより多くの地域のお年よりにふれ、感動がもてるように配慮する。 ○ 「ちきゅうのなかま」から発展させて、お年よりともっと仲良くなるためにはどのような活動をしていったらよいか、自分ならばどんなことから始めるかについて考えさせる。 ○ 自分たちとお年よりとはいろいろな違いがあることに気づかせ、自分たちの活動がお年よりの立場に立ったものか振り返らせる。
気づく 感じる ③	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">自分にできることを友達と協力しながらやってみよう</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">招待活動</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">施設訪問</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">体験学習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">その他</div> </div>	



(5) 学習展開例

「ふれあい」（3／3時間）「お年よりともっと仲良くなりたいな」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ ふれあい活動での気づきや、今まで地域のお年よりとふれあった経験を出し合い、その時の様子や感想について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・とても楽しかった ・すこしとまどった ・自分からは積極的に行動できなかった ○ 「ちきゅうのなかま」の「お年よりが安心して暮らせるまちづくりを考えよう」を読んで感想を話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・お年よりのことをもっと知りたい ・お年よりのことをもっと深く考えてみたい ・自分もこのようなふれあいをしてみたい ・お年よりともっと仲良くなりたい ○ お年よりともっと仲良くなるにはどうしたらよいか、各自でそのとりかかりを考え、活動の構想を練る。 <ul style="list-style-type: none"> ・一緒に遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今までお年よりとふれあった経験を想起させ、その時の自分の気持ちがどのようなであったかを振り返らせる。 ○ お年よりとのふれあいが、年齢の差や世代の差などのさまざまな障壁により、心のふれあいにまで高まらないことに気づかせ、ほんとうに心からふれあい、もっと仲良くなりたいという気持ちを高めさせる。 ○ 話し合いの視点として、次のようなことに留意させて、今までとは違ったふれあいをもちたいという意欲を高めさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・お年よりの気持ちを考える ・お年よりの立場に立つ ・お年よりがおかれている現状に目を向ける ○ 子どもたちの遊びの場や生活の場からの子どもらしい発想を大切にする。 ○ 「自分だったら何をするか、何ができるか」という「自分発」の発想で考えさせ、どんな発想でも発展性があることを示唆する。 	<p>ふれあい活動の記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真 ・ビデオ ・感想文 <p>「ちきゅうのなかま」 P11～P28 参照</p> <p>活動の構想ノート</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・老人ホームやグループホームを訪問する ・一緒に野菜や草花を育てる ・お年よりを学校に招く ・道具を借りてお年寄り体験をする ・自分たちのことをお年よりによく知ってもらう ・お年よりから昔の話を聞く ・お年よりと手紙のやりとりをする ・お年よりに習うなど <p>○ 各自で練った活動の構想を発表し合い、気づきや感想を話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ お年よりと子どもの両方の立場に立って考えるよう助言する ○ お年よりの立場からだけではなく、自分も楽しみたいという立場でも考えさせ、子ども側から一方的に交流を施すよりも、共にふれあいを築きあげていくように導きたい。 ○ 自由に絵や図、文で構想をかかせることによって自分の考えを深めさせたり、他の児童と考えを交流ができるようにさせたい。 ○ 構想を交流させ、同じ考えをもつ児童でグループを編成させる。 	<p>発表黑板など</p>
--	--	---------------

「気づく・感じる（1／3時間）「自分にできることを友達と協力しながらやってみよう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教材等
<ul style="list-style-type: none"> ○ お年よりの日頃の暮らしぶりを調べて、お年よりと自分たち子どもでは、いろいろなところに違いがあることに気づく。 <ul style="list-style-type: none"> ・あまり考えたことがない ・年齢や体力、持久力 ・経験や知恵 ・動作やしゃべり方 ・食べ物や服の好み ・ものの考え方、性格など ○ 自分たちで考えた活動を発展させていくうえで、これから調べたり考えたりしてみたいことをグループで話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・祖父や祖母に意見を聞く ・アンケートをとる ・お年よりにインタビューする ・自分たちの紹介カードを作ってお年よりに送る ・お年よりと手紙のやりとりをする ・お年よりのための施設を調べる ・老人ホームやグループホームの職員に尋ねる ・お年より体験をする 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ちきゅうのなかま」の写真を見せながら、自分たちのやっているスポーツや趣味との違いに気づかせる。 ○ 身近なお年よりのことを思い浮かべさせ、自分たちとの違いを比較検討させる。 ○ 80歳のお年よりの現在と70年前の写真を比較しながら、人はみな1日1日年を重ねていることに気づかせる。 ○ 長い人生の中で、どのように年を重ねてきたのかについて考えさせる。 ○ 自分たち子どもとどのように違いがあるのか考えさせたり、認知症の病気があることをふれたりすることで、身近な存在であるお年よりのことを自分たちは意外と知らないことに気づかせる。 ○ お年よりと自分たちの違いをふまえて、活動をさらに実りのあるものにするためにどのような取り組みをしたらよいかグループで話し合いをさせる。 ○ 話し合いの中で、すぐに実施できるものと、他の協力を必要とするものに分けて考えさせる。 ○ アンケートの項目やインタビューの内容を具体的に検討させることによって、自分たちがお年よりのどんなことを知りたいのか、そして、それをどのように活動に活かしていくつもりであるかを明確にさせる。 ○ 自分たちで考えた活動について、子どもとお年よりの違いをどのように克服していくか、そのためにどのような手段が必要かということを考えさせることによって、自分たちの活動を振り返らせ、グループの課題をつくらせていく。 	<p>「ちきゅうのなかま」 P21～P24 参照</p> <p>「ちきゅうのなかま」 P23参照</p>

○ グループごとの課題を発表し、共通の課題を探る。	○ グループごとの課題を発表させ、話し合いの中で、いくつかの視点から課題を統合させ、共通の課題へと迫らせていきたい。
---------------------------	--

「考える」(1/6～4/6時間)「お年よりとのふれあい活動の計画を立てよう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教材等
<p>○ これまでの学習を振り返り、グループの取り組みを生かしたふれあい活動の計画を立てる。</p> <p>(お年よりが生きた時代を知ろう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔のおもちゃ調べ ・昔の遊び調べ ・昔話集作り <p>(お年よりに習おう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・唄あそび ・竹とんぼ, お手玉作り, 水鉄砲 ・凧作り ・しめなわ作り, わらじ作り ・野菜, 草花栽培 <p>(お年よりを学校に招こう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・招待状作り ・催しもの作り ・プレゼント作り <p>(自分たちのことを知ってもらおう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紹介の劇作り ・紹介ビデオ作り ・各種調査結果の壁新聞, プレゼンテーション作り ・文通 <p>○ 自分たちの立てた計画に沿ってふれあい活動を実施する。</p>	<p>○ グループの取り組みで得たこと(アンケート調査やインタビューの結果の集約など)を生かし、お年よりとのふれあいをさらに広げ深めるということは自分たちにとってどんなことかしっかりと考えさせて、活動の計画を立てさせる。</p> <p>○ 活動の計画を立てさせるにあたっては、なるべく児童の趣味・関心に基づく課題に沿うかたちで進めていく。</p> <p>○ 今までの学習を振り返らせ、次のような観点から計画作りの支援をしていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お年よりに喜んでもらえるものであるか ・自分たちも楽しめる活動であるか ・活動がお年よりの立場に立ったものであるか ・活動がお年よりの理解へと向かうものであるか ・お年よりに身体的負担をかけるようなものではないか ・準備, 場所, 費用など, 活動に無理はないか ・お年よりがもっている「よさ」(技の熟練度, 経験, 品性の奥ゆかしさやがまん強さ, やさしさなど)が生きる活動であるか ・活動に継続性があるか <p>○ 活動を実施させるにあたっては、グループごとに協力して取り組むように働きかける。</p> <p>○ 地域の福祉施設の職員に協力を要請したり、ボランティアを募集したりして、地域の人材の活用を図りたい。</p>	<p>ワークシート① 指導手引書 P82</p> <p>協同実践者 ボランティア</p>

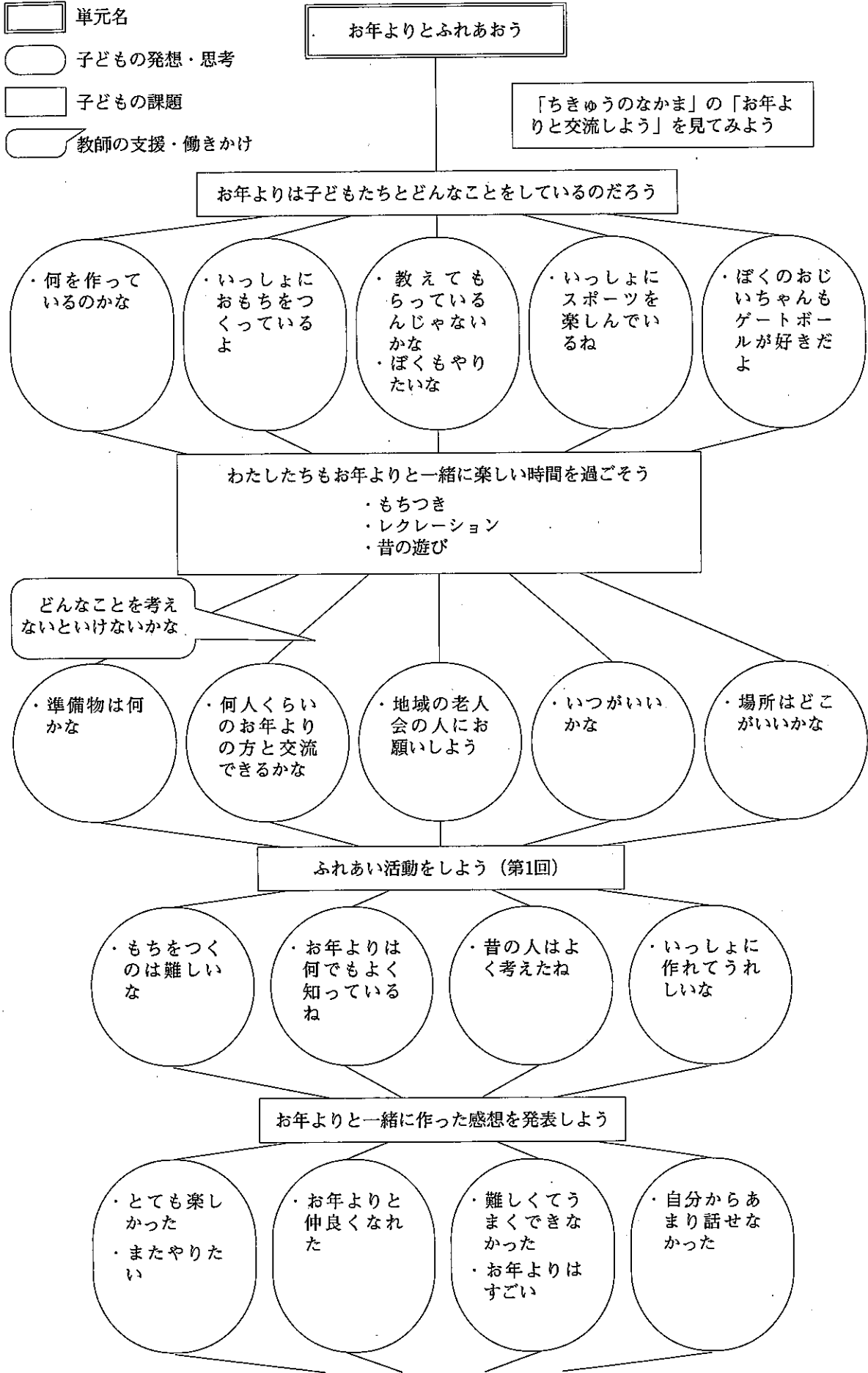
「行動する」(1/3～3/3時間)「活動を通しての意見や感想を話し合おう」

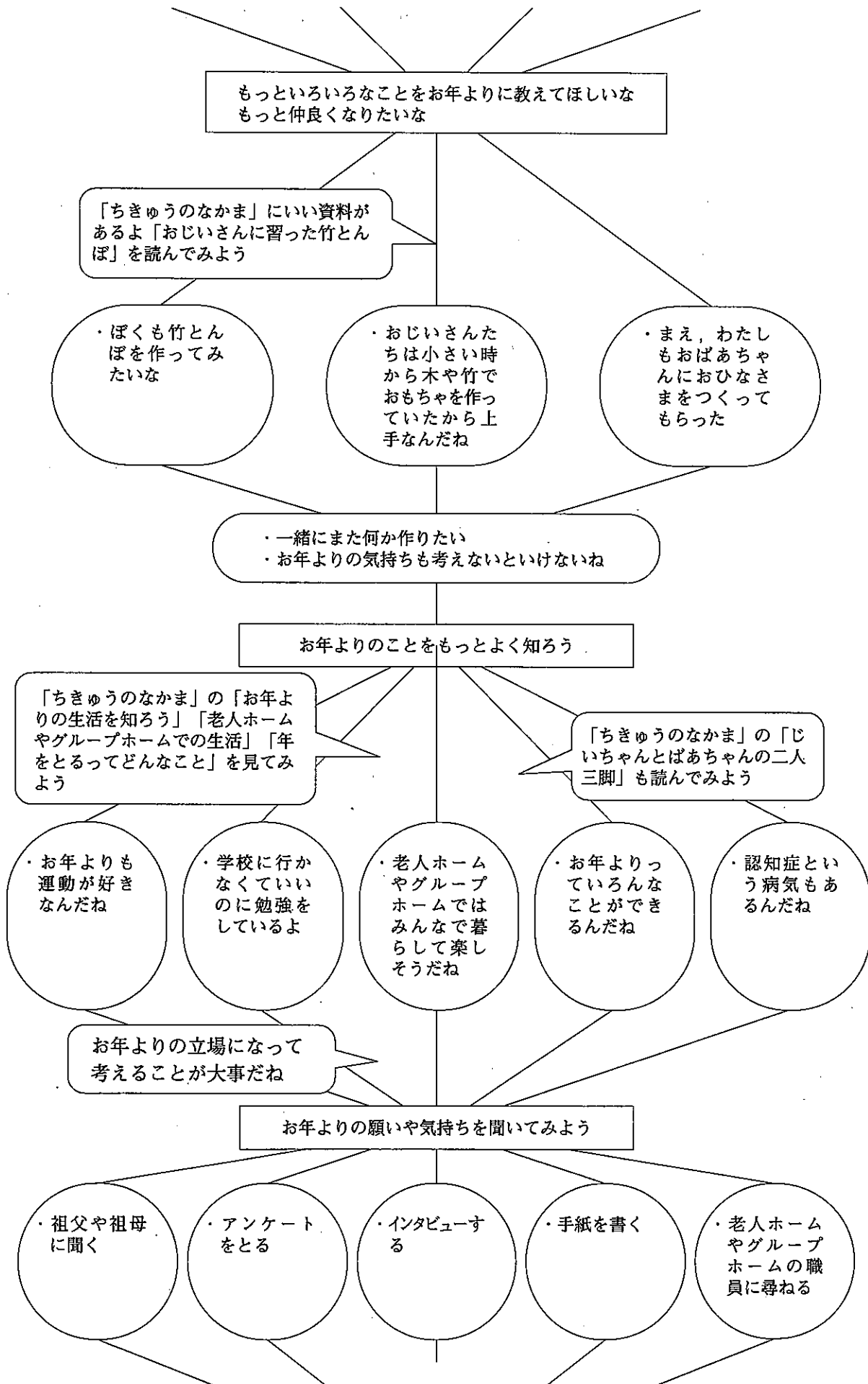
学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<p>○ 活動を通して感じたことや考えたことを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても楽しかった ・お年よりも喜んでもらえるたようだ ・お年よりに学ぶことがたくさんあった ・お年よりに対する自分の接し方が変わった ・もっと内容を工夫すればよかった ・お年よりに感想を聞きたい ・これからももっとふれあっていきたい ・お年よりがおかれている現状などをもっと知りたい <p>○ お年よりとのかかわりにおける、これからの自分の行動や活動の方向について考え、これからの活動における自分の抱負を作文にまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分にできることはどんなことだろうか ・お年よりに積極的にかかわっていきたい ・福祉に関する本を探して読みたい ・お年よりをめぐる問題や福祉の問題について、くわしく調べたい ・いろいろな施設の仕事を知りたい <p>○ 作文を発表し、交流をする。</p>	<p>○ グループでの活動がどうだったかを次の観点で振り返らせ、自分たちの変容をとらえさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今までの活動と比べて内容を工夫したことについて ・人とのかかわり方について ・自分自身の気持ちの変容について ・お年よりのイメージの変化について <p>○ 話し合いを通して、自分が考えたことや友達の見解で考えが変わったことなどを作文にまとめさせる。</p> <p>○ 全体の活動のテーマの中で、自分はどのようにかかわっていったかを中心に振り返らせたい。</p> <p>○ 福祉にかかわるいろいろな仕事の紹介をして、世の中には、仕事としても責任をもってお年よりとかかわっている人がいることを理解させる。</p> <p>○ 作文を発表させ、他の児童の考えを聞かせることにより、自分の考えをさらに広げさせたい。</p>	<p>ワークシート② 指導手引書 P82</p>

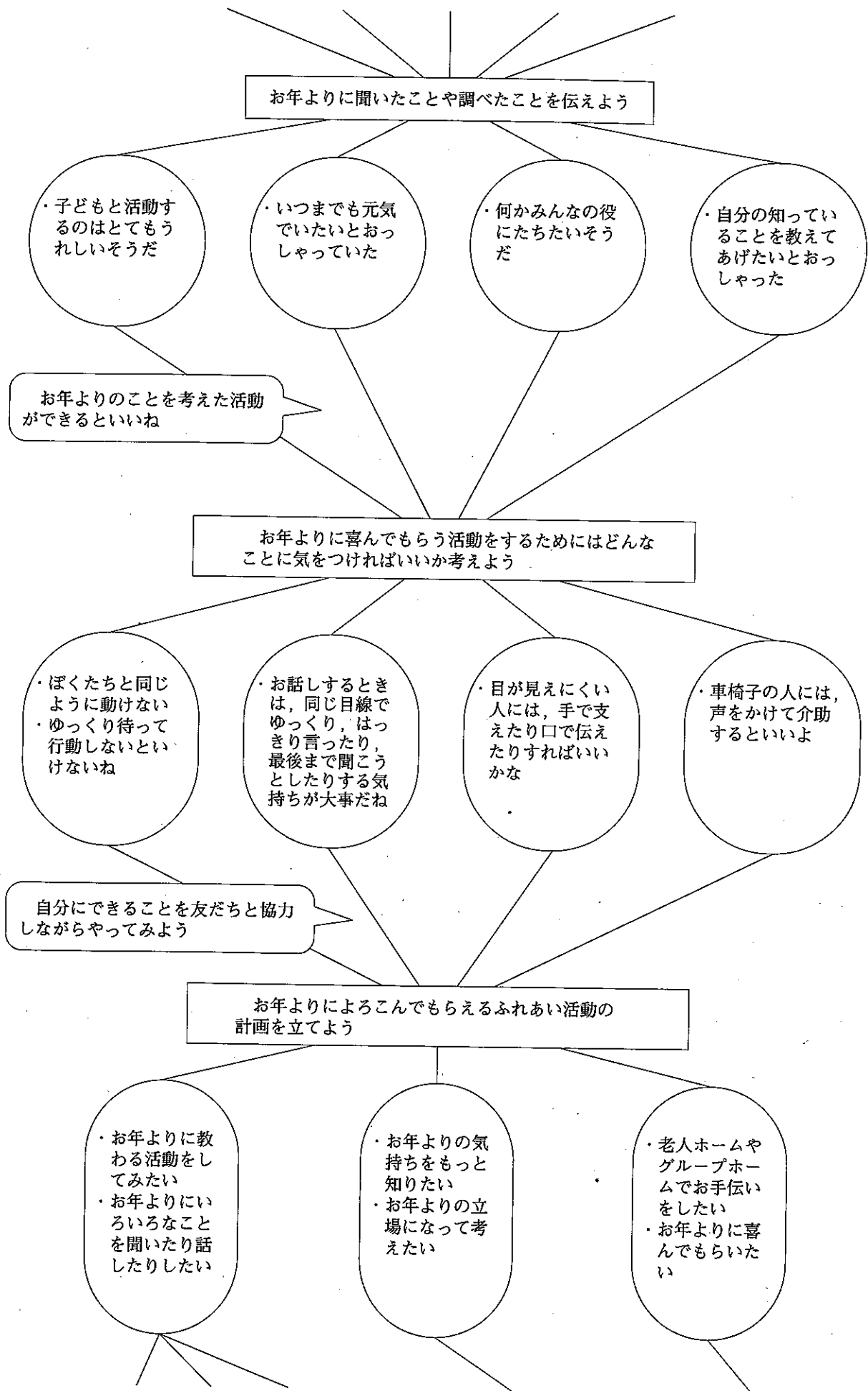
*協力をお願いする施設や団体とは、事前に教員が連絡を取り、学習の目標や場、学習計画等を共通理解することが大切である。また、児童の活動に際しては、「あいさつの仕方」「電話のかけ方」「インタビューの仕方」「お礼の言い方」「手紙の書き方」などを事前に考えさせることも大切である。

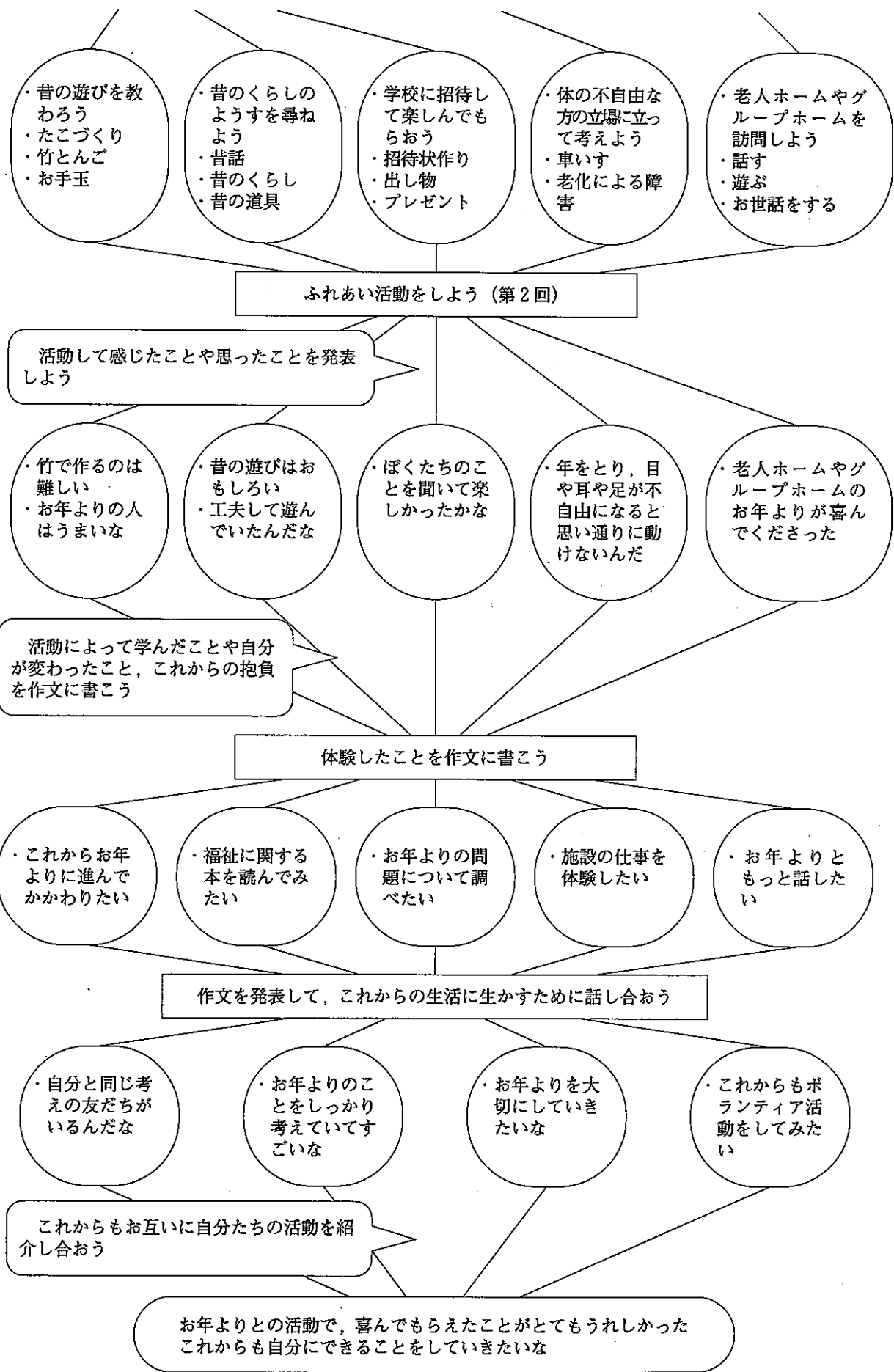
■ 全体構想

- 単元名
- 子どもの発想・思考
- 子どもの課題
- 教師の支援・働きかけ









3 第3章 障害のある人が自分らしくくらするまちづくりを考えよう

(1) 単元名「心の輪をひろげよう」

(2) 目標

- 実際のふれあいを通して、障害のある人と互いに認め合い理解し合う喜びを感じ取らせる。
- 障害のある人も同じ社会に生きる一人であることに気づかせ、どのように関わり合い、支え合っ
ていけばよいのかを考えさせる。
- 相手の立場に立って行動することの大切さに気づかせ、よりよい社会をつくっていくために、自
分にできることを実践しようとする心情を養う。
- 新しい出会いやいろいろな体験を通して、自分の生き方への考えを深めさせる。

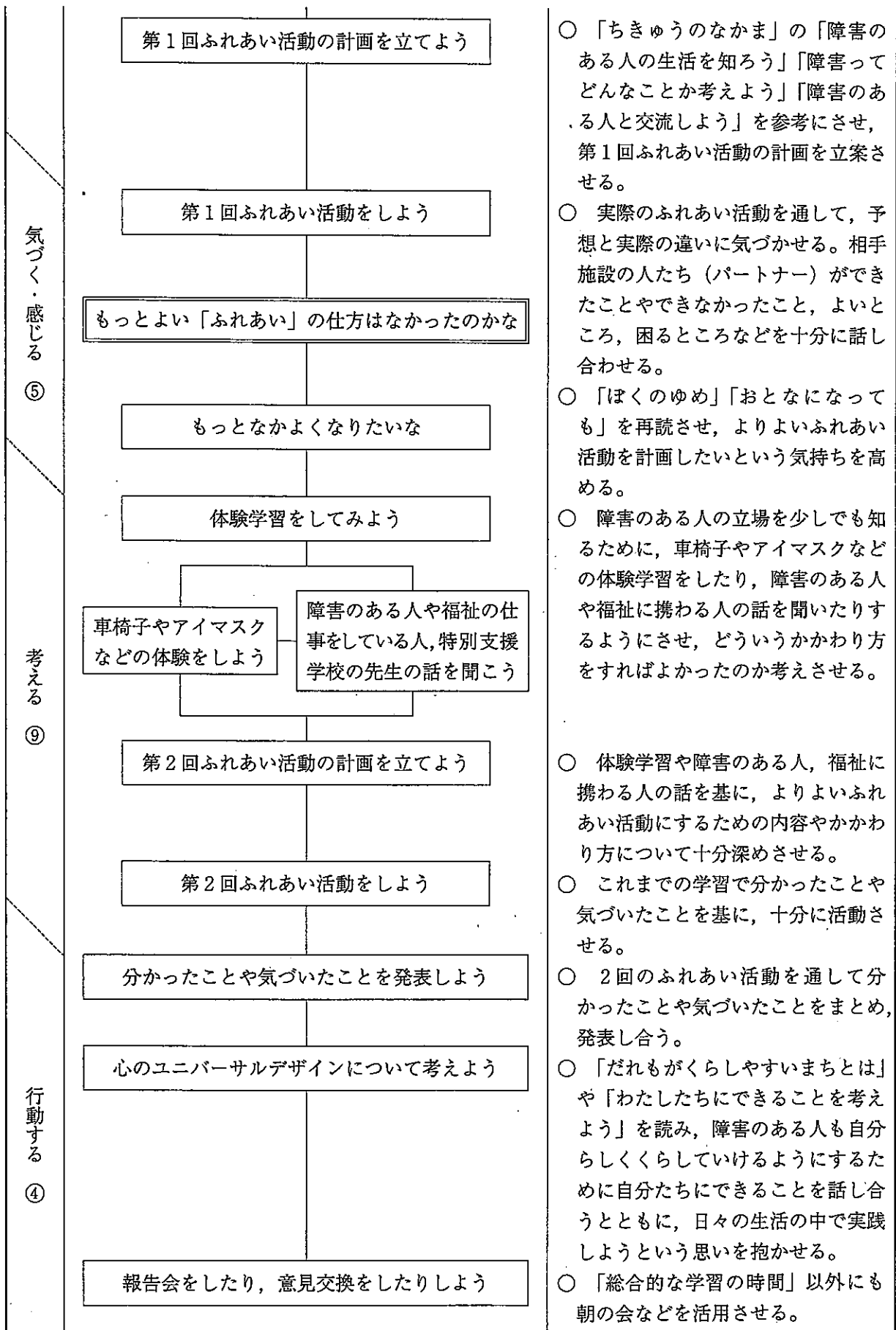
(3) 学習の場

- ふれる……「ほくのゆめ」「おとなになっても」を読み、障害のある人の思いや生き方を想像し
てみる場を設定する。また、実際にふれあい活動（交流）をするために、電話連絡や電子
メール、ビデオレターのやりとりを通して相手施設の人たちの様子を調べたり、「障害の
ある人の生活を知ろう」「障害ってどんなことか考えよう」「障害のある人と交流しよう」
を参考にしたりして、第1回ふれあい活動の計画を立てる場を設定する。
- 気づく・感じる……障害のある人たちと、実際にふれあう場（第1回ふれあい活動）を設定する。
その後、ふれあい活動を振り返ったり、「ほくのゆめ」「おとなになっても」を再読したり
して、よりよいふれあい活動にする必要があることに気づく場を設定する。
- 考える……「体験して、発見しよう」を参考に車椅子やアイマスクなどの体験学習を行ったり、
障害のある人や福祉の仕事に従事している人、養護学校の先生から話を聞いたりして、よ
りよいふれあいについて話し合い、第2回ふれあい活動の計画を立てる場を設定する。ま
た、実際にふれあう場（第2回ふれあい活動）を設定する。
次に、「福祉マップをつくろう」（第1章）を参考に、障害のある人の立場でまちのなか
を見つめ直す活動を設定する。
- 行動する……2回のふれあい活動や「体験して、発見しよう」「福祉マップをつくろう」を通し
て分かったことを基に、障害のある人が、わたしたちと同じまちで自分らしくくらし
ていけるようにするために必要なことをまとめ、話し合ったり、発表したりする場を設定する。
（発展として、朝の会や帰りの会などを活用して、継続的に自分の実践について報告し合っ
たり、意見を交換したりする場を設定する。）

(4) 学習計画（全21時間）：○数字は時間を表す

学習の流れの見方 → オリエンテーション 子どもの活動 学習活動の意欲づけや言葉かけ

過程	学 習 の 流 れ	支 援（教師のかかわり）
ふれる ③	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 障害のある人ってどんな人だろう 障害のある友だちともなかよくなりたい </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> 「ほくのゆめ」「おとなになっても」を 読んでみよう </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> 相手施設の様子を 調べてみよう </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ちきゅうのなかま」の中の「ほくのゆめ」「おとなになっても」を読み、障害のある人と知り合ってみ たいという気持ちをもたせる。「ふれる」の段階では、教師は、児童に いろいろな疑問を感じ取らせるようにする。 ○ 電話やインターネットなどを利用させ、相手施設の様子や特徴などを つかませる。電話をする際には、十分に相手施設への配慮をさせる。



- 「ちきゅうのなかま」の「障害のある人の生活を知ろう」「障害ってどんなことか考えよう」「障害のある人と交流しよう」を参考にさせ、第1回ふれあい活動の計画を立案させる。
- 実際のふれあい活動を通して、予想と実際の違いに気づかせる。相手施設の人たち（パートナー）ができたことやできなかったこと、よいところ、困るところなどを十分に話し合わせる。
- 「ぼくのゆめ」「おとなになっても」を再読させ、よりよいふれあい活動を計画したいという気持ちを高める。
- 障害のある人の立場を少しでも知るために、車椅子やアイマスクなどの体験学習をしたり、障害のある人や福祉に携わる人の話を聞いたりするようにさせ、どういふかわり方をすればよかったのか考えさせる。
- 体験学習や障害のある人、福祉に携わる人の話を基に、よりよいふれあい活動にするための内容やかわり方について十分深めさせる。
- これまでの学習で分かったことや気づいたことを基に、十分に活動させる。
- 2回のふれあい活動を通して分かったことや気づいたことをまとめ、発表し合う。
- 「だれもがくらしやすいまちとは」や「わたしたちにできることを考えよう」を読み、障害のある人も自分らしくくらししていけるようにするために自分たちにできることを話し合うとともに、日々の生活の中で実践しようという思いを抱かせる。
- 「総合的な学習の時間」以外にも朝の会などを活用させる。

(5) 学習展開例

① 「ふれる」(1/3時間)「障害のある人ってどんな人だろう・障害のある友だちともなかよくなり
たい」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教材等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 障害のある人との出会いやふれあいの体験について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・車椅子に乗った人や白い杖を使って歩いている人を見たことがある。 ・特別支援学級の友達がいる。 ○ 「ぼくのゆめ」「おとなになっても」を読んで、感想を話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・筆者の気持ちや、障害のある人の思いや願いを想像する。 ○ ふれあい活動について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい活動をするために必要な相手の情報について話し合う。 ・調べ方について話し合う。 ・ふれあい活動計画の立て方について話し合う。(日時、活動プログラム、グループ、係など) ・その他 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの自分の経験を自由に話させ、障害のある人に対する気持ちや考えを十分に引き出す。 ○ 話し合いの中で、「自然にしてもらえる」ということや「助け合って生きていく」こと、「障害のある人も積極的に生きていく」ことなどについて十分に考えさせる。 ○ 障害のある人への接し方については、実際の体験を通して気づかせたいので、ここでは積極的な方向づけは控え、いろいろな疑問を感じ取らせるようにする。 ○ 想像だけでは十分な理解ができないことに気づかせ、ふれあい(交流)活動をしてみたいという気持ちを抱かせたい。 ○ 学校の所在地によって適切な相手施設を把握しておき、教師側から教えるようにする。 ○ 実際にふれあい活動をするためには、互いの好きなことや得意なこと、また、一緒にできる遊びなどを考えなければならないことに気づかせたい。 ○ 調べる方法についての考えが広がらないときは、電話連絡、電子メール、ビデオレターなどの方法もあることを知らせる。 ○ 具体的な計画については、次時に考えさせるようにすることで、ふれあい活動に対する期待感を高める。 	<p>「ちきゅうのなかま」 P29～P40</p>

② 「気づく・感じる」(5/5時間)「もっとなかよくなりたいな」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教材等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1回ふれあい活動を振り返り、相手施設の人たちのことについてグループごとに話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・できたこと、できなかったこと、得意だったこと、苦手だったこと、嬉しかったこと、よかったこと、困ったこと、疑問に感じたことなど。 ・話し合った内容をノートやワークシートなどに記録する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実際のふれあい活動(第1回ふれあい活動)の振り返りを通して、事前に考えていたこと(予想)と実際との違いに気づかせ、相手のことをより深く考えさせたい。 ○ よい意見を言おうとするのではなく、正直な感想を述べることの大切さを伝える。 ○ 児童が疑問に感じたことはノートに整理させておき、本時の後半で、解決するための方法を考えさせるようにする。 	<p>総合的な学習の時間用のノートやワークシートなど</p>

<ul style="list-style-type: none"> ○ グループごとに話し合いの内容を発表する。 ○ 「ほくのゆめ」「おとなになっても」を再読し、相手施設の人の気持ちについて話し合う。また、“自然に接する”ことができたかどうかについて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループごとの発表を通して、互いの考え方にふれさせたい。 ○ 「ほくのゆめ」「おとなになっても」を再読させることで、相手の気持ちや接し方、ふれあい活動の内容（プログラム）などについて振り返るきっかけとしたい。 ○ 互いのことを大切にしたいふれあいができたかどうか、十分に話し合わせ、よりよいふれあい活動をしたという気持ちを抱かせたい。 	<p>「ちきゅうのなかま」 P29～P40</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 振り返りをもとに、よりよいふれあい活動をするための話し合いをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・車いすやアイマスクなどの体験をしてみよう。 ・障害のある人や福祉の仕事をしている人、特別支援学校の先生などの話を聞こう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「話し合いを通して感じた疑問などは、どのようにして解決すればよいか」、また、「自分たちの接し方をよりよくするには、どうすればよいか」などの視点を与え、体験学習や関係する人の話などに児童の関心を向けさせたい。 	<p>「ちきゅうのなかま」 P50</p>

③「考える」（1・2／9時間）「体験学習をしてみよう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教材等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 社会福祉協議会の職員や実際に車いすを利用している人、介助している人の指導のもとに車いすを体験する。 <ul style="list-style-type: none"> ・車いすを利用している人や介助している人の思いを知る。 ・車いすを利用している人や介助している人の気持ちを考える。 ○ 車いすを体験して感じたことや分かったことをもとに、相手との接し方や、第1回ふれあい活動の内容について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事前に関係施設に連絡を取り、日程などを調整しておく。 ○ 話をしていただく際は、事前にねらいや児童の疑問などを伝え、それらをふまえて話していただくようにする。 ○ 体験学習をする時は、危険について、十分認識させ、不真面目な態度（「ふざける」など）をとらずに、真剣に車いすを利用する人の気持ちを感じ取らせるようにする。また、真剣な態度が相手の気持ちを理解することにつながるということを事前に十分理解させておく。 ○ 体験をするなかで、自分が感じたことをグループの人に伝えさせるようにする。 ○ 「頑張ってもできないことを一人でさせられた時の気持ち」「手伝ってもらって、できた時の気持ち」「一人でできることやしたいことを手伝われた時の気持ち（お節介をされた時の気持ち）」「相談されないで勝手に決められた時の気持ち」などについて気づかせたい。 ○ 「特別視してほしいくないという気持ち」「無能力扱いしてほしいくないという気持ち」「困っていることや必要なことは手伝ってほしいという気持ち」「共に活動する喜びを分かち合い、共有したいという気持ち」などは、誰でも同じであるということに気づかせたい。 ○ 具体的な接し方は、相手によって個々に違いはあるが、基本的な姿勢は同じであるということに気づかせたい。 	

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1回ふれあい活動の内容が、「自分たちも相手も共に楽しめるものであったか」についても、体験活動で感じたことをもとに十分に振り返らせたい。
--	--

④「行動する」(2・3/4時間)「心のユニバーサルデザインについて考えよう」

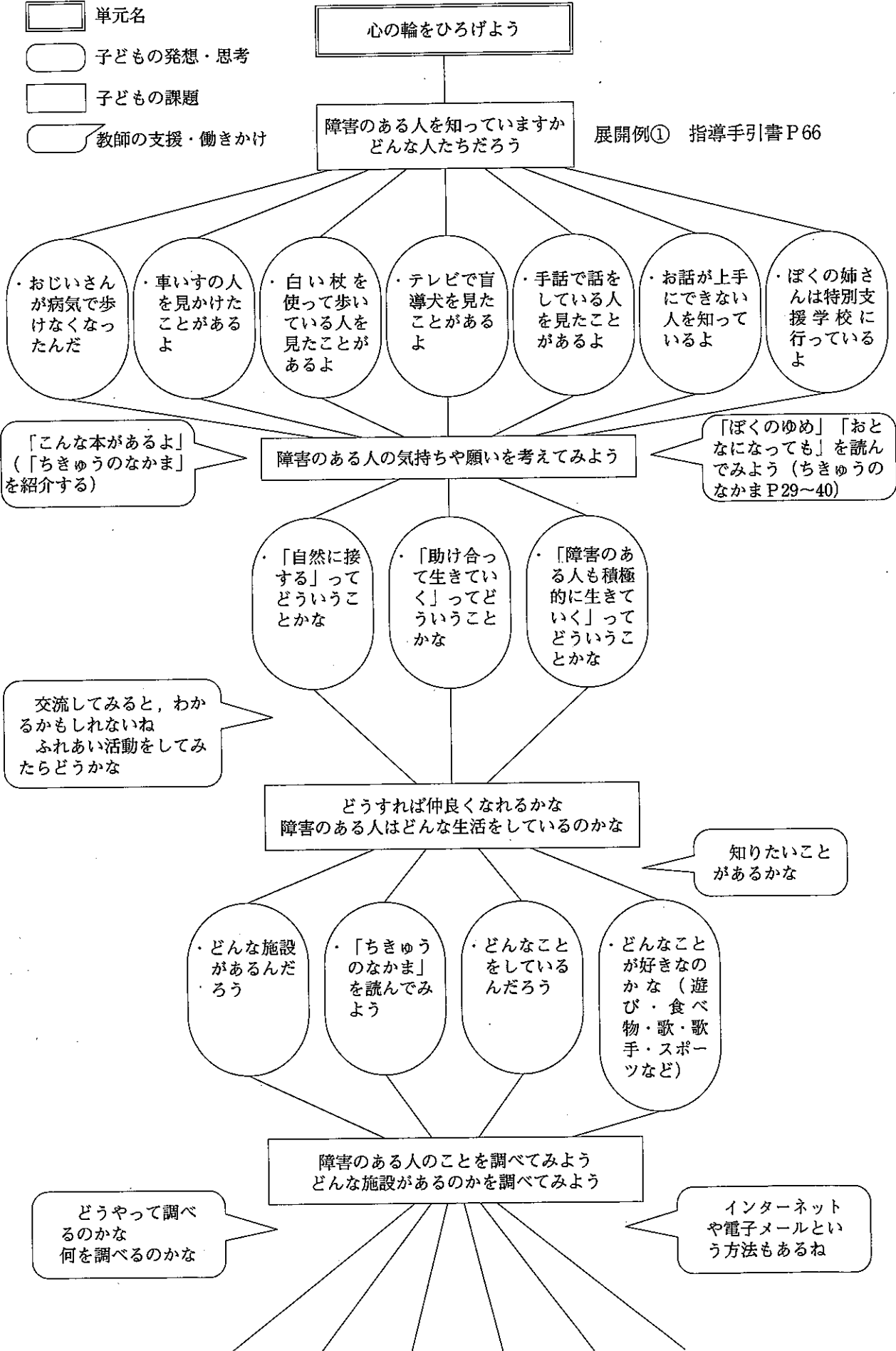
学 習 活 動	教師の支援や留意点	教材等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ちきゅうのなかま」の「だれもがくらしやすいまちとは」や「わたしたちにできることを考えてみよう」を読み、地域を見つめ直す。 <ul style="list-style-type: none"> ・「障害のある人にとっても便利なまち」という視点で地域を歩いて回る。 ○ 障害のある人も自分らしく暮らしていけるようにするために、自分たちにできることを話し合う。 ○ 日々の生活のなかで実践する力を高めるための方法を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 車いすを利用する人や目が不自由な人にとって、どのような箇所が困るかだけでなく、どのようにすればよいか考えさせるようにする。 ○ 施設面だけではなく、自分たちにできることはどのようなことかを考えさせる。 ○ 気づきや考えたことなどをノートやワークシートに記録させる。 ○ これまでのふれあい活動や体験学習を振り返らせながら、次のことについて十分に話し合わせたい。 <ul style="list-style-type: none"> ・困っている人を見かけたら、「お手伝いしましょうか」と声をかけ、頼まれたら協力する。 ・お手伝いできないことについては、まわりのお手伝いできる人へお願いする。 ・たとえ断られても、決して恥ずかしいことではなく、悪いわけでもない。たまたまその人に必要がなかったというだけのこと。また困った人に出会ったら、もう一度声をかけてみる。 ・話をする時は、分かりやすい言葉でゆっくり話す。 ・同じ社会で生きている人として認め、「同情的な態度(お節介)をとらない」「特別視しない」「先入観をもって接しない」「人に対する時は、節度をもって接する」など。 ○ 分かったことや気づいたことをノートやワークシートに追記させ、自然に接するための具体的な方法について意識化を図りたい。 ○ これまでの授業に参加していただいた障害のある人の思いを想起させ、偏見を持たずに「自然に接する」ことが大切であることに気づかせたい。 ○ 日々の生活のなかで、自分の生き方として実践し続けることで「自然に接する」態度が身についていくことに気づかせたい。 ○ これまでの学習を通して、自分がどのように変わったか、これからの実践に対する思いも含め、次時に報告し合うことができるようまとめさせる。 	<p>「ちきゅうのなかま」 P5～6, 8</p>

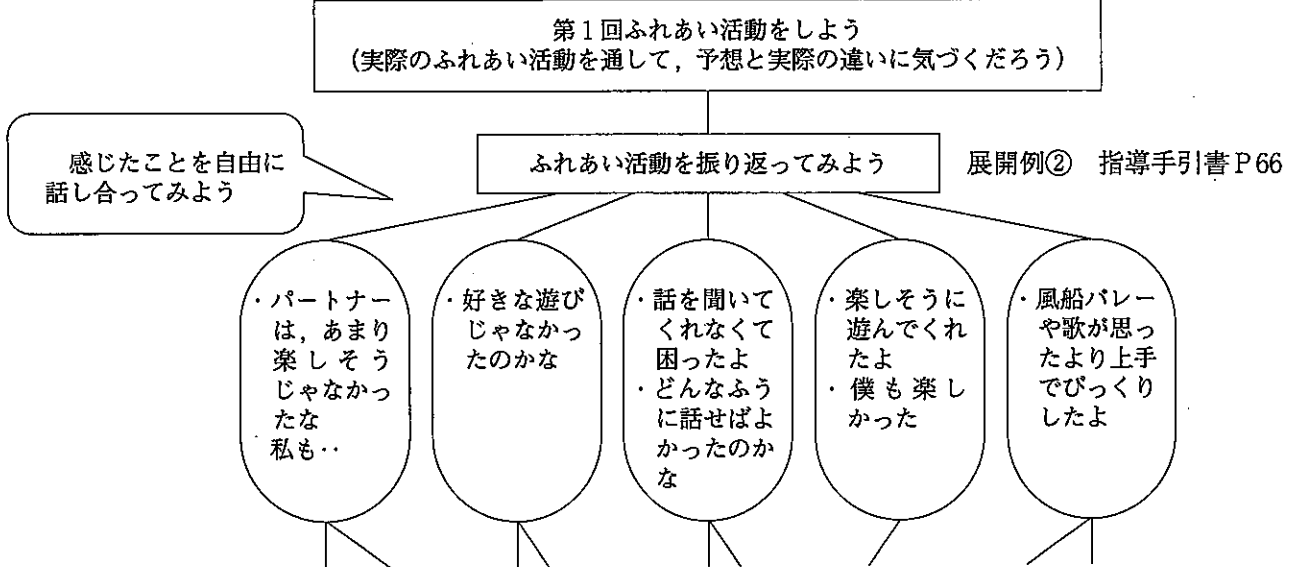
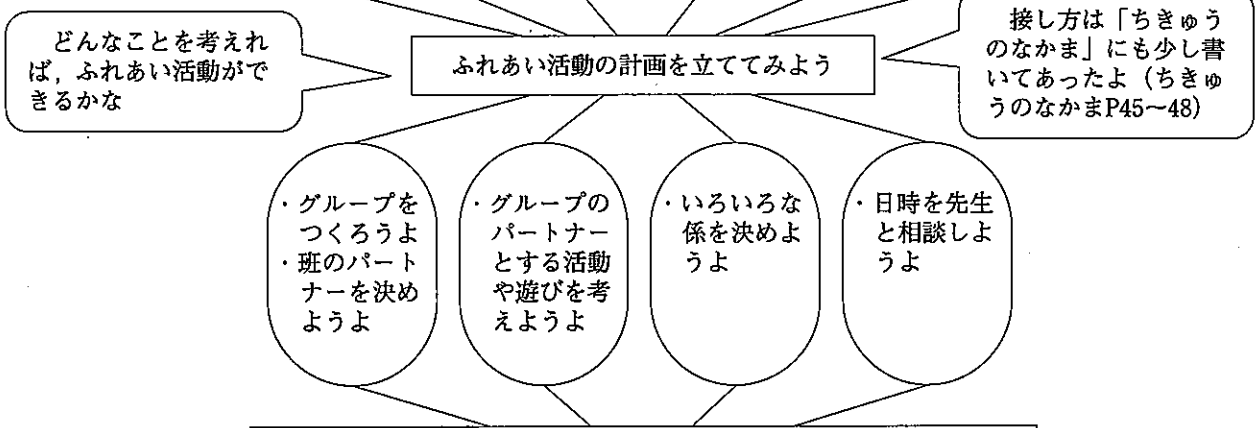
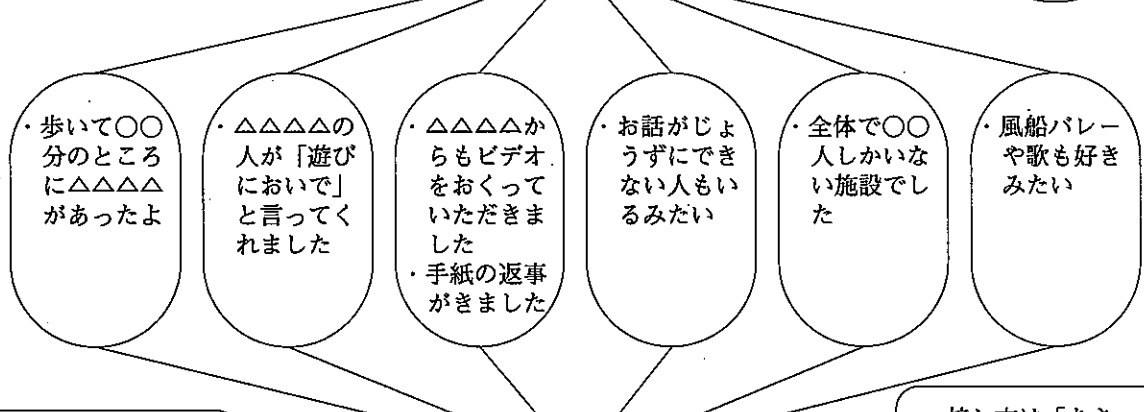
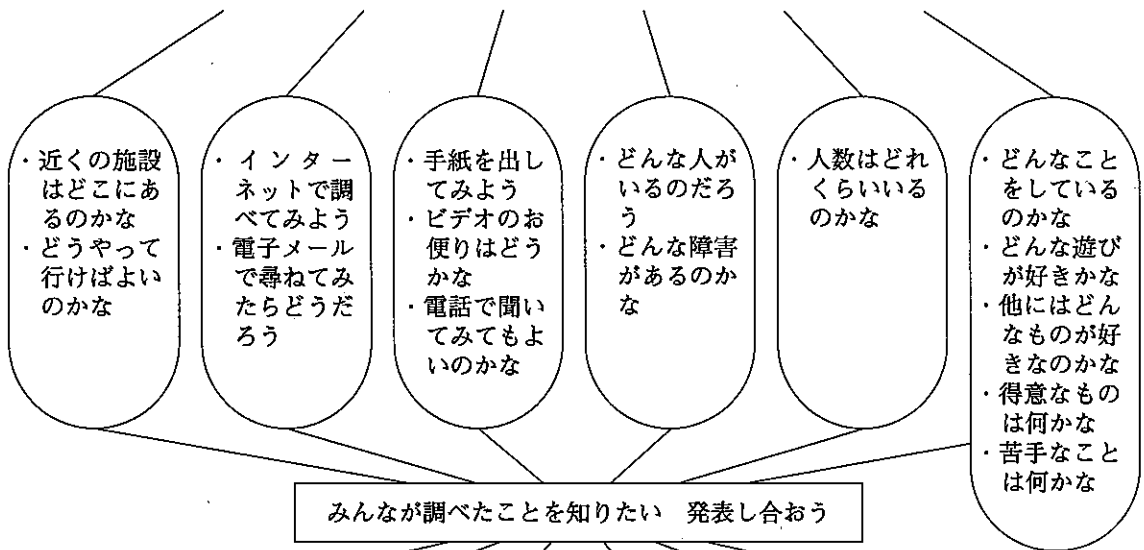
- | |
|---|
| ○ 朝の会や帰りの会などを活用し、日々の生活を通して気づいたことや自分の実践などについて話し合う機会を設けるようにし、児童の意識の継続を図りたい。 |
|---|

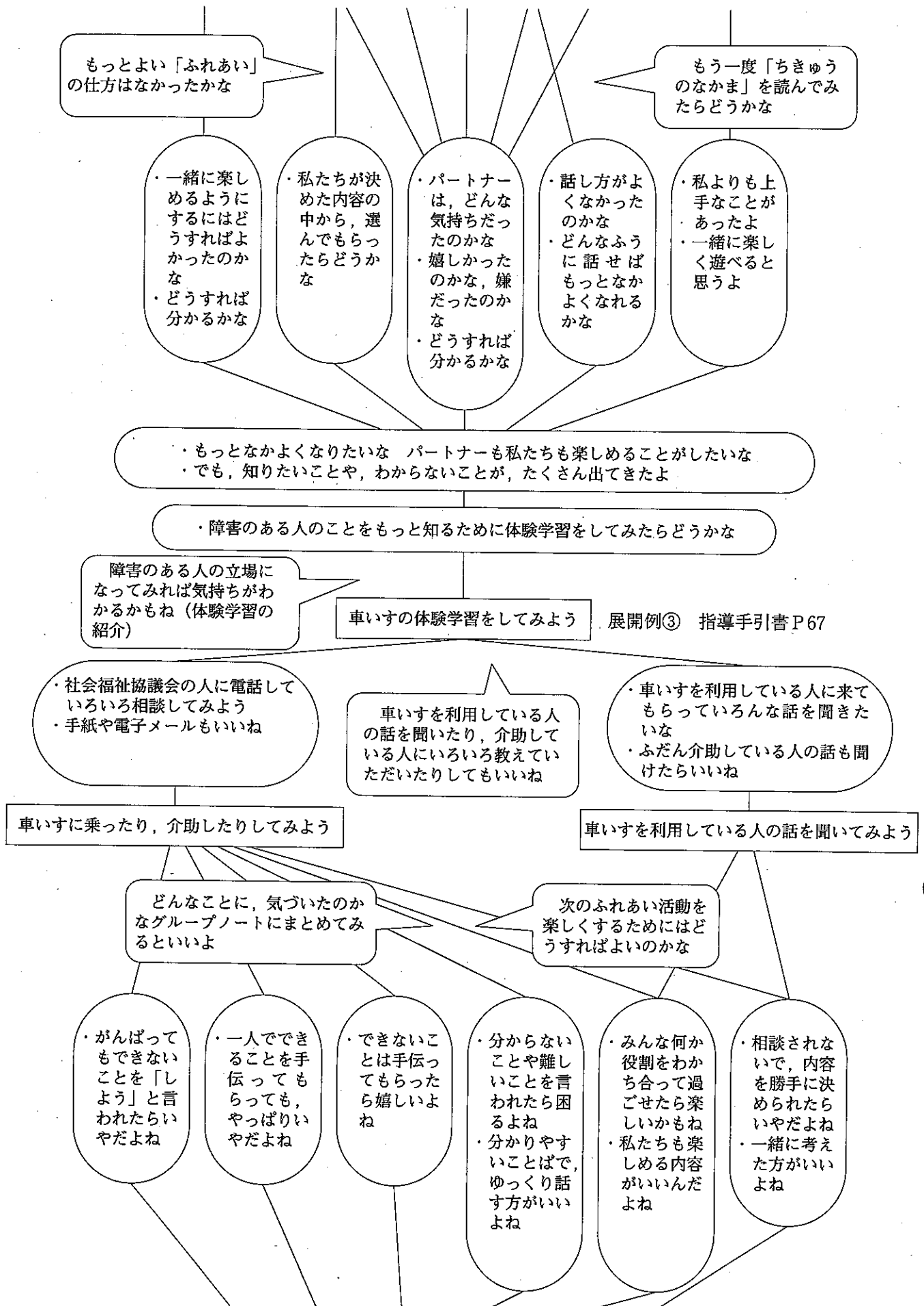
※学習の目標や学習の場、学習計画を立案する際には、障害のある人や福祉関係に従事する人、特別支援学校の教師とともに考えるなど、地域の人々や関係団体との連携を十分に図る必要がある（協同実践）。また、協同実践者として、実際に、授業に参加していただくことについても積極的に検討していきたい。

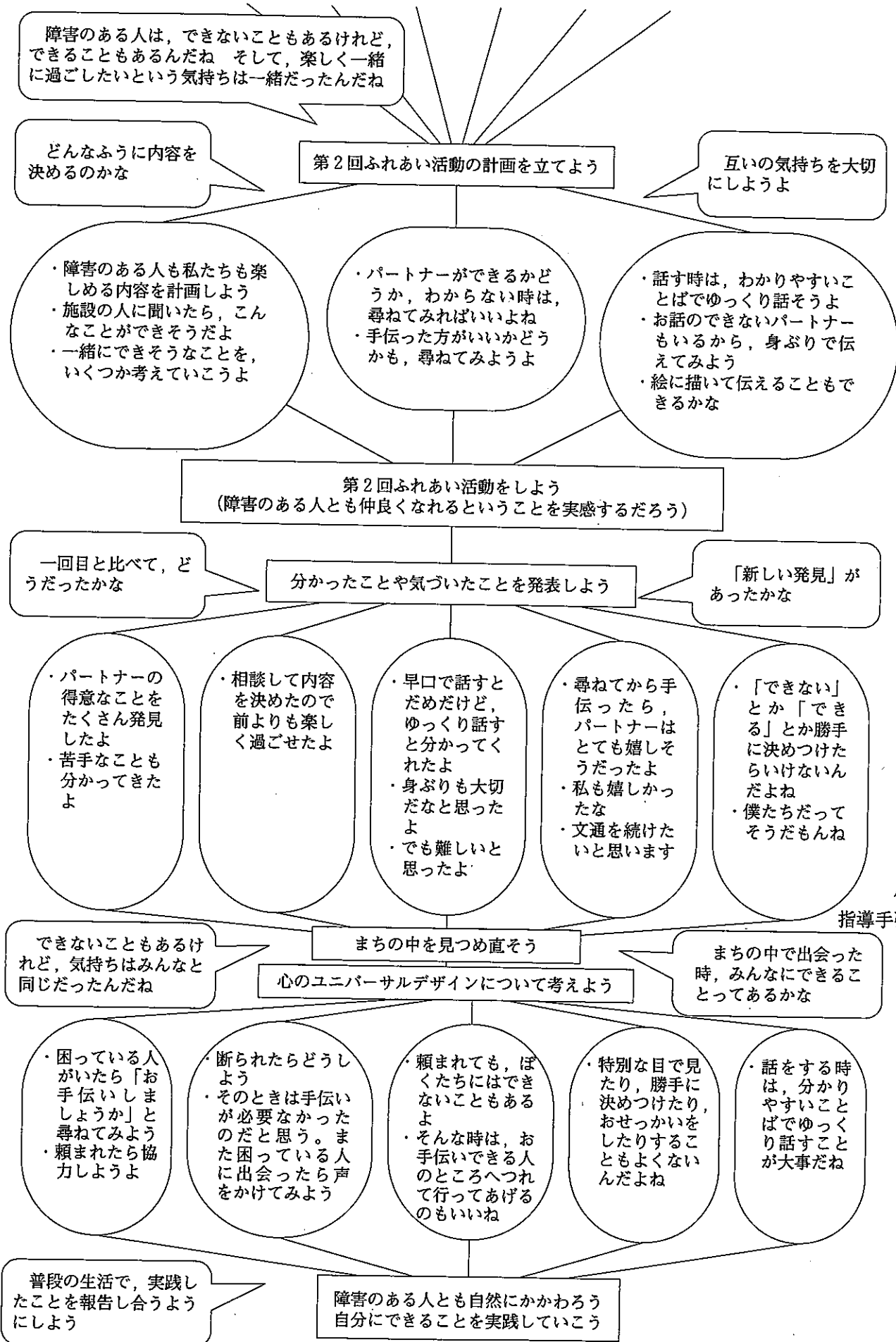
■ 全体構想

- 単元名
- 子どもの発想・思考
- 子どもの課題
- 教師の支援・働きかけ









展開例④

指導手引書 P68

4 第4章 ボランティア活動で幸せなまちづくりを考えよう

(1) 単元名「できることから始めよう」

(2) 目標

- ボランティア活動を実際に体験させるとともに、ボランティア活動の意義・目的・性質について理解する。
- 相手の立場に立って行動することの大切さに気づかせ、よりよい社会をつくっていくために、自分にできることを実践できるようにする。
- ボランティア活動で体験したことを通して、自分の生き方について考えを深める。

(3) 学習の場

- ふれる…自分たちがこれまでに取り組んだ身近な活動を取り上げ、自分たちにもできそうなボランティア活動について考えてみようという学習の場を設定する。
- 気づく・感じる…副読本「ちきゅうのなかま」などの資料を参考にしたボランティア実践者の話を聞いたりして、自分たちにもできそうなボランティア活動の計画を立て、実践の見通しを持つ学習の場を設定する。
- 考える…実際にボランティア活動をするを通して、活動の喜びや気づきを話し合う場を設定する。
- 行動する……グループごとに活動したことや反省をまとめ、報告しあう場を設定する。さらに発展として、日常の学校生活や家庭、地域で生かしていけるよう話し合いの場を設けたり、実践した児童を紹介したりする。

(4) 学習計画（全20時間）：○数字は時間を表す

学習の流れの見方 → オリエンテーション 子どもの活動 学習活動の意欲づけや言葉かけ

過程	学 習 の 流 れ	支 援 (教師のかかわり)
ふれる ⑤	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">人や地域のために、自分にできることを見つけよう</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 40%;">課題探し</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 40%;">活動計画立案</div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ちきゅうのなかま」を参考に、自分たちにもできるボランティア活動はないか話し合わせる。 ○ ボランティア活動についての基本的な考え方を確認させ、活動の方向を見失わせないようにさせる。 ○ 自分のやりたい活動を決めて取り組むようにさせる。 ○ 自分の取り組む活動が決まらない人には「ちきゅうのなかま」を参考にさせる。 ○ 取り組む活動ができそうか計画を立てさせる。 ○ ボランティア実践者やボランティアアドバイザーの活用など支援体制を考える。 ○ ある一定の期間、自分たちの考えたボランティア活動に取り組ませる。
④	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">人や地域のために、自分にできることを、友達と協力しながら工夫してやってみよう</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; text-align: center;">自分のやってみたい活動を決定しよう</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">施設との交流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">清掃・美化</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">収集活動</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 20%;">その他</div> </div>	
気づく 感じる	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">活動を实际に行うための計画を立てる</div>	

考える ⑥	自分のやってみたいことに工夫を加えて、活動に挑戦する。友達や地域の人々と活動をふり返り、次の活動に生かせるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 常に自分の活動を振り返りながら新たな課題が発見できるように、気づきや感想を記録させる。 (「ちきゅうのなかま」p76参照) ○ グループごとに活動を振り返り、自分と地域・地域の人々との関係に目が向くようにする。
	活動を通しての意見や感想を友達と話し合う	
行動する ⑤	活動の内容をまとめ、これからの生活に生かすようにする。	

(5) 学習展開例

① 「ふれる」(5時間)「自分にできることを見つけよう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティアの意義を知り、ボランティア活動に対する関心を高める。 ○ 様々なボランティア活動について、調べる。 ○ 調べてわかったことを発表する。 ○ 学習を振り返り、感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ P61, 62を活用しながら、いろいろなボランティア活動があることに気づかせ、児童が知っているボランティア活動について話し合わせる。他にも多くの活動があることを予想させて、自分にできる活動があるか調べてみようという意欲を持たせる。 ○ 活動の種類だけを見るのではなく、活動の目的や方法・成果などにも関心を向けさせる。自分が出来そうな活動や、やってみたいと思った活動については、より詳しく調べるように指示する。 ○ 発表の内容をふまえて、世界中の多くの人々や団体などがボランティア活動をしていることや、ボランティア活動は「おたがいが支え合う社会をつくっていくこと」なのだというを理解させる。 その中で、実際に自分たちにもできる活動について考えを述べさせる。 ○ 感想の中から、ボランティア活動への意欲が高いものを紹介し、実際にやってみたいという気持ちを共有させる。 	<p>「ちきゅうのなかま」 p61, 62</p> <p>「ちきゅうのなかま」 p63～p75</p>

II 福祉教育指導展開について

<ul style="list-style-type: none"> ○ 身近でボランティア活動をしている人がいることを知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・図書ボランティアの方 ・子ども安全パトロールの方 ・公園など掃除をしている方など ○ ボランティア活動をしている人の話を聞く。 ○ 協同実践者と一緒に学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア活動を、より身近に感じさせるために、児童がよく知っているような地域の方々を思い出させる。 また、その人たちは、「どういう願いで活動をしていると思うか」についても話し合わせる。 ○ 実際に活動している人の話を聞かせることで、ボランティア活動のねらいを、より明確にさせる。 ○ 活動のきっかけや、活動内容、活動の楽しさや苦勞、願いや自分の思いなどを話していただけるように、事前に打ち合わせを行う。 ○ 話を聞いての感想を書かせて発表させる。 ○ 協同実践者が行っているボランティア活動の喜びに共感している感想や、自分も活動をしたいという意欲のあらわれた感想などを紹介し、実践への意欲を高める。 ○ 協同実践者からのメッセージを聞かせる。 	<p>ゲストティーチャー（ボランティア活動の実践者）</p>
---	---	--------------------------------

②「気づく・感じる」（4時間）「自分のやってみたい活動を決めよう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 調べたボランティア活動を出し合い、やってみたい活動について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・募金活動をしたい。 ・使用済切手集めをしたい。 ・地区や学校周辺の清掃をしたい。 ・通学路の空き缶拾いをしたい。 ・福祉施設にお手伝いに行きたい。 ・小さい子どもたちのお世話をしたい。 ・養護学校との交流会がしたい。 など ○ やってみたい活動ごとにグループ（コース）を作る。 ○ 活動計画を立てる。 <ul style="list-style-type: none"> ・活動の日時 ・活動の場所 ・活動内容 ・準備物 ・注意すること ○ 活動計画を発表し合い、活動を計画し、進めていく上で留意することについて確かめ合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実際にできそうな活動の中から、自分たちが実践する活動を決めさせる。 ○ p75を参考に、ボランティア活動を始める前に気をつけることなどについて話し合わせる。 ○ あらかじめ各コースの定員を決めるのではなく、実際にやってみたいという活動の意欲が生かされるようにグループ作りを行わせる。 ○ 「ちきゅうのなかま」p75の「活動の計画を立てよう」を参考にしながら実際の活動日時に沿って計画を立てさせる。 	<p>「ちきゅうのなかま」 p62～74</p> <p>「ちきゅうのなかま」p76</p>

<p>※ (例) 福祉施設訪問のボランティア活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこに問い合わせるのだろうか ・問い合わせるときに気をつけることは何か ・訪問先の方のお話を聞きたいがどうすればよいのだろうか ・活動するときの注意点は何か <p>○ グループで、留意点に気をつけながら計画を見直す。</p>	<p>※ 指導手引き書 p78の「外部機関や団体を訪問する時の留意点」を参考に児童に適切な助言をする。</p> <p>○ 事前打合せ等の日程についてアドバイスをを行うなど、児童の主体的な活動を促す。</p>	<p>指導手引き書 p78資料</p>
---	---	---------------------

③「考える」(6時間)「活動に挑戦しよう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<p>○ 各コースに分かれてボランティア活動を行う</p> <p>※活動コース (例)</p> <p>Aふれあいコース</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小さい子どもたちのお世話 ・福祉施設の方との交流 ・外国から来られた人との交流 <p>B環境コース</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通学路の空き缶拾い ・地区の公園清掃 ・始業前の学校清掃活動 <p>C収集活動コース</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使用済切手の収集 ・募金活動のお世話 ・アルミ缶の収集 <p>○ 活動の振り返りを行う。</p>	<p>○ 「決められた期日に行う活動」、「一定期間取り組む活動」など活動の種類によって方法や取り組み時間が異なるが、活動のねらいが達成できるように、助言する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が自主的に活動できるように場を設定する。 ・安全面に注意する。 ・予算面などについては事前に教師側で対応する。 ・活動した内容についてはきちんと記録するように指導する。 <p>○ 活動のよさを賞賛する。</p>	<p>「ちきゅうのなかま」 p76</p>

④「行動する」(5時間)「活動の成果をまとめ生かしていこう」

学 習 活 動	教師の支援や留意点	教 材 等
<p>○ 学んだことを広めるということを確認し、発表の準備をする。</p>	<p>○ 活動を通して気づいたことや嬉しかったこと、苦勞したことをコースごとにまとめさせる。</p>	<p>発表資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・壁新聞 ・ビデオ ・ペーパーサート ・コンピュータ (プレゼンテーション) <p>など</p>

<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・活動コースごとに発表する。 (学年全体で活動コースごとに) ○ 自分たちの発表や、友達の発表を聞いて、思ったことを話し合い、これまでの活動を振り返る。 ○ 今後の取り組みについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表の時は、声の大きさ、資料提示の仕方など、聞く人にわかりやすい発表ができるように助言する。 (発表の目的意識と相手意識の明確化) ○ 発表を聞くときには、気づきや感想を振り返りカードに記入させるようにする。 ○ お互いの発表を聞いて、気づいたことや自分のコース以外の活動でやってみたいと思ったこと、それぞれのコースの工夫点などについて話し合わせる。 ○ ボランティア活動に対する意識の変化についても振り返らせる。 ○ これまでの活動を自分たちの今後の生活に生かせるように助言する。 <ul style="list-style-type: none"> ・これからもボランティア活動に取り組んでいこうとする意欲や気持ち ・お互いが支え合う社会をつくるボランティア活動への参加 ・自他の心を豊かにする活動としてのボランティア活動の理解
--	--

外部機関や団体を訪問する時の留意点

児童側の留意点

ボランティア活動を行う際には、多くの外部機関や外部団体との連絡調整が必要となる。

「総合的な学習の時間」の内容からも、教師側ですべてのことを準備するのではなく、児童の自主性や主体性を生かして活動することが必要となる。協力をお願いする外部機関や団体に児童が訪問したり、講師の招聘をお願いしたりするときには、児童から連絡を入れることが望ましい。

その際には、ただ連絡をすることを伝えるのではなく、「相手の気持ちを察する」、「相手の立場に立つ」、「お世話になる方に感謝の気持ちをもつ」という「人と人との関係づくり」という観点から、次のような点について児童に考えさせる必要がある。

- (1) お世話になるにあたり、「いきなり訪問したり電話したりすると迷惑ではないか」ということから、相手の予定を確認することが必要であることを理解させる。
- (2) 予約を入れる際は、お世話になる前に相手にとってどのくらいの期間が必要か考えさせる。
- (3) 予約を入れる際に、相手の立場に立ってどのような言葉をつかうのが適切か考えさせる。
- (4) 訪問や電話の際に、相手の立場に立ってどのような姿勢で臨むことが必要か考えさせる。
- (5) お世話になった後、相手への感謝の気持ちを表すために、お礼の手紙を書くことの必要性について考えさせる。

教師側の留意点

協力をお願いする機関・団体とは、児童が連絡を取る前に教員が必ず連絡を取り、活動についての相談をしながら、学習計画を立案することが必要である。また、活動後は児童だけでなく、教員が速やかにお礼の手紙を書いたり、連絡を取ったりすることが不可欠である。

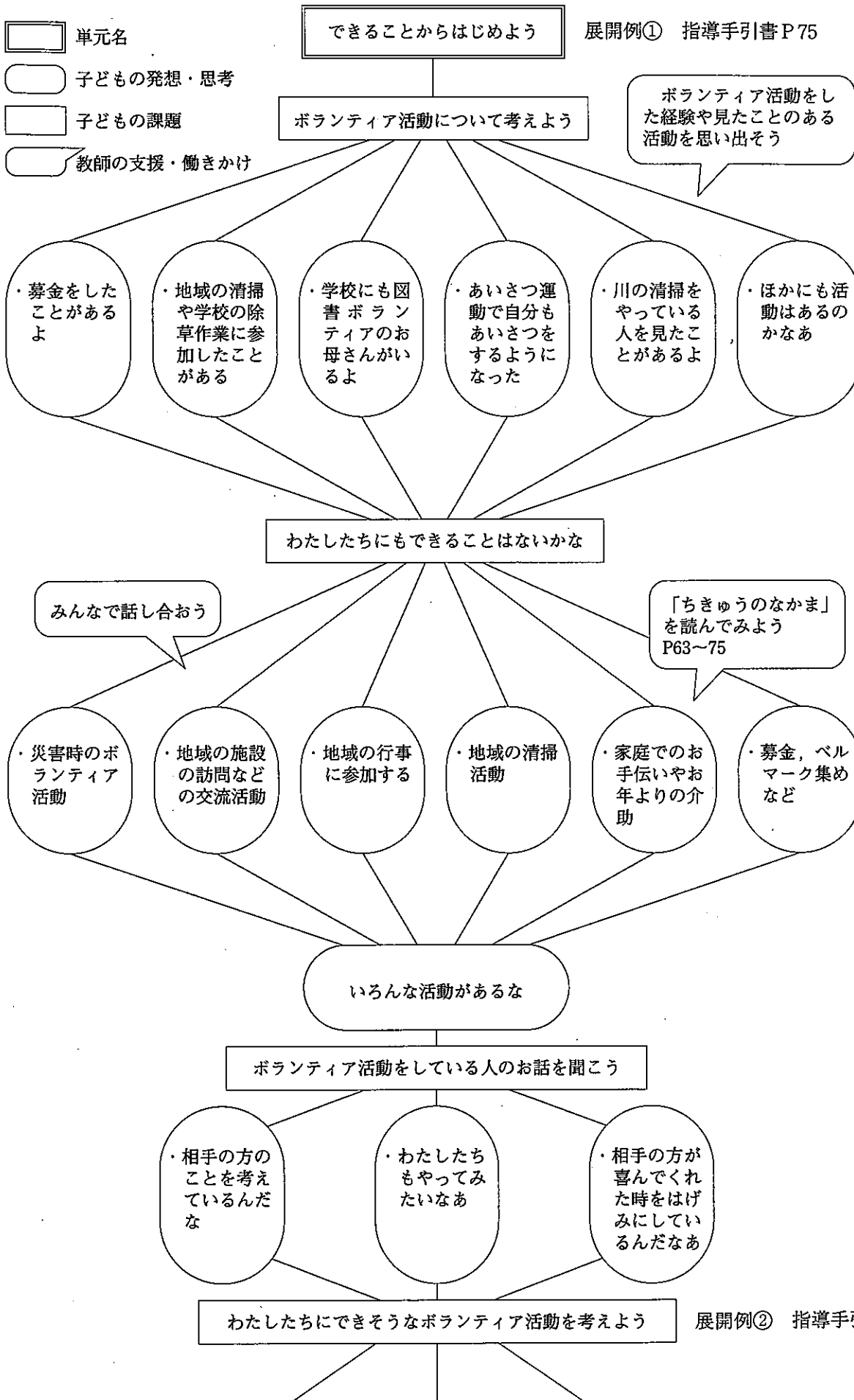
■ 全体構想

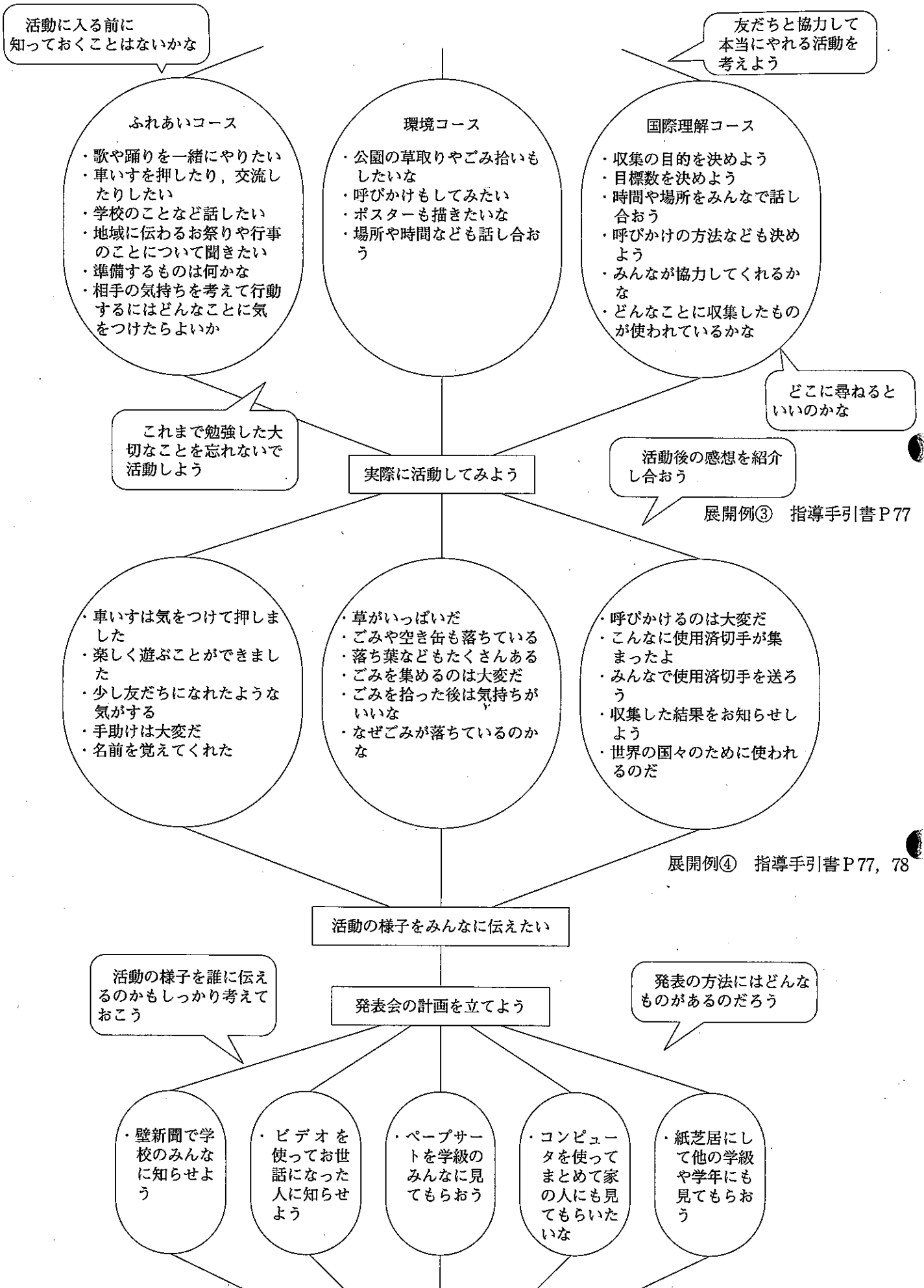
□ 単元名

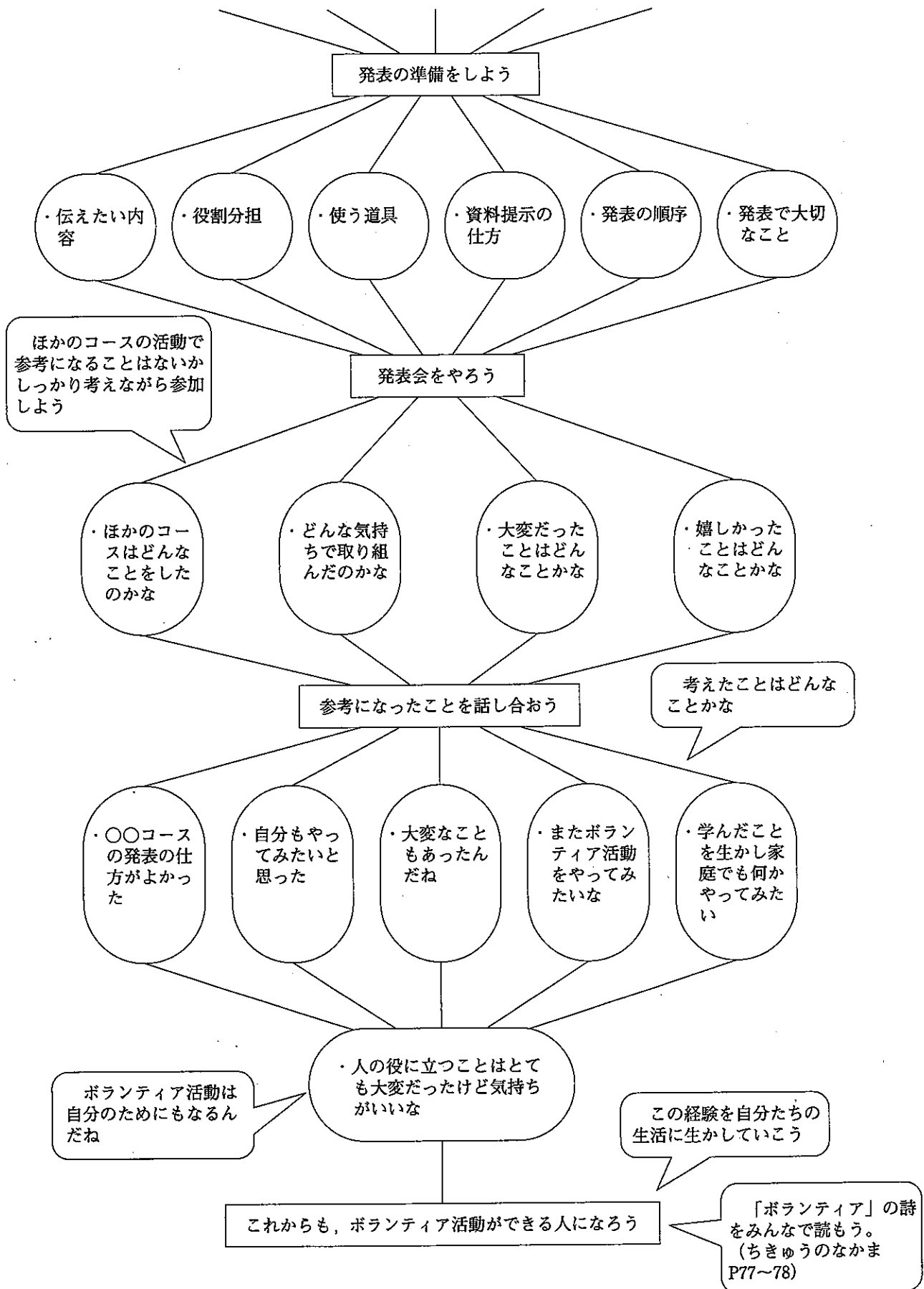
○ 子どもの発想・思考

□ 子どもの課題

○ 教師の支援・働きかけ







5 ワークシート集

ワークシート①

P.58 「考える」(1/6時間) 「お年よりとのふれあいの活動の計画を立てよう」

平成 年 月 日	
お年よりとふれあう計画を立てよう	
テーマ	年 組 名 前 ()
メンバー	
活動内容 活動する日 場所 内容など	
準備物 役割分担	

ワークシート②

P.59 「行動する」(1/3時間) 「活動を通しての意見や感想を話し合おう」

平成 年 月 日	
ふれあいの活動をふり返ろう	
メンバー	年 組 名 前 ()
活動内容	
気づきや感想	
これからの活動に生かしたいこと	

IV

みんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」
指導手引書作成に協力された方々・機関・団体

1. 平成19年度みんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成委員

- 永 富 雅 徳 (長与町立洗切小学校校長)
宮 脇 文 恵 (長崎純心大学准教授)
小 川 睦 (諫早市社会福祉協議会地域福祉課長)
俵 屋 祥 子 (長崎大学教育学部附属小学校教諭)
松 尾 達 也 (長崎市立西坂小学校教諭)
松 本 隆 男 (長崎市立小ヶ倉小学校教諭)
三 岳 美 喜 (グループホームサンハイツ青山所長)
坂 本 晋太郎 (雲仙市社会福祉協議会瑞穂事務所)
西 岡 哲 男 (県立川棚養護学校教諭)
土 橋 美 咲 (長崎市立矢上小学校教諭)
佐々木 正 (西海市社会福祉協議会事務局次長)
牛 嶋 輝 彦 (フリースペースの会遊歩副理事長)
森 正 (com 研究会代表)
川 端 健 一 (長崎市立西城山小学校教諭)
松 本 憲 治 (長崎市立稲佐小学校教諭)
久 部 直 人 (長与町社会福祉協議会地域福祉課長)
山 田 喜 孝 (日本国語教育学会理事)

2. 平成18年度みんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成委員

- 浦 上 保 彦 (長崎市立小江原小学校校長)
末 永 統 子 (県教育庁義務教育課指導主事)
菅 康 弘 (県教育庁生涯学習課指導主事)
松 井 喜八郎 (雲仙市社会福祉協議会国見事務所事務次長)
上 村 智 (当時長崎市立土井首小学校教諭)
池 田 敏 典 (長崎市立横尾小学校教諭)
上久木田 雄二 (当時長崎市立畝刈小学校教諭)
本 村 麻季子 (佐世保市社会福祉協議会佐世保市ボランティアセンターボランティアコーディネーター)
細 田 理恵子 (県立鶴南養護学校教諭)
草 野 恵味子 (長崎市立山里小学校教諭)
野 濱 玲 子 (特別養護老人ホームサンハイツ副所長)

3. 平成17年度までのみんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成委員

- 一 瀬 薫 (当時長崎市立滑石小学校校長)
- 田中丸 裕 司 (当時長崎市立伊良林小学校教諭)
- 高 尾 貴 子 (長崎市立西浦上小学校教諭)
- 田 中 昭 二 (長崎大学教育学部附属養護学校教諭)
- 寺 田 和佳子 (当時長崎市立稲佐小学校教諭)
- 大 槻 麻 子 (長崎市立日見小学校教諭)
- 氏 原 巧 (当時加津佐町社会福祉協議会福祉活動専門員)
- 吉 浦 亜 矢 (東彼杵町社会福祉協議会福祉活動専門員)
- 矢 口 あけみ (サンハイツ銭座事業所所長)
- 川 口 康 孝 (知的障害者通所授産施設「ワークあじさい」施設長)

4. 平成16年度までのみんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成委員

- 松 田 行 雄 (当時長崎市立朝日小学校校長)
- 徳 永 俊 三 (当時長崎市立南長崎小学校教諭)
- 満 留 敦 子 (当時長崎市立城山小学校教諭)
- 橋 本 淳 (当時長崎大学教育学部附属小学校教諭)
- 下 川 めぐみ (当時長崎市立桜か丘小学校教諭)
- 松 尾 みどり (当時長崎市立女の都小学校教諭)
- 今 道 真 名 (当時長崎市立鳴見台小学校教諭)
- 原 英 幸 (当時琴海町社会福祉協議会福祉活動専門員)
- 井 上 洋 子 (グループホームサンハイツ青山)
- 吉 岡 健 仁 (知的障害者更生施設サントピア学園園長)
- 竹 馬 一 (当時小浜町ショップモビリティ情報センターほかほか理事)

5. 平成15年度までのみんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成委員

- 徳 並 さえ子 (当時長崎市立山里小学校教諭)
- 小 山 義 彰 (長崎大学教育学部附属小学校教諭)
- 野 村 紀代子 (当時聖マリア学院小学校教諭)
- 川 口 邦 春 (当時長崎市立南陽小学校教諭)
- 隈 部 徹 (当時グループホーム庄司屋敷次長)

6. 平成14年度までのみんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成委員

深堀 邦成 (当時長崎市立横尾小学校教頭)
木村 国広 (当時高島町立高島小学校教頭)
野本 美和子 (当時長崎市立桜町小学校教頭)
駕屋 美恵子 (当時長崎市立朝日小学校教頭)
近藤 功 (当時三和町立三和中学校教諭)
山崎 直人 (当時長崎市立三重小学校教諭)
田川 雄一 (当時長崎市立稲佐小学校教諭)

7. 平成13年度までのみんなの福祉読本「ちきゅうのなかま」指導手引書作成委員

中野 伸彦 (長崎ウエスレヤン大学教授)
宮原 邦宏 (当時長崎市立上長崎小学校校長)
早崎 保 (当時長崎市立西浦上小学校校長)
佐藤 展也 (当時長崎市立立神小学校校長)
安部 和隆 (当時長崎大学教育学部附属小学校教頭)
青木 瑞恵 (当時長崎大学教育学部附属養護学校教頭)
小澤 明 (当時長崎市立西浦上小学校教頭)
三浦 小栄子 (当時長崎市立茂木小学校教諭)
清永 哲也 (当時長崎市立南長崎小学校教諭)
丹野 平三 (当時長崎大学教育学部附属小学校教諭)
立木 英夫 (当時長崎市立西山台小学校教諭)
江頭 美和子 (当時県立盲学校小学部主事)
高水 靖男 (当時長崎市立横尾小学校教諭)
松坂 眞一 (当時長崎市立西浦上小学校教諭)
瀨上 保 (当時長崎市立式見小学校教諭)
古川 潤子 (当時県立ろう学校教諭)
藤本 敬介 (当時長崎市立小江原小学校教諭)
森園 周子 (当時長崎市立浪平小学校教諭)
石田 幸夫 (当時長崎市教育研究所指導主事)
古子 順一 (当時長崎市立西浦上小学校教諭)
佐藤 雅子 (当時長崎市立小榊小学校教諭)
毛利 宣子 (当時延命園生活指導員)

長崎県教育庁
長崎県福祉保健部
長崎県社会福祉協議会

